主幹・麻生路郎

川柳雜誌

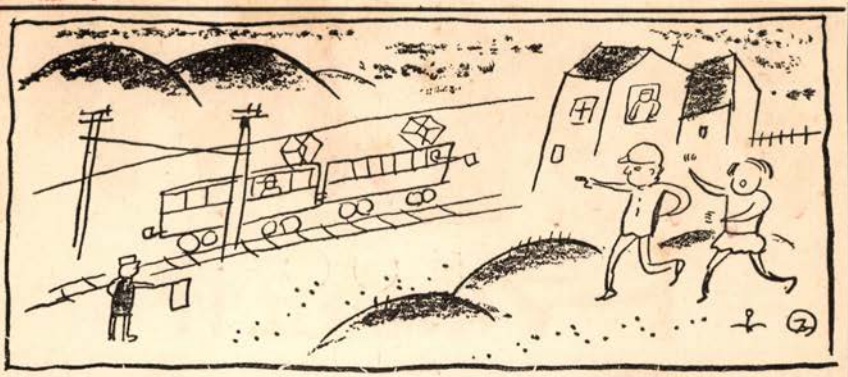
一〇〇號記念

特輯號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和七年五月一日發行（毎月一回一日發行）
第九卷 第五號
川柳雜誌社發行

ヒヤアーク

百、百、何んと親しい數だ。
「ヨオシカアー」「マダヤゾオー」
のカクレンボ時代から、今でも子供
と風呂につかつて、手拭でタコ等つ
くりながら「ヒフミヨイムナヤ……
ヒヤアーク」と數(よ)んで温(ぬく)もつて居る
（宰二郎）



五月の遊行

清新なコース紹介二三

つゝじ（淡輪遊園）

松蔭に見えかくれつゝ、つゝじ、霧島、さつきなど三旬に亘つて遊園地の山をうづめます。やがて藤棚にも房を懸けて、朗かな海のながめとなります。

新　緑（紀淡海峽めぐり）

加太浦、深日間一〇粁餘、海と山とに歪められた紀伊水道の海岸線は、とりわけ新緑の眺望に勝れてゐます。一帶は所謂玄人釣りの本場として、同時に又大阪灣口を扼する要害として知られてゐます。

週末旅行（白濱・湯崎温泉）

凡そ温泉場としての條件にめぐまれ、之が整備の途上にある新興湯崎、白濱温泉は、當難波驛から陸路四時間、賣店へ夕刊の第三版が出てからでも充分お待ち合せの時間があります。春夏秋冬、京阪神のそれに比べて一ケ月餘も魁けると云ふ南紀地方の風景からは、もう初夏のひらめきをさえ窺はれるのです。由來、紀の國は詩の國です。ごなたか今の中お出かけになつて「みかん船」以上の名作をお殘しになりませんか。（目下南海電車から割引通し切符發賣中）

【案内書呈上】

南海電車

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

川柳雜誌一〇〇號特輯號（第九卷第五號）目次

【感想・評論】

灰皿……雁生路郎……（四）
光琳と竹の皮……長崎柳秀……（三七）
春宵語……長谷川一徹……（三八）
醫學常識を評す……淺田右聞……（三九）
似鈍敏感……前田五健……（五〇）

【研究・其他】

裾野を行く……岩本素人……（一八）
百號に因む……森東魚……（三三）
百編から……蛭子省二……（三三）
川柳百度詣……藤里好古……（四六）
イヤな詠史狂句の例……岡田三面子……（三六）
路郎氏の近作から……安川久流美……（二一）
滿洲國川柳行脚……大島濤明……（四三）
北陸川柳史……窪田銀波樓……（三〇）

柳の架……長野吉高……（三）
柳壇の歴史的會合……關東川柳團を迎ふの記……五三）
初夏の街頭へ……川柳の夕開催……（一六）
初夏二題（畫）……（三）……（二四）……吉田清……
ひろしさんナンセンス……（岩崎柳路）　太陽のかけら……（麻生葭乃）
短章三篇……（松丘町二）　女の瞳に映つた柳人……（松盛琴人）
筆のたわごと（吉田水車）　環境（田中都之介）　酒から見た川柳家（葭乃）
地下鐵
西之町MEMO……橋本綠雨……（五六）
編輯の窓……路郎生……（七四）
表紙（ヒャーク）……柴谷宰二郎
題字……麻生路郎

【創作】

不朽洞句稿……麻生路郎……（七）
川柳塔……同人選……（四一）
第一線……（八）　春秋點……麻生路郎選……（二五）
近作柳樽……安井ひろし選……（二六）
光耀抄……麻生葭乃選……（四九）
一路集唄……高橋かほる選……（五六）
獨身……關本雅幽　木村晃卓共選……（五八）
粒々集……（四三・五二）　各地柳壇……（六〇）

灰皿

麻生路郎

百號

大正十三年二月十五日に創刊號を出した我が「川柳雜誌」が昭和七年の五月で號を重ねること實に壹百に達した。基礎が出來たと云へば云へるし、いよ〳〵これからだと云へば云へないこともない。

が我等も世の常の人々が祝賀する百といふ數字に對して敬意を表し、至極輕いこころもちでよろこびたい。

創刊時代の同人

私はこのよろこびを共によろこんで貰いたい人々を創刊號の同人の名に求めた

柳路は今、撫順にゐる。風人は何處にゐるか知らない。史風は消息がない。二柳子は今の綠雨である。松雨は死んだ。啞人は鄕里山口縣に歸つて作句を絕つた。一聲は今の朝陽で近來氣勢があがらぬ。徹底郎は電車にふり落されて死んだと聞

いたが、その眞相がハッキリせぬ。かほるは至極健在で酒量があがつた。古城山も消息がない。蘆穂は年賀狀が來るばかりだ。露太樓も賴りがない。夜調も廣島へ行つたきりだ。佳扇は噂も聞かぬ。洲馬は昨年亡くなつた。剛山はどこにゐるかさえ知らぬ。助六とは時々會つて酒を呑むが、もう一年も會はぬ。飛水も消息がない。零骨は名吟を遺して同人の誰よりも先に死んでしまつた。一洲も賴りがない。光太樓の消息も聞かぬ。輝翠も年賀狀組だ。耕鹽も何處にゐるのか知らぬ雅幽は一時社を退いて僕を悲しませたがその後復活してくれた。

斯う拾ひあげて見ると創刊號以來、十年一日組は綠雨とかほるであり、それに次ぐのが柳路と雅幽である。もう再び會へない人々に零骨、松雨、徹底郎、洲馬がある。今日柳壇に雄飛してゐる我が社の盛大さを見るにつけても、創刊時代の同人の名を忘れることの出來ない私は、喜んでいゝのか、悲しんでいゝのか。私の眼の底には熱い〳〵涙があるのみである。

私は惠まれてゐる

百號が出た。

——いろ〳〵の意味で、生みの苦しみは一號々々加重されるばかりである。雜誌を出してゐるうちに、誰でも陷入る壓力それを私はおそれる。墮力で書く原稿、それも私はおそれる。今、柳界にとつて一番おそろしいことはこの墮力であらねばならない。

それで雜誌が一日　二日遲れても、印刷屋に叱られても、綠雨君が情けなさうな顏で私の枕邊へ坐り込んで、ヂッと私のペンを走らすのを眺め入つて居ても、墮力で書くことだけは絕對に避けてゐる

墮力で書かない私の原稿は時に非常な澁滯を來たす。みんなに迷惑をかける全く泣き出したくなるほどいら〳〵することがある。そんな時に、散髮に行つたりお湯に入つたりして、無理におちつかうとして、更に肝癪玉を寢床の中で破裂させ一文の執筆でもその內容、その表現に惱み拔く。

私が病氣に襲はれるのも、生活に脅やかされるのも、斯うした惱みを惱み續けるからである。

しかし私は私を心から支持してくれる多くの知己友人を持つてゐる。私のためには衣食を削つて何等不平をうつたへない妻子を持つてゐる。駄目だ〳〵と苦りきつても、甘受してくれる同人や社友を持つてゐる。その點に於て私は惠ぐまれた男であると信じてゐる。

總ては爆彈的に

昭和七年の卷頭に「我れ子規たらん乎」と題して一大抱負を語らんとしたところがタイトルだけ見て妻が驚いてとめた。僕は默つて止した。

一月十六日に神戸支部で「爆彈を抱えて來る」といふ演題下に、川柳人は今や危機に臨んでゐる。といふのは今日川柳が漸く社會に認められては來たものゝ、下手にまごつけばそこに一頓挫を來たすのは火を睹るよりもあきらかである。今こそ眞に自重すべき時であり、より一層煉磨すべきときである。にもかゝはらず川柳人の多くが現在に陶醉して何等深き

省察をしなかつたならば川柳は永久に我等の手から離れて行かねばならぬ。

私は外部の壓迫よりも内部から來る腐敗をより以上懼れると病軀をおして悲痛の叫びをなしたが、私の心境を知らぬ一部の人々は川柳外の話をしたと稱し、一部の人々は自己のやましき行爲に思ひもよらぬ誤解をなしただけに全く燒石に水をかけた如きありさまであつたばかりではなく、見當違ひの解釋から罵詈讒謗をあびせかけられ、煮湯をのまされた。

しかし、私はそのためにひるむものではない。斯うなれば會ては味方たりし死屍を乘越しても戰線に跳り込むのが私の性格でもあり、生命でもある。

私は魂で生きる。これは常に私の口にするところである。私の主義主張を援けるために多くの同志は躓き斃れてゐる。それ等の人々を犬死させぬためにも私はその主義とするところを貫徹しなければ止まぬ。

四月上旬關東川柳團を迎えた時も私は單なる挨拶で引き下らず、我等の主張の一部を述べ、全日本川柳家にその實現を期して貰ひたい旨を附言しておいた。

更に金澤に飛んで、その爆彈の破片を投げた。

私の仕事、川柳社會化、川柳の質的向上についての仕事は社會的に觀れば實に地味な仕事であらう。

それは軍人が萬歲聲裡に戰場に送られてゆく華やかさはない。壯圖半ばで斃れたところで戰歿者に對するが如き國民の同情もない。醫者がバチルスで死んだ程にも騷がれない。そこまで考へて來れば私が川柳の社會化運動に身を賭することが單なる名譽欲からでないことは充分うなづけるだらう。

私は川柳を愛するが故に、やむにやまれぬ心の跳躍のために私は動きつゝあるのである。

私は近く一轉機するだらう。深い考察の下にそれは行はるべきであるから、今此處へは具体的には書かない。しかし私達川柳人の一人々々が、日本の芭蕉、日本の一茶、日本の子規、日本の川柳にならなければならない。伊賀の芭蕉、信濃の一茶、松山の子規、江戸の川柳にきよくせきしたくないし、させたくない。誰も彼もフレー〳〵で永生の句へと突込んで行くべきだ。爆彈を抱えて飛び込む瞬間的努力の尊さよりも私は苦難を抱いて果てしらぬ幾歲月を惱み拔く勇士たらんとするものである。そのための同情は一切不必要だ。

百號が何處まで續くか私も知らない。

私が第一の叛逆者となるか、それも知らない。が、ただ私の後繼者の肩へ絕大の重荷がかかることだけは想像し得られる。

不朽洞句稿

麻生路郎

佐渡支廳長に榮轉されし利生君に

榮轉のうれしき四十五里となり

筱川支部五周年を祝して

日東より出でゝよろこびの庭に立つ

北國路に入りて

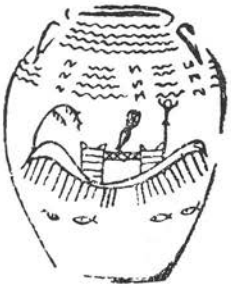
單線のこんなところに櫻咲き

翠夢君石上神宮に常夜燈を献ず

神宮は尊し我等呑む斗り

安產を祝して

豐葦原瑞穗の國の赤ン坊



第一線

路郎選

上海の戰火の底のでかめろん　亂耽
厘と云ふ字へ眞劍な空瓶屋　同

父の死を悼みて（二句）

淋しさをわが名に見出す悔み狀　同
ペンを持つ手が算盤をはじきゐる　同

臨終

眞空な頭になつた枕許　同
春の磧に赤き洗濯　同
戀の瞼毛の乾く特急　同

百號記念を迎へ路郎師へ

病めばとてあをき頬にぞこもる熱　丹路

仁川にある母校附近にて

春の大氣の野つ原でSHOBEN　同

ひろしさんナンセンス

岩崎柳路

私の東京時代にひろしさんが中央美術社の用件で二三度上京された。歸阪の時死んだ千代二と私と東京驛へ見送りに行つた時、勝手を知つた私は二等車へ先きに乘り込み、座席を見つけ窓から呼び込んだ。丁度前の座席に九州へ巡行に行く有名な巨人 出羽ヶ嶽が座席一杯にまだ狹まさうに座つて居た。とつもない巨人である。早速ひろしさんへ怪物の居る事を小さい聲で出羽が出羽がと繰り返して知らせたがひろしさんは妙な顔して私を見て居る……私はハッと思ふた。そして氣の毒にも思つた。何んと成ればひろしさんに出羽を出齒と聞こえたらしい。私は出羽ヶ嶽の目の前で其の辯明も出來ぬ故、混雜中の事とて話題を外らして發車ベルの合圖に握手をして惜しきお別れをした。

歸りに千代二と其話をして大笑ひ。今頃品川邊りで差し向ひの出羽ヶ嶽を ひろしさんはつくづく見て、デバを知らせた眞相判明して苦笑して居られるだらうと噂しながら銀

父の歿後兄妹七人めづらしく集ひければ

お母さんを眞ん中にして春らしく笑ひ　丹路
ごことなく狐に似て淋し夕刊を賣る子　同
撒水車の如く春の女が舗道ゆく　同
鍵さげた人と空家の窓から見　閑生
食卓へ頬杖をして花見客　同
歸りたい我に龜まだ首出さず　同
女客の鼻へ自炊の飯が焦げ　同
沈默の威嚴をないがしろにされ　同
毒藥が眼の先にあり青い顔　綠雨
仲買のするごい顔に氣がまける　同
内風呂にゐても電話の電報の　同
麥畑老父の影がありがたし　同

關東川柳團を迎へて

歸りたくなるほど江戸の人に會ひ　琴人
奇緣ですワと白粉を塗つてゐる　同
喪服着た二十三四のいた〳〵し　同
君戀しなぞやたらある吸取紙　同
靴濡れぬ日はなしこゝの路次も雨　町二
我といふ寂しきものへ降る煤や　同
プロレタリアの足の裏にも日が當る　同
櫻咲いて埃のなかの酒さかな　同

座へ出た。但し此の事實ナンセンスは、今日迄ひろしさんに秘して居た。他分ひろしさんも其の時の事を忘れて居られるであらう。

ひろしさんよ、怒らないで下さい　四、三、夜

太陽のかけら

麻生葭乃

路郎は昔から金に緣のうすい男である。黄金の山を築くよりも、黄金の水を呑んで、氣分を愛する人間である。纒つた金が手元に出來かけると、直ぐに奢りたくなる。たまには片肌も脱いで見たくなる。

此太陽のかけらである次男のアートは、小使をなしくづしで使ふ事を知らない。十錢やれば十錢のボールを、二十錢やれば二十錢のピストルを氣前よく買つて終ふ。私は此無駄使屋に貯蓄心を起させる前提として、先づ蒐集慾を奬勵した。

アートも初めは乘氣になつて、エメラルド色の軍艦を造るために、バットの空箱をためだした。私達夫婦で日に三個や五個のバットが空になるので、小さい机の抽斗は半月も經たぬ中に、ぎつしり詰つて終つた。別に入れ物を提供しなければと思つてゐると、或る日ごや〳〵と五六人の友達を呼んで來て、抽斗のバットを殘らず分配して終つた。此頃では座敷に散らばつてゐるゴールデンバットは見向きもされなくなつた。此親にして此子ありで私の名案はかくして遂に徒勞に歸した。

○

卵賣つては死金を積む　雅幽
易の灯にショール汚れて立つ女　同同
行李出して邊り靜かな鄕心　同
食ふ爲めの手段に遠慮要るものか　新水
帽子まぶかに北濱で損をする　同
賣れば損賣らぬば損といふ惱み　同
破産する明日とはなれりうどん食ふ　愚陀
衣裳美學へ春風を卷く

父を喪ひし亂耽へ

鼻の印象に春うそ寒し　同
一ト誕生アルバムに張る眞つ裸　柳路
カラーをゆるめ取敢へず一本つけさせる　同
春の踊見覺えのある石段　艸樂
四十キロを春の埃にまみれさせ　杏三

○

公然と讀める時間は寢てしまひ　鶴峰
散髮がのびて剛染に出會ふなり　同
電燈が先づ俺達の目をかすめ　同
忙がしい胸打ちあけず座つてゐ　同
默つてすつくと座席をゆづる　同

關東川柳園を迎へて

一つづゝ藝のありそな顏ばかり　同

冬の日は短かい。皆で食卓を圍んでゐるとパッと電燈がついた。子供達の顏が急に明るく見えた。座つたら胸すれすれに食卓の端が來る一歩のとなりがアートである。喋るたんびにお箸を置いて身振手振を交ぜる。急に聲を太くしたかと思ふと、

「出來ました。出來ました。所は千本通四丁目ひさご市場前のひさご湯、風邪をひいても溫泉へ這入れば一時間で癒る。又たゞ風呂は鹽がちよつと這入つてゐて、海水浴のかはりにもなる。又首がとんでも直ぐにひつつくひさご湯……」

とちんどん屋のおつさんもどきで首を振つた。晩餐會の花形アートちやんはいゝ氣持ちになつて御飯でくだをまいてゐる。でんでん虫の子は小さくても貝殼ははなさない。

短章三篇

松丘町二

肉塊

父の弱氣と
母の癲癇を
宿命的に背負はされて
「皇帝」樣の足の裏から
生れてきた私なのだ

明日の米のために
昨日の汗をきて
地を忘れ
空を忘れ

春の旅（三句）

夫たり妻たり春の温泉は沸り　二南
梳る髪の艶さへ春の旅　同
妻の指す圓月島に帆が白し　同

新生活（二句）

新妻の鏡に立てばおかしがり　同
國旗ふわりと主人在宅　同

長男修一生まる（二句）

産聲にわれ父として父として　綠之助
欠伸なごして人間の卵なる　同

濱田龜山旅館にて

濱田川の灯に見る春のせゝらぎよ　同

濱田築港

女十八土工の中の生活よ　同
沈む陽へトロッコの音低くかりき　同
鼻くそを燒けば臭ひをよける妻　計加
煙りの輪フッ〳〵吹けば數える子　同
抜けたやうな顔してゐるがえらいのか　同
さびしい心も知らず浮かれる奴、奴、奴　同
肥桶の肥がしるこであつてみい　同
一口もコーヒを飲まず催促だ　明珠
笑ひをば探がしに來たが邪魔がられ　同
辛棒が足らぬといふて可愛がり　同

心をわすれて——あはれ
人間の持つ醜さはみんな持つ
肉塊の私なのだ

泣く魂

ステッキ振ればステッキに
石をほれば石に——音
それは空氣の唸りかや
いや〳〵わたしのすゝり泣き

戯詩

五斯タンクへ
眼鼻を書けば
資本家の顏になる

鐘紡の煙の下で
咲くバラよ

亂耽や雅幽——
都會の憂鬱へ
誠實な眼を向ける

廣い窓緣で
女の腕が物語る
愚陀の感覺

今日も電車や
バスの中で
五人の女を
目姦した俺

「せんりう」とは

病夫を養ふ女給とは知らなんだ　同
大掃除聞けば捨てよといはれたり　同
女房の怒つては勝ち泣いて勝ち　春
戀でなし笑ふ女給とゐたいだけ　同
義捐金誰の無心もよせつけず　秋
子をなぐる母とは見へぬ長襦袢　同
おばアさん咳入る煙草やめられず　同
にらまれてやり度い程の美しさ　同
煉炭の灰と炭火の灰の差よ　奇可愛
ちつとその鐵亜鈴なと振るんだね　同
目覺むれば矢張岩垣俊雄なり　同
亂闘の跡にも似たり子澤山　水車
難くせをつけて一圓ほご値切り　同
お詣りに雨を氣にするあほらしさ　同

奈緒美君の死を悼む

君眠るとこ霜よやはらげ　同
想像を女にまかし雨をきゝ　靈壺
同情をすれば女給の身を忘れ　同
芽柳に夢二畫くの傘の人　同
失職は酒の肴の味を賞め　同
處女らしうするなよ誰もゐないから　同
素足から誘惑せらる春の川　夕鐘

所詮
十七音字の
道化師さ

女の瞳に映つた柳人

松盛琴人

東京から川柳家が大勢來られるので、あの日梅田へ顔を見に參つたが、誰れが誰れやら薩張り判らなかつたと小妻が言ふから僕が皆胸に名が書いて有つたから、判りさうなものだと云へば、女がさう厚ケ間敷く前に出て見る譯にゆかぬ、背中にでも付けると見よいがと、最もな云ひ分。これから婦人に名を知られたい柳人は、名前は背中にぶら下げる事だ。

○

大阪の水府さんは、どんな方かと思つたら肥つてゐる人れ、忙がしさうにあつちこつちに立つて、まるで寫眞屋さんの樣だつたと。今度は煙草專賣局員と。云はれるかも知れぬ

○

雀郎さんといふ方は、よくしやべる人ですかと問ふ。ナぜと反問したら、でも名前が雀郎と云ふから？……、僕が靜かな無口な方だと說明したら。それなら糊をなめた雀れ。

では僕と一緒に乘つてゐた、三太郎さんはと聞いたら、大江山の酒呑童子の樣に髮を長くしてゐる方かと言ふ。爭はれぬものだ、お酒好きは何處かに形を現はすものだ……

私が家の戸をたゝきて

ちゝはゝが春の霞へ出でたまひ　同
二階あがれば女房襦袢着換へてゐ　裸人
酒は止めても金の殘らぬたよりが來　同
スリッパがきれいに並ぶ性病科　同
ABCなどと看護婦菜を擇び　濁水
春雨を起きそびれてる若い妻　同
お美味しさうガソリンガール注いでゐる　同
たんぽゝやよめなやなたね乙女の眼　鮎美
赤貝の肉現實の生々し　同
チョッキが立派だ春の風暖し　華水
孫の手で扉すつかり開けられる　同
乘り合へ連れ押込まれ〳〵　紅
お隣は錦紗づくめでお出掛けよ　同
駈落へ風は仲人の樣に吹く　小柳
金だらい磨けば春の陽をまねき　子
うらやましがる妻を大きく叱つて居　同
險惡へ吹いたよびこのおそすぎて　變人
日光で自分の金を費ふなり　同
自殺者の心理も知らず嗤ひたり　觀月
春雨の今宵木魚はふさはしき　同
木魚叩けば　蒼太
しんみりと叩けば昔も　ON-MOKU-MOKU　同

筆のたわごと

吉田水車

彼と煙草、彼は煙草をよく喫ふ。それが決まつて「胡蝶」であるのが彼が相當の資産家であるために世の常の譏を受けるのであるが彼は云ふ、俺の好きな煙草がたま〳〵値が安いだけで安いから喫ふのではないと。彼がもし敷島や昭和を喫ふてゐても人は無關心であらう、が安いものを喫ふことが却つて注意を惹くのである、川柳作句心理も蓋しこの邊のものではあるまいか。

新名物傘踊？自動車が來る、持つた傘を車と行きずりにサットひろげて傾け下半身を庇ふ、これが大大阪雨時のかなしむべき街上新風景なのである。勿論傘を楯に泥の飛沫から逃れる戰術であるのだが、それが電車の停留所と來るとむしろ美事で、蛇の目がある番傘があるカウモリがある。これ等が一齊に無意識の訓練から体勢鮮かに例の傘踊をやる新曲春の踊と云ふところ。

川柳になる漫畫、川柳はよく漫畫にされるが漫畫にも川柳になるのがある。

「待てば極樂急げば地獄」と書いた建札の下でルンペンが寢てゐる漫畫があつた。これは交通標語から來たものだが も一つ川柳的生命を與へると。

極樂の札を自動車刎ねとばし

「馬鹿ッー今日はいゝんだヨ」と驅け出さんとする犬を獵裝いかめしき主人公が叱り付けてゐるその向ふに鳥屋が見へてゐると云

我れ病めど櫻の花に異狀なし　晃卓
善人は金にそむきし如く居る　同

廣江天痴人君の第三子誕生

頬ずりをすましていそ〳〵蹴をかつぐ　都之介

鐵兜を製造する大阪の從兄へ

責任に似たる鐵兜の重さ　同
あかえいの性根わすれた煮られやう　一杉
石鹸なぞ第一素直すぎるなり　同
情慾が熱計表に亂舞する　翠夢
レインコートを買ひたいと思ふ春の雨　同
くらやみへ笑を投げた春の宵　夢裡
降參をした心境へ金を吳れ　同

◇

蟻が見上げるには大空高すぎる　勝二
飯の無い事は知つてる腹ン這ひ　同
頬杖へ豆腐やみんな通りすぎ　同
決心は灯を横顔へ見て戻り　同
假裝した夫人へ何か起りさう　同
雪降れば降るとて子等は家に居ず　不然
出來たかと言ふは句のこと雪の朝　同
うちの子も斯うなのか知ら湯の子供　同
二枚目のへらから春の日は延びる　同
肩幅の狹さも金のない姿　翠峯

ふ漫畫がいつかのアサヒグラフにあつた。

獲物あり鳥屋へ用はないのなり　四、五

環境

田中都之介

心易いカフエーがあつて毎晩の樣にコツク場へ出入りしてゐる中に何時覺えるともなくカツの燒き方を敎はつた。運送屋になつてからかれこれ五年になるが馬の馭し方や荷造りのコツを覺えてしまつた。別に自發的に覺へ樣としてゞはなく唯環境から自然に習はせられたのだ。私の川柳にしてもそうであると思ふ。やゝ昔のことではあるが私が川柳を始めたのも勿論强請的に誘めるものもなからうが、其の頃の私の身邊が全く柳味的な雰圍氣に包まれてゐた爲、これと云ふ意味もなく作句を試み始めてゐる。又周圍から刺戟を受けなければ進歩と云ふ事はむづかしからうし、そうした雰圍氣から私は除外されたら、廢頽期と迄にいかぬにしろ、かなりの苦痛に相違ないと思ふ。柳誌や句會はよき刺戟としてその流派の如何にかゝはらず、多數のそれ等に接しやうと勉めてゐる。

酒から觀た川柳家

畏乃戲作

町二　酒の心眼にほのかなる町二さん
かほる　素面でも女形のしぐさ堂に入る
柳秀　のめば醉へは伊丹幸大和屋渦を卷く
山雨樓　「然し、奥さん」と冷やで行く猪口の酒

夕焼へ双手を擧げし男の子　同
前借の金がまたもや酒を呼ぶ　同
春の日の永さに呑んで戻る父　耕民
珠數さらり今日を拜んでそれでよし　同
三勇士俺にも其の血有ること云ふ　同
ぬかるみを靴のかゞとの缺けてゐる　大夢子
バス賣のかばん仰山金があり　同
若き日の我にもあつた街なれど　同
母の名が慰問袋を艶めかせ　柳兒
妻の名で實話原稿料になり　同
ごの記事も死線を越した特派員　同
老妓また浮氣の膝こ悔いてゐる　民郎
食ひ過ぎた帶の長さの面白し　同
厄年の無事な寢床を見つけたり　同
今日こ言ふ生命線へ突き當り　露斗
大根こ鰯で一家無事なここ　同
立小便母を待たせて男の子　沒食子
只まろく〳〵が父を癒れさせ　同
技巧こは女眉毛を塗るに似る　如空
合掌の後ろが寒い若さなり　同
資本家の門へ足駄の雪を蹴り　湖山
打荒む心押さへる子が二人　虚白

素人　醉ふた字の便り梯子のつゞきらし
琴人　太刀打ちの出來ぬ甘さを見せる酒
綠雨　呑み口はいつ下戸ばなれせし酒ぞ
革郎　君呑めば乞食も酒にありつかん
三太郎　脱稿を急ぐ中なる暮の酒
久流美　酒も少しはいゝでせう河岸の霧

川柳雜誌社籔川支部

創立五週年記念大會

春は出雲にもめぐり來り、めぐり來り、我が支部も滿五週年を迎え左のプランにより記念大會を開くことになりました。地方の雅友悉く お集りを願ひたい明日の進軍を期すべき意義ある 半日を送りたいと考へます。當日は是非貴下の御出席をお願ひ申上げます。

島根縣今市町

川柳雜誌社 籔川支部　**大地吟社同人一同**

尼　綠之助

會期　五月八日午後一時
會場　今市町驛前紙屋旅館
會費　二十錢

初夏の街頭へ

▽わが社が多年主張して來ました川柳の社會化を一層徹底させるために「川柳雜誌」通卷百號記念を好機として茲に「川柳の夕」を開催することに致しました。この壯擧は本年一月の本社句會に於て、同人庄萬よしが主唱したのでありますが、社としても從來こうした希望は常に抱いておつたのでありまして、今回機愈々熟した次第であります。

▽川柳は今尙短歌や俳句に比して文壇的に下積なのでありまして、われ〳〵川柳人として甚だ遺憾に堪えないところであります。川柳家がいくら眞劍に眞面目に句作し、研究しておりましても、社會一般の川柳に對する認識は甚だ淺薄皮相であつて、多くの人は、川柳と云へば只面白おかしく、ふざけた見方をするもの・社會や人間のあらぱかりを睨んでゐるもの、肩の凝らない閑文字低級な併も通俗的な滑稽文學——と云ふ位の理解しかないやうであります。これは川柳家以外の人達が大變大まかな皮相な觀察に停滯してゐる結果でありますが、一面狂句百年の崇りと、川柳家それ自身の對社會的啓蒙努力の足りなかつた點も見逃すことは出來ません、川柳家自体の負ふべき責も少くないのであります

▽その意味に於きまして本社今回の催しは確かに、劃期的効果のあることを信じて疑はないのでありまして、その宣傳方法に於きましても、ポスターにパンフレットにプログラムに其他同人社友の同窓或は交友關係に、懸命の努力を拂ひまして、街頭進出を試みてゐるのであります。恐らく關西は勿論全國數十萬の人士に川柳雜誌社が主催する「川柳の催し」あることを認知せしめ印象付けたことゝ思ひます。殊に會場として、その場所に於てその設備に於て大阪市中斷然トップを切つてゐ

川柳の夕

五月四日午後七時
於朝日會館

司會　高尾亮雄
挨拶　庄萬よし

A　川柳を語る

女性は躍る　川上三太郎
川柳にあらはれたる家庭人間苦の藝術　岸本水府
　　麻生路郎

B　長唄

新曲浦島　唄　杵家七代
　　絃　杵家彌七
　　絃　杵家七幸

—休憩—

C　こども舞踊

山根舞踊研究所

る「朝日會館」を選んだことは、實に誇るに足るべきものがあると信じてゐるのであります

▽この催しが川柳各位の絶大なる聲援と、社會一般人士の理解ある賛同とに依つて、盛大なる成果を擧げることは、獨りわれ〳〵川柳家の責務として熱望するところばかりでなく日本の近代文化の一分野を劃する企として刮目に價することであらうと思ひます。川柳家諸君が萬腔の熱意を以つて壓倒的な聲援を傾注せらるゝであらうことは、元より切望して止まぬところであります。

▽「川柳を語る」三氏の講演は時間の都合で、一人に付精々二十分内外しか話して頂けないのでありますが、三氏は何れも現在日本柳壇の第一人者を以つて任ずる方々でありますから、必ずや有益にして意味深いお話が伺へとことゝ信じます。

▽「長唄」の出演者は帝都の斯界で有名な三味線の師匠、杵家彌七氏がその一統と共に本會の爲めにわざ〳〵來阪せられたのでありますから、同好の趣味ある方々は是非おたのしみを以つて待望願はれることゝ想ひます

彌七と云ふ男名前である爲め、ある印刷の原稿に杵家彌七師とあるのを、杵家彌七郎と誤植されて校正子を面喰らはせたこともあります。

▽次に山根舞踊研究所の「こども舞踊」は愛らしい少女の美しい線と技を滿喫さゝれます。まるで夢の國をたどる樣な幻想曲と洗練し切つた演技に陶醉されることでせう。この踊り子達は朝日會館のステージには慣れ切つたものばかりであります

▽最後の「喜劇」でありますが、これは本社主幹の句「戀の罠あの眼だらうか眼だらうか」をそのまゝ藝題とし、即ち川柳のもつ内容の深さ廣さを劇化して充分川柳のもつ妙味を演出しようと云ふのであります。劇の作者並演出の古川利隆氏は既に定評のある斯界の重鎭でありますし、俳優の連中はわざと本名によつて發表されてありますが、その藝名は夙に新派梨園に嘖々たる好評ある腕きゝ連、或ひは國民座のスター連なのであります。これは當夜のおたのしみに是非最後迄ゆる〳〵御觀覽を御願ひ致しておく次第であります。大体午後十時に全部を終了する豫定であります。

兎のダンス　小高房子
繪日傘　橋本千里
エジプト　坂口京子
水兵さん　山根壽子
全員

D

古川利隆作並演出

喜劇　戀の罠あの眼だらうか眼だらうか　壹幕

川柳座

時　惱ましき五月の夕

所　輕井澤千ケ瀧グリーンホテル

人　文士　淺間三郎　村居勝
音樂學校學生　人野善男　山田健
オセロ會社員　若狹保　三森孝
その新妻　杉子　神谷千惠子
ホテルの女中　おはや　島民榮

裾野を行く

岩本素人

□

十八金とか二十金だとか言ふのは金の含有量を示す數字である相な。川柳もこう言つた方法で以て詩の含有量を量る事が出來たら、何んと甚だ調法な次第であらうに。

川柳にだつて純金もあれば十八金も乃至八金も九金も鍍金ものもあるのであるが、何しろ人間の感情と言ふ至極厄介千萬な秤りで量らなければならないので、左樣に簡單には行きさうにない。しかたがないから、誠にたよりないが素人の感じで、本誌四月號の第一線を小口から、光つた所を十句斗り借用に及び金の含有を見出したいと思ふ。

□

赤松のみぎりが僕を生んだ村　　山雨樓

この純金には副書に歸國とある。

幾年振だか知らないが、懐しい故郷の風物に接した詰襟詩人山雨樓の胸は法悦に充たされたであらう。その感情がいかにも洗練された手法もて、一分の隙さへなきまでに唄ひ出されてゐる驚嘆すべき明るさと晴れやかさを有つ句である。

もとより句は解剖すべき性質のものではない。だが何故この句から斯くも素晴らしい感銘を享けるのであるかを研究して見るのも徒事ではないと信ずる。實は此目的の故に本文草した譯である。いで聊か句の神秘に手を挿入れて見よう。

「赤松のみぎり」が此句の王座である。赤と綠の色彩から來る快感が句主の高潮せる感情を端的に表示してゐる上に此の美的表現に依て、大阪あたりでは見る事の出來ない清い澄切つた空の色までも想像せしめられる。「みぎり」で以て客觀的風景の美觀を象徴し「赤」に托して主觀的情熱を示してゐる點など全く絶讃に價する名句である。後輩の學ふべき手法であると思ふ。

鼻々を覺へたここへパパ戻り　　杏三

子煩惱杏三がとろける樣な愛の發露である。

靜かに眼を塞いで此句を暗誦する時、和やかな家庭の愛と悅び

に滿たされた一シーンが、殘りなく描き出されてゐるのを感じるのである。「末の子?が鼻々々と言つて、指で鼻を示す藝を覺へた所へ、丁度會社からパパが戻つて來た」間へ説明語を挿入すると斯うなるのであるか、こんな風に書いたのでは少しも感動を誘發しない。にもかゝわらず無駄な説明を省いて、川柳に壓搾すると右の樣な名句が出來上るとは、川柳は魔物である。之れに付いて見ても、うまく引締める事が川柳技術に於て非常に重要な事が分るであらう。假りに「社から歸れば鼻々を覺へてゐ」とでもしたとすれば誠に平凡な叙事に終り第一線の活字には成つてゐなかつたに違ひない。「覺へたとこへ」と焦點を時間的に引き締めた所に此句の成巧の楔が打たれてゐるのである。この場合のとこへは實に千金の價である。敬服の外ない。同じく子に對する愛を詠つた句に

雛段へ濕布した子が座つて居　　綠雨

がある。無口の慈父綠雨の作である。此の句には手織木棉の地味な味がある。句の裏に深い慈愛の潛んでゐるのを見逃してはならない。

悲しみの光のごとく雪が降る　　町二

人間苦のたゞ中に深く深く自らを凝視してゐる詩人町二はチラリチラリと降る春の雪の一片々々に「悲しみの光」を觀た。作者は自己の感覺のまゝに唄ひつゝあるのである。敢て讀者の同情を強いない所に藝術良心の閃めきが見へる。我々の川柳の一句一句は其時々の自畫像でありたいと思ふ

私は常に此の作家の態度に教へられる所の少くないのを感謝してゐる。今は作家を論ずるのが目的でないから、作句技巧も大切ではあるが、作句態度の如何が詩人に取つて根本問題である事を記して次に移る。

大阪に青き空ある日なり寂し　町　二

逢ふまいときめりやミルクの色かなし　鐵　洲

滿されぬ心番茶に香りなく　同

人と時との心境に相違につれて感情は一樣でない。青い空に寂しみを觀じ、ミルクの色に悲しみの色が浮き番茶に嗅覺を亡ふ

春の觸手

ククと啼く蛙いつぴきにひきの夜　琴人

川柳は人事詩だと極めてゐる人人にこの句を提示する。どこまでも川柳である。斷じて俳句ではない。春の夜の丸味の觸覺である。陽的靜寂である。念佛詩人琴人の面影である。

ククとなく蛙である。くくくとなく蝦蟇ではない。いつぴきにひきである。一疋二疋ではない。いつぴきにひきと態に平假名を用ひたのは一疋或は二疋と言ふ數ではなく、感じなのである平假名で書いてこそ春の夜の靜寂を言つた特種の情緒の描寫に成功してゐるのである。川柳は口に唄ふと共に眼に訴へる詩であるから、用語と共に文字も內容最も應しいものを撰み出さなくてはならない。

人寢しづまれば月光屋根に下りて　丹　路

字餘りである「人寢しづまり月屋根に下りて」とかまたは「人寢しづまれば月屋根に下り」とかすれば十七字にはなるにはなるが、此場合二つ共適當でない。なぜならば靜寂な氣持ちは元より或る餘情を有してゐるのが此の句の生命なのであるから「寢しづまり」としても「下り」と結んでも餘韻が失はれてしまう。だが徒らに眞似てはならぬ手法である。

口笛や兵作ごんの倅にて　雅　幽

前の句「地曳網に竹馬の友の顏竝び」と並べて讀むと一層面白い句である。幾年か振りで歸つた故鄕の風物は昔のまゝの姿であつた。この質朴其のものゝ樣な漁村の寮園氣に注射でもするかの樣な口笛の音に、失望に似た輕い驚きの目を戶外に移すと、そこを通るのは兵作の倅であつた。平和な村の青年の心もいつとはなし春の技巧を知り始めたのであらう。

この句を一讀すると、平和な情緒とそして輕いユーモアを感じる。それは「口笛や」のやと「兵作ごん」のごんとの調和から來る快よさである。「倅にて」も輕味を添へてゐる。「口笛は兵作ごんの倅なり」假りにこんな風に替へて見て、も一度原句を讀み返して見ると、原句の面白味がどの邊にあるかゞよく解る。

射たれ雉子茜に翼ひらがへし　閑　生

此句は言ふまでもなく、「射たれ」で切つて讀まなくてはならないのである。

空中に於ける瞬間の美觀を叙した句であるのは言ふを待たないが、殊に「射たれ」とあるので更に地上を離れた出來事であるのを直感する。美しい鳥の羽色が茜さす空に映へて、キラッキラッと落ちて來る。何んとあでやかな光と色彩ではないか。この瞬間こそは狩獵家にとつて千金にも換へがたい感激のクライマ

ックスであらう。駑手の心臓の高鳴が聞こへる。銃獵に趣味を有つまでのゆとりの無い私にも此句を通じて獵の醍醐味が解る樣な氣がする。しかし獵銃を手にした事のないものには絶對に言へぬ句である。

「射つた雉子」とも「落ちる雉子」ともせずに「射たれ雉子」と全く自分の姿をひそめてしまつて空へ視點を集めた手際は凡手の及ぶところではない。

「ひるがへし」の平假名も適切であると思ふ。

死は安し思ひなをして立ちあがり　晃卓

永い間、血身泥になつて貧と病魔に戰いつゞけてゐる不遇の詩人晃卓の句は人の肺腑を衝くものがある。しかし此の句と言ひ「燈明へあなたまかせの手を合せ」の句などに思ひ合せて日頃の作者の心境に或る落ち付きの窺はれるのは喜ばしい事である。

レッテルのいゝのが鼻で笑つたな　夕鐘

一つはこちらの僻みではあるが、少し斗りのつぺりとしたのが別嬪面をして、ツンとしてゐるのは小癪にさわるものである。

「レッテル……笑つたな」手輕い氣持の好い滑稽な言ひ廻しの中に女の性格のよく出てゐる句である。「レッテル」は滑稽斗りでなく、或る種の女の性格描寫に成功してゐる。

早起をしたが雀の方が先き　計加

容觀的ユーモリスト計加は洋畫家であるが「賣る畫は描かない」と言ふ主義である。川柳は作るが川柳家に友人を持たない。と言ふ風な典型的な藝術家なのである。こんな性格の持主だから彼れの句には衒氣と言ふものが更にない。技巧を弄しない。そのまゝである。その無技巧の中に素裸のユーモアが日向ぼつこをしてゐる「早起をしたが雀の方が先き」あたりまへであるあたり前の事をあたりまへに唄ひ出す所に彼の面目が躍る

半身を搖つて思春期が笑ふ　艸樂

川柳の子守唄で育つたであらう所の艸樂は當百第二世である。流石に肯けるものがある。思春期頃の多分女であらう の姿態を巧に摑んでゐる。「思春期が笑ふ」は川柳特獨の肖略法である。

第一線にはまだ澤山名句はあるが大分長くなるから一と先づ此邊で打ち切る事にする。

（昭和七、四、五）

路郎氏の近作から（句評）

安川久流美

◎勘定高い人に輕蔑されてゐる

路郎氏の氣持が句の上に躍如としてゐる、金といふものに至極淡白であつた時代、否いまも尙さうである同氏の句作、かるが故に物質萬能を謳歌する凡夫から蔑まれる處にこの句の價値と輕い諷刺が表現されてゐるのである。

× × ×

◎空想癖が古本を賣りに行く

これは又物質萬能を一通り越した所謂空想である、漂然と、思ひ出したやうに、古本屋へ足の向く哲人、それは夜の町を夢遊病者の如く「古本屋」といふおのが迷ひをさます彼岸に到達するのである、吉田絃二郎氏の古本は賣られてもまた買はれる、買ひに來る男も又空想癖のある人であることはいふまでもない。

（四月八日釋迦誕生の日）

百號に因む

○

百號に因んで柳樽百編の事を書いてみやう。此の時代のものは詩こしての價値はあやぶまれるやうな句ばかりで、甚だ佳句に乏しいが、此の際紹介してみるのも一興であらうかと思ふ。他の編と一寸變つてゐるのは、第一枚目に、末廣大會之續と角書きをして、「柳樽百編」と云ふ題が約一寸角位な文字で表はしてある事である。其裏には菅子の句

此上を千本もしげれ百柳

と云ふ祝福の句が散し書きになつてゐる。又最後の頁には

右九十七編より百編までを末廣會の勝番也、此編少し不足ゆゑ四ツ谷不動尊額面を足して百編に都合す

森東魚

一つ籠(斗)の樽詩百より句百編　菅子

とある。此の句や文の辭句からしても、菅子の腕前が想像される貧弱な編輯振りである。中の句を行き當りばつたりに拾ひ出してみやう。

蠅を打へらも末世に名を殘し

小太刀の名人吉岡兼房を詠んだのであらうが、武藝者の句はあまり澤山詠まれてゐないので珍らしく思はれる。

唐の下女ハルシャ革ほごひゞがきれ

ハルシャは波斯である。當時既に波斯革などは輸入されて通人連に喜ばれたものであらう。此句「唐の下女」と上に置いたので全くクスグリになつてしまつたでなければ諧謔の句として捨てたものでもない。

水鉢へ久助も出るよし野丸

久助は吉野葛であつたと思ふが或は私の思ひ違ひかもしれぬ。よし野丸の納涼に、葛水をきかせた趣向と思ふ。

左太郎へ茶を掛て喰ふ居候

左太郎は句意から想像して、冷飯の事であらうと思ふが、外に用例があれば御教示を得たい。以上の一句の久助、左太郎などは、外骨翁の嘗て編された擬人名辭書に補ふ値はあると思ふので明確な事を知りたい。

鐵槌で徒然草をこまかにし

鐵槌は、徒然草の註釋本である。句は全然狂句仕立であるが、蛭子氏が執筆せられた書名讀込みの句としては珍なものに屬するであらう。殊に私の母の遺物に此の鐵槌があるので懐しさを覺へる。

酒を止めたれぞやつぱり錢がなし

自分の禁酒時代を想起して失笑を禁じ得ない。

すぐ風は鳶の浮きすのゆれる度び

俳句畑のやうな句で、狂句だらけの中には珍らしく思はれる。

生れた國が氣にいらぬ儒者と僧

今でも生れた國が氣に入らぬのも少なくない。赤い運動に熱中する連中も中々あとをたゝぬ。

天井を物置にする木ぐすり屋

私の小供の折、隣家が木藥屋であつた薄暗い土藏造りの店で藥研で何かおろし

てゐるのを珍らしく見てゐたものである此の句をみて小供の時がそゞろに思ひ出された。

てんぷらのゆびを擬寶珠へこすりつけ

天麩羅の句もあまり見かけない。天麩羅は橋の袂なご屋臺店で賣つたのがはじめらしいから、此の句もさうした場合のであらう。

二王さまイザ〳〵といふ御ンすがた

○

「川柳雜誌」が百冊を數えられた事は洵に御同慶に堪えぬ。創刊號を拜見したのは、私が東京在住の折りであつた。某日T氏が來たられ、「大阪から立派な柳誌かでましたネ」風呂敷をといて取出し「お讀みになりましたか」と言はれる。尙ほ語をついで「これは一寸借りてきたのですが、Kさんの宅へ寄つたら句評をするとて、コンナ事を鉛筆で書いてしまつたので、返すに申譯がない」と、私はお氣の毒にも察し、私の奇麗なものと交換して差上げた、其評記入のものが、今手

「角大師いざまゐらふの御姿」の方が面白いやうに思ふ。恐らく此の燒き直しであらう。

御不勝手ある夜の夢に富を取り

我々も一枚しきや持つてない債券の當つた夢なと見兼ねない。笑止千萬——麗かさつく〴〵金が慾しくなり、の句も思はれて他人事じやない。

先づ此邊で擱筆しやう。

蛭子省二

元に殘つて居る。T氏は柳壇に遠ざかりKさんの古くさい詩觀が窺はれるのも、思出ではある。當時東京柳壇では、かくも永續性のあるものとは思はれなかつた聞風であつた。

私が寄稿し始めたのは、少し號を經てからである。私はセメテ百項丈けは書いてみようと、心ひそかに決し、倦む處はなかつた。確かに百項は寄せ得た事の滿足を有する。私は病弱の爲め性急であるのに、「百」といふ觀念は大に好きだ。「すきな消百題」、「竹馬言百事」等現に他の柳誌が續けて居る。百年後の知己をまつとか、百歲の壽を望むといふ考へはもたぬ。只百迄なる希望は心に油斷を生じないからだ。「川柳雜誌」は今や、百を二つ重ぬる初一歩に臨むに際し、新鋭氣を養ひ、經營上の萬難を打破し、愈々內容の整備と川柳精進の歡喜のため、特に御同人の犧牲的協力を期待してやまぬ。

お喜の詞は到底盡きぬものがある。茲には因みて柳樽第百編の句を若干記してみる。

此上を千本もしげれ百柳　菅子

「右九十七編までを、末廣會の勝番也此編少し不足ゆえ、四ッ谷不動尊額面を足して、百編に都合す。

一ッ統の樽詩百より句百編

菅子」と、ある如くの內容で、百二十一枚から百五十八枚に到る、四十八枚扉一枚添えらる。文政十丁亥年版である。遡算百有五年に相當するも緣だ。文政は十二年で了つて、天保に移るのだから、句傾向に狂臭を帶ぶは致方なしとするも亦古川柳研究家の頭に印象されて居る作も決して少しとはしない。文政の句集だか

らとて楽て省みないやうな、粗雑な不熱心な態度ではありたくない。

字餘りの催馬樂うたふ下の闕　杜蝶
歸りには人買となる梅若忌　巨眼
仁和寺の納所山師を叱りつけ　逆茂
うつちやつて看板にするむらさき　綾丸
吉兵衛のある評判記二朱でかひ　風松
ヤイ喜助身は宅番に來はせぬぞ　佃
泥ぼうの糞をにらんで立ちのまま　百太
咄し家は世間をあらで飯を喰ひ　木馬
我朝の湊川にも墮涙の碑　山笑
今蝶のたはふれた葉を菴の汗　巨眼
酒を止めたれどやつぱり錢がなし　佃
幽靈の聲色つかい弓をもち　柳泉
改元を始て知つた赦免狀　松鱸
鶏はうた蛙は泣で封じられ　ロセイ
四天王金剛杖で栗をむき　松下
去年見た花も湯で呑む隅田の土手　風松
嶋干物殘せし妻子おもひ出し　巨眼
ちゑぼとり案じ過して奇應丸　佃
烏だの蛇だのと嫁のぬかふくろ　木卯
都では櫻を盗れたとおもひ　佃
一粒金丹大音で頼んましよ　文志
納太刀九紋龍がひつかつぎ　三輔

（五二頁へ續く）

春秋點

路郎選

淋しさに吹く口笛に連が出來　大阪　柳次
春の窓仰げば二人首を出し　同　同
もう一度變るつもりの家を借り　同　同
ウツカリミカフエのマッチ借りられる　同　同
もうおつかけて來ぬと一服吸ひつける　泉北　灯羊子
マッチだす手が一本と言ひさうな　同　同
似てゐたと又振り返り振り返り　同　同
應揚に頭を下げてフト淋し　大阪　無鬼
雨宿りの外デパートに用はなし　同　同
千人針俺でよけりやと見て通り　同　同
女三人ぐるになつてゐる强さなり　同　みつる
何の氣で濱を歩くか失業者　同　同
人間の丸みを金がくずれさせ　同　同

金輪再禁

笛吹けど笛の音しか出て呉れず　同　橙舍

上海事變勃發

幸か不幸か大和魂持ち合せ　同　同
感情にあまへた涙出かゝるよ　同　山茶花

小岩井淨先生保釋出獄

痩せた頰にたゞよふ笑みぞカなる　同　同
煙草吸ふて吸ふて淋しい日が暮れた　三重　雪峰改め享史
妻も居て子もゐて冬の夜はながし　同　同
崩れだす膝は坊やにある重味　蛍ヶ池　苍巴
芝居を觀るのに奥さんの厚化粧　同　同
和かな世界は壺の中にある　東京　痴佛
門鑑の眞新らしさにある氣兼　同　同
同じ樣に風にもたれて子も歩き　大阪　愛緒
六錢を手でさぐり出す出勤よ　同　同
丹前の窓へ旅情の春柳　大聖寺　白花子
玉子酒飲んで方丈寢給へり　同　同

關市長夫人の病床を訪ふ（二句）

その夜まで醫者のいふまゝ食べてゐた　大阪　湧三

輸血だと聞いてゞの子も腕を伸べ　同　同
うつかりと釣り出されたる口を閉じ　大連　三碧
興奮に養子の身をば忘れ掛け　同　同
妻でない女のかまふ猪口の數　大聖寺　醉羊
氣安さを女五十になつて知り　同　同
觀光團千人針も觀て歸れ　京都　草村
銅像に圓味あたへた春の雪　同　同
年とつた氣分を捨てに夫婦出る　大阪　素月
わけもなく斷定をするおそろしさ　小松　しさし

近作抄

月はしろき夢見てる薄情な　根羅門
ガラスの息と感情によろめくばかり　同　同
をびがゆるんだセンチメンタルな月　同　同
さくら咲いて保母の裾も輕ろく　同　同
食慾のない日は雲を見て暮す　蛍ヶ池　康夫
三月の風光り流る　同　同
ビルディングがお菓子のやうな夕暮　同　同
フアツショ化とは知らず圓服買はされる　松江　天痴人

橋の上の乞食も歸り仕度なり　大阪　大門
春の街戀を拾ひに出かけやう　大聖寺　溪鶯
歡迎のまだつゞいてる胃の强さ　大阪　吐句坊
醫者の顏博士ときいて老けてみえ　奈良　南京豆
五七日經つて大方忘れられ　大阪　一久
生を得た輸血されぢニヤケタ血がまじり　平塚　草夫
淋しさに今ライターの火を見つめ　高石　錦石
横柄な社長を眞似て給仕來る　鳥取　山暢
軍籍に在る身へ春の花が咲き　大聖寺　一寛

ひろし選

犬養景氣信じましよかい小作人　同　同
陸軍記念日
津々浦々ミリタリズムの旗の波　同　同
子の欲しい夫婦へ長い夜のしゞま　東京　銀雪
餘興ではない辻藝の曈をごらん　同　同
何もかも知つてるさうな大鏡　同　同
資本主義酒は涙か斷念か　大阪　宏郎
騷ぐにも金が無いなり春の風　同　同

要求は斥けられて雨の道　同　同
くさしたらそれきりやめた日本髷　大和　白帝子
藥局はついで子供の分も盛り　同　同
獵歸り犬張合の拔けた顏　同　同
從容と死ぬにも金がいるごとし　蟇ヶ池　合歡人
砲聲はいづこ臥てゐる春うらゝ　同　同
興奮の悲壯に醉へるうちはよし　同　同
飛び越へて呼べばためらふ川の幅　熊本　水人
疑ひを晴す嬰兒に手を合せ　同　同
陸相よどうしてくれる出兵費　同　蝸牛
明日の事いろ〳〵時計のねじを卷き　大阪　同
默つたまゝ寢る日が續く襖なり　同　同
愛慾の鐘へ男も現れる　同　同
死ぬと言ふ戀を神樣もてあまし　神戸　竹風
茶がらを撒いてタイピストの朝　同　同
宿直へ消火器冷たく光つてゐる　同　同
凡々たるロボットに似たる我が世帶　大阪　方眼
金持は砂の上なる塔に住み　同　同

祝一〇〇號記念

今日の日へ雨や嵐の苦を忘れ　同　同
青春のちぎれ〳〵に草笛よ　蟇ヶ池　晴夫

病院の春ハンモックゆれてゐる　同　同
見せられた金に不甲斐なく笑ひ　東京　蒼梧樓
氣晴しに擧げた氣焰を賴られる　同　同
愼重に愼重に女さゝやきぬ　大阪　岩石

會合を持つ

無言やつぱり無言のまゝで去に　同　同
十年も不運が續き感謝狀　神戸　幸村
缺食の兒童に足らぬ義捐金　同　同
選擧ビラお舟に折つて遊んで居　大阪　一笑
一キロを夙に直し買ふて來る　同　同
さびしさや晝の電燈ともりをり　蟇ヶ池　愚寵
かねがおありのつめたい家だ　同　同
ノーチップタイムとやらに這入り兼ね　大阪　秀樹
先生といふなと恩師猪口をむけ　同　同
雪の日の午後を刻んでゆく時計　松江　冬生
自動車の輪だちに春の水が寄り　同　同
戀の猫障子をあける智慧を出し　大阪　憲坊
大雪に意氣軒昂の赤襷　同　同
接吻を拒む技巧のしらぐし　長野　有爲郎
金の要る事實いさかふ術もなし　同　同
キッドの音よサラリーを語るまい　大阪　沐天

さくら一枝愛の巣の景となり　同　同
初戀の墓標ともなる丸木橋　松江　慕秋
くだくる銀波に似て若き日の消える　同　同

病みて

そむいたる人が戀しく涙する　螢ヶ池　子朗
女の居ない生活は御免だ　同　同
三月の寒さ柳は受け流し　大阪　青兒

選擧場

入口も出口も光る巡査の目　同　同
底のない桶へ無産者水を汲む　福岡　壽恵兒
その先をさらえて見たい人の慾　同　同
きつちりと利子まで取つて恩にきせ　大阪　菊路
百までも生きるつもりの家を建て　同　同

女患者を見舞ひて

咳込んでゐる少女の首の細さよ　螢ヶ池　靜太
惚れてゐる女マスクがよく似合ひ　同　同
湯の一人現内閣より利巧そう　松本　正司

吾市の聯隊出動して

知らねごも送れば固く握りしめ　同　同
駄斗を附けそうな嫁入前の髪　大阪　小松園
事務服を脱いで派手な柄で去に　同　同

空想が空想を生み昇る熱　島根　鴉天
罪深き凡夫であつて而白し　同　同
忍從の牛若草へ尿をする　大阪　千雨
鼻頭鰐に似し日の資本家よ　同　同
筋肉美テープへ胸の張を見せ　愛媛　孤鶴
道を說く人に案外暗い道　同　同
ラヂオドラマ夫の狡い目を見付け　大阪　鐘生
氣のおけぬを留守に頼んで閉め出され　同　同
滿州へ憧れる夜の二時を聞き　松江　柳人
大股に歩く女の春や春　同　同
愛人と同じ名前の酌に醉ひ　大阪　利生
上役であるばつかりに通る無理　同　同
痩せた手に登山ナイフで林檎むく　螢ヶ池　芳朗
プルの笑ひだ大木が搖れてゐる　同　同
叱られた少さい意地は食はず寢る　不詳　公平

入水自殺を見て

無造作な死よ黎明に横たはる　同　同
糸卷の春へ吐息の日永なる　松江　苍二
拔けて來た芝居は幕へ顔を伏せ　大阪　八歩
鏑矢の的になる日の涙壺　笠置　雀子郎
夢を抱いてヒヤシンス作つてる　螢ヶ池　舟路

亡父　大阪　木公

死ぬまで働く〳〵と言うた正直者
若さまだ抜けきらぬ母の化粧箱
すまさなくてもいゝよハイヒール

神戸　曉鳴子
大阪　坊茄子

三瓶山

大三瓶小三瓶春の雪昼色　島根　與詩雄
落魄の芝生の上の春日和　大阪　四五磨
酒の上百萬圓の使ひ道　愛媛　南葉
庭の木がやす〳〵息づいてゐる日向　大阪　富士雄
十八といふお針子の腰の幅　蟄ヶ池　のぼる
せめてもの梅の香が來るオブラート　神戸　秋彦
打ち惱む其の苦しみの捨て所　松山　耕朗
頼まれた釘に嬉しい音がする　大阪　白柳子
失戀の日から艶無き靴となり　松江　玲人
雪含む風の堤の一人旅　尼崎　義郎
ゴー・ストップ違反の小僧へ頭撫で　岸和田　火宵
言譯けを聽くに掛取り待たされる　松江　雪丸
ラッシュアワーバスは細かくゆれて行く　大阪　のぶを
ブルヂョアの金にあかした膝枕　山口　宙芥
議員もう同情なんか忘れて居　大阪　白峯

應援歌　地團駄踏んで唄ひ居る　福岡　喰象
聲色を替へて内職子を寢かせ　大阪　不名人
妻が出來子が出來村の人となり　伊豫　蛙忘
骨董屋内の床から出して見せ　大阪　鯉友
戰爭をよそに支那人儲けて居　大連　薫
肥立ちのよい兒へ春の陽の午下り　大阪　黒天子
寢床より去りゆく夢を追はん哉　京都　一正
バスの中胸に有る娘が乘つて居た　大成　あや美
子をぶつた程の強さでぶつてみる　神戸　棄郎
見世物小屋に春風よ吹け　大阪　一流
死ぬものは死ねかの樣に寺の鐘　愛媛　英賀夫
タイルの白さ戀の憂鬱　大阪　ト居
春なれや花に戀せんすべもなし　高岡　かずま
財布の紐固くデパートを覗き　大阪　洋々
療友を送つて落葉の音淋し　蟄ヶ池　梨風
春雨に弔旗が低う重う垂れ　大阪　葉光
午前四時迄起きてるのが藝術か　堺　慈雨來
まゝごとへ妹ませた口をきゝ　大阪　永樂
人間の弱さよき日を探してる　京都　啓秀
いつまでも親しみのある同期生　不詳　由一

北陸川柳史

窪田銀波樓

麻生路郎君主宰の「川柳雜誌」が大衆に呼びかけてから早や百號を重ねる、客員の席に列せさせられてゐる私にも何か書けといふことだが、今度娘の結婚で上京したり川村花蓼氏にも種々お世話をかけた何やかやの私事にかまけて隙のない折柄、思ひ浮むまゝ北陸にむける川柳の發達、變遷の片鱗でも書かせて貰ひませう。

北陸の地にはじめて川柳といふものゝ芽生えを見たのは實に日露戰爭の當時でした、私の勤めてゐる金澤の北國新聞で川柳の時事吟を募集したのが抑々のはじめです、所が應募者がサッパリない、社中で戰爭吟（今でいふと實に幼稚な狂句調のもの）などを發表して唆り立てゝ見ても矢ッ張り駄目でした、二三ケ月で中絶したのが北陸川柳史の情けない冒頭です。

それから程經て矢張り北國新聞で冠りつきを募集しました、當時安川久流美君がよく私の宅へ遊びに來てゐたのでその應募の盛んになつたのを機會に恐る〳〵又た川柳の募集をはじめた所、今度はポッ〳〵應募がある、そこで大いに乘氣になつて奬勵鼓舞を續け、一方私が中心となつて六華會といふ文藝會を設けて月一回の集りをやつた、これは小品文、俚謠川柳などの研究でした、尾山秋人、森田森の家、安川久流美、酒井雅樂頭、西川蛇劍（今の奥野他見男）村井雨村、喜多村一紅、佐久間夕星、柿本豐年坊などい

ふ連中がメキ〳〵頭を擡げ出した「小品文集」や「北國俚謠集」などの出版されたのもその當時でした。そこで久流美君などは月一回では物足らぬとして、更に川柳を主とする天神會（毎月七五日會合）を設けるなどから追々盛んになつて森の家、雅樂頭、一紅、光林坊、絽月坊、紋二郎、默々、俵兵衛などの柳家を生み更に兎絲子、めかく子、柳二郎、紅の花藻の花、紅法師、漁村、詩郎などの猛者が輩出してなか〳〵の盛觀を呈しました

それから雜誌では最初の「六華」が「礎」となり、更に「百萬石」となつたがその間種々の柳誌も出、會も幾つかに分立したので遂にこれを一纏めにして平民詩社とし、更に金澤川柳會と改稱し、私が會長といふものに祭り上げられて今日に及んだのです。

現在では金澤に北國川柳會、新興川柳會、小松に芦城川柳會、大聖寺に聖城川柳會などがあつて、相呼應して互に氣焰をあげてゐます。

柳の絮

長野吉高

（一三）

霙がぐしよ〳〵降つてゐる中を、オーヴアの襟を立てゝ洋傘に埋つたやうにしてミミ子クンがぼさ〳〵歩いてゐる。道玄坂の上から左に折れて、櫻ケ丘へ出る靜かな通りへ入ると、道の右側に極めて上品に粧つたカフエーがある。ミミ子クンは、其處の前を一度通り過ごしたが、また引返してドアを一寸開けて中を覗くと、其のまゝ吸込まれるやうに這入る。

「まア、ミミ子さん。」

手紙でも書いてゐたらしく、買ひたてのスリッパに似た顏した女給が隅の方のテーブルから飛んで來る。

「どうなすつたの？元氣が無いわね。顏の色が惡いわ。」

ミミ子クンは、默つたまゝ手近の椅子にぐつたりと腰を下す。女給は其の顏を見つめながら

「すつかり寢れたわね。怪我なすつたお手はあれからおよろしくつて？」

ミミ子クンは、左の手をテーブルの上に置くと輕く叩きながら

「四、五日前に繃帶は取つちやつたんだけどどうかするこまだに痛いのよ。」

「ひどい目に逢つたわね。癒つたらまた愉快に飲みませうよ」

ミミ子クンは力の無い聲で

「あの、濟まないけどお紅茶頂戴。」

「あたし奢るわ。何か召上らない？」

「えゝ有難う。でも、何も欲しくないのよ。たゞ熱いお紅茶だけ——。」

女給仕はミミ子クンの顏をのぞき込んで

「こんなに寒い晩は歩かないのがいゝわ。お体に障るでせう？」

ミミ子クンは、右手の指先で針でも突立てたやうに痛む顳顬のあたりを揉む。

「ぢやすぐに持つて來るわよ。」

このカフエーは、場所の關係で何時もさう混雜しない。靜か

なのと、其れに經營者が一頃ロシア文學者として知られた夢眠君の未亡人なので、故人に緣故のある者を中心に、界隈に住居する藝術家達の集合所のやうになつてゐる。

室内はムンとする程温い。霙が窓にサラサラと鳴る。

「はい。お待遠さま。」

「濟みません——今夜あんた一人？」

女給は椅子に腰を下しながら

「えゝ、一人は風邪で休んでるのよ。暇だから一人でも二人でも同じだわ。」

ミミ子クンは靜かに紅茶を啜る。

「お歸りがけ？」

ミミ子クンは無表情な顏のまゝ

「えゝ、日本橋からよ。」

「日本橋？」

ミミ子クンは吐出すやうに

「少女雜誌の口繪を描いて持つてつたのよ。來月號の分だけど——」

「隨分ご勉強ね。」

「至方なしよ。雜誌社の人と色々押問答してみたんだけど、どうしても採つてくれないから、到々喧嘩別れしちやつたわ。」

女給は息を呑む。ミミ子クンは眞顏で

「女給生活は面白くつて？」

「なか〳〵辛いわ。あたしなんか、他に何もする事を知らないからこんな暮しをしてゐるんだけど、何かいゝ事があれば今が今でも止したいのよ。あなたみたいに華族のお姫樣なんかのする仕事ぢやないわ。」

ミミ子クンは紅茶を啜り續けてゐる。

「お家にじつとしてゐらつしやれば、あたしなんかは此んないけぞんざいな口を利く事の出來ない姫樣でせう。羨しいわね。」

ミミ子クンは笑ひながら

「とんだお姫樣ね。却つて地位なんかに縛りつけられて、怎うにもならない者は可哀想よ。あたしの生れたお家は、子爵といふ世間態は堂々とした名門つてことになつてるけど、貧乏華族でどうにもかうにもならないのよ。」

「でも華族樣の貧乏と平民の貧乏とは、同じ貧乏でも桁が違ふわ。」

「あんた達はすぐにさう思ふでせふ。だけど華族といふものゝ貧乏は、平民といふものゝ貧乏よりもつと悲慘よ。あたしの父が母が、この爲めに怎んなに苦しんでゐる事か——其れは貧乏華族の家に生れた者でないと、誰にも解つて貰へないと思ふわ。」

不意に入口のドアが開いて、黑マントを着た老紳士がのそりと這入つて來る。

「アラ、先生。いらつしやい。」

女給はすぐに立上る。返振つたミミ子クンは意外なこと言つた顔して叫ぶ。
「ま、先生！」
「ほう、これは珍しい。」
明治の中期から大正の初頭にかけて、文壇で有名だつた温厚な老作家の鈴風君だ。
既に文學史的存在意義のある會つての老大家に、ミミ子クンは敬意を表して慇懃に頭を下げる。
「怪我をした所はもういゝんですか？」
鈴風君は半白の髭を撫でながら童顔を近づける。
「すつこよろしうございますのよ。」
「そりやいゝ」
鈴風君は、ゆつくりこ葉巻を口に運びながら女給に
「君、濟まないが例のを——。」
ミミ子クンは更つて
「あちらからお便りがございまして？あたくし頂きましても忘けてばかりゐて、ちつこもお返事出さないものでございますから——。」
「近頃は、僕の方へも餘り寄越しません。だがまあ、元氣でゐてくれさへすればね。」
鈴風君は滿足さうに笑ふ。
「先日雨軒さんをお訪ねしたこころ、まだ娘がこちらにゐる時分、あんたこ一緒によく遊びに見えた——貞子さんでしたかね——あの娘さんに會ひましたがね。近來なかゝ勉强されて、其れに就ては雨軒さんも隨分ご盡力のやうですね。」
「貞子さんは、迚も熱心でございますわ。あたしなんか面恥い程でございますのよ。」
「いや、若い方には何れの方面こも大いにやつて頂きたいですね。」
女給が、グラスに盛つたコオニャックを持つて來る。
鈴風君程妙な癖のある者は無い。カフエーでは定つてコオニャックを飲む。其れは何時如何なる場合にでもである。然も飲み終るこすぐにサツサこ歸つて行く。誰こ一緒にゐやうが頓着ない。この點至極簡單明瞭だ。
「娘がゐなくつてもいゝでせう。暇な時には遊びに來て下さい。荆妻も寂しがつてゐますから屹度悅びますよ。」
鈴風君は、グラスを放すこ例によつて早速立上る。
「ご無沙汰ばかり致しまして——どうかお宜敷仰有つて下さいませ。」
ミミ子クンに送られて、鈴風君は靜かに出て行く。思ひなしか近頃こくに目立つて老人めいた鈴風君の後姿は何故か佗し氣である。
フランス留學する夫君こ共に、彼地へ旅立つた鈴風君の娘さんは、ミミ子クンや貞子さんこは同じ學校を出たこよなき知己である。一人は既に結婚してフランスへ、一人は畫家に一人は劇作家を目指して——同じ巢から飛立つた三人は、其

れ〴〵の歩む道をひた向きに辿りつゝある。

「旦那！旦那つてば！やい、旦つく！」

ドアが再び亂暴に外から開くと、中年の洋服男を荷物のやうに肩にした五十餘りの親方がフラ〳〵と這入つて來る。何處かで飲み友達にでもなつたらしい。帽子を横つちよに冠つた旦那が椅子にくた〳〵と崩れ込むと

「何んでえ、あれつぱちの酒に其の態ア、起きねえ、起きねえつたら——やい！」

親方がグンと手を引張つた拍子に、旦那は椅子諸共に前へつんのめつて、床の上に蛙を叩きつけたやうにへたばる。はづみを喰つた親方は、二つ三つ轉つてテーブルの脚にゴンと頭をぶつつける。

「あいて、て、て、てッ！」女給は飛んで行つて旦那を起してやる

「危いわ。」

椅子に再び掛けさすと、旦那はぼろんとした眼を開けて

「も、もう飲めん。」

と、其のまゝテーブルにぐつたりと俯伏して了ふ。

「もう飲めん——な、何をぬかしやがるんでえ。」

やつと親方も起上つて、女給の側へ寄つて來る。

「ウヰスキーだ。」

ふらつくまゝに、手近の椅子にどつかと腰を下す。

「旦那、旦那——ちえッ、だらしがねえナ。」

ミミ子クンは、日燒けと酒燒けとで赤黑い顏をしたこの親方を凝視してゐる。シラノ・ド・ベルジユラックを思出させる程この親方の鼻は偉大である

「はい、ウヰスキー。」

親方は、運んで來た女給の肩をポンと叩いて

「そ、さう來なくつちやいけねえ。」

グラスにかぶりついて一口あふる。

「月もおぼろに白魚の、かゞりも霞む春の空、冷たい風もほろ醉に、心持よく浮かか〳〵と、浮かれ鳥がたゞ一羽、ねぐらへ歸る川端で、、棹のしづくか濕手であわ、思ひがけなく手に入る百兩——よう〳〵、橘屋ア、大統領ウ、と、おいでなすつたね。」

親方は達者な口調でお嬢吉三の芝居の假聲を使ふ。

「アラ！お上手ね。そつくりよ。」

「胡麻をするない——考へて見りやあ、孫の守りでもしてるいゝ年をして、しかねえカフエー通ひ、一寸氣がさゝア。」

「いゝぢやありませんか。ご愉快でせう。」

「何いつてやんだい。俺アそんな、何んてつのかナ——良、良心のねえ人間ぢやねえ。畜生！見損ふない。」

「あら——。」

「こんな風態してゐたつて、この頃流行のル、ルン——何んだつけ、ルンペンつてのか、そいつぢやねえぞ。俺ア家も女房も子供も、子、子供——。」

親方は、急に打消すやうに頭を振つて
「そ、その子供だけがねえんだ。」
「ぢや、お神さんと二人つきりなの？」
「箆棒め！死んぢやつたんぢやねえか。死、死んぢやつたー。」
「まア、逝くなつたの。」
「親の慾目か知らねえが、出來のいゝ娘だつたよ。毎晩の酒の仕度は、あいつがやつてくれてたがナ。俺ア酒を飲むたびに思出してならねえ。だからよ、家にぢつとして飲む氣にやごうしてもならねえんだ。と言つてカフエーで飲む酒が美味いんでも何んでもねえ。俺ア死んだあいつが何處かにゐるやうな氣がしてナ。おめえのやうな年頃の娘を見ると、俺アもう—。」
親方は水洟をすゝり上げる。女給はしんみりと
「同情するわ。ぢや、あたしを逝くなつた娘さんだと思つて今夜はごゆつくりお飲みなさいよ。」
ポンと手を鳴らした親方
「そ、さう來なくちやいけねえ。」
この塲の椅子をヂツと見てゐたミミ子クンの顏が次第に暗くなる。親方の話を，單に醉つぱらひの放言とのみは聞き逃せない。父の意志を裏切つて畫家になり，色々と曲解された噂が立つた爲め，到々怒りに觸れて家を追はれてはゐるものゝ父の失望はこの親方と同じかも知れない。妙に感傷な氣持を包んで，傘を持つて靜かに立上つたミミ子クン
「あたしもう歸るわ。」
慌てゝ振返つた女給
「いゝぢやありませんか。ごゆつくりなさいよ。」
立上つて來て，引留めさうな氣配を感じたので，ミミ子クンは急いでドアを開けて外へ出る。
霧は雪に變つてゐた。幾つかの淋しい通りを抜けると前方に雜木の繁つた小高い丘がある。アパートへ歸るのは此處を通り抜けるのが近道だが，夜は暗いので氣味が悪い。其れに何處かに山羊を飼つてゐると見えて，こいつが時々メエ、メエ，メエ……と異樣に鳴くのが仄かに聞えて來る。俗にメエ〳〵坂と言ふのは此處の事だ。墓地に枯れ薄の動くのが舊時代の田園恐怖風景なら，暗い雜木山にほのかに山羊の鳴聲が反響するのは，不具的な近代都市の生んだグロ風景だらう。ジャズ鳴らうとロボットが踊らうと，こゝの雜木山の上を吹く風だけはお江戸臭味がある。
郊外を定義して，國都を去ること五十里以内を近郊，百里以内を遠郊，と，ものゝ本に書いてあるが，近郊でも遠郊でもメエ〳〵坂には恐怖がある。ミミ子クンは傘に埋つたまゝこの恐怖風景の中へ點描される。
一体に此處らは，夜は危險區域と目されてゐる。時代の尖端を走らうが後端に躊躇しやうが，對象によつては女性には女性としての本能的な恐怖と弱味がある。一九三二年が三〇〇〇年でも，男性の獸的な暴力の前には近代女性の黄金なす美はしい總べての理論も一切が灰色になつて了ふ。
メエ〳〵坂を越さず，左方へ道を取ると非常な大廻りにはなるがアパートへ歸るには最も安全である。ミミ子クンは，道の岐れ目に立つて今一度前方を透して見た。先刻から前を行く黑い影がある。男と女だ。然も平氣で物騷な坂を登らうとする。女のゐる事に稍々好奇を持つたミミ子クンは，斷然この影を追ふて近道する事に定める。
雜木を切り拓いた狹い道は，曲りくねつてかなりな勾配を見せてゐる。人影に從いて，坂の中程まで來たと思ふと，其

處で到々見失つて了ふ。暗いので何んにも解らない。ミミ子クンは四、五歩急いで駈け登つて耳を澄ましたが何の音も無い。

女性の心理程不思議なものはない。戀人達の姿か公園の仄暗い片隅、ベンチの上、又は堤のほこり等に見える時、殊更に物珍らしげに何が起るかを見やうとするのは常に女性である。同樣に、街頭で逢ふ總べての夫婦連れを見やうとして振返り、後姿を凝視するのも亦女性である。この探索や目送は潜在意識的行爲であらうが、男性はかゝる場合には闖入者の意識から常に眼を外向けて通りたがるものだ。女性は常に、戀に耽る者を驚かす事に快樂を感じる。

ミミ子クンもご多聞に漏れない。前を行く影を勝手に戀人同志と定めてかゝつたのである。メエ〳〵坂の恐怖は、ミミ子クンにとつては問題でない。

山羊の鳴聲は聞えて來ないが、風が啾々と雜木をうつ。

突然、鈍い音を立てゝミミ子クンの傘にトンと當つたものがある。前方に氣を取られてゐたミミ子クン、はつとして後へ退つて暗い頭上を仰いで見る。道の上まで低く下つた樹の枝から何んだか黑い妙なものがぶら下つてゐる。場所が場所だけに、驚いたのはミミ子クンである。念の爲め下から傘で二、三度突き上げてみる。縊死にしては變だし——傘をたゝんで柄の方で横なぐりに拂つてみるとポコンと妙な音がしてブラ〳〵搖れる。さてこそメエ〳〵坂の怪物だ。ミミ子クンは上を見上げたまゝ頻りに首をひねる。（つづく）

（三）の十頁上段終りから八行「妻君のすぐ下の妹で年が二十」とありますがあれは「——年が二十三」の間違ひです。當時、すぐに訂正する筈でしたが失念して其のまゝになりました。餘り呑氣過ぎるので貞子さんにも氣毒です。おくれながら筆者の粗漏と怠慢とをお詫びして置きます。

（作者）

いやな詠史狂句の例

岡田三面子

貴誌の記念號には極めて不適當な題材なれど斯る好機會に掲載流布せられんことを強いて願ひます（出所は年代のみを示す）

啞の大關御即位の角力沙汰　天保
取り所無き御即位の角力沙汰　同
角力で帝取り所無き虚説　同
角力とは取るにも足らぬ即位沙汰　安政
幻しの説筆が地獄沙汰　同
破戒と見ゆる濡衣はさゞら波　天保
告文は御手跡穢す世の浮説　慶應
空事の世に轟きし雷の説　文政
失せ給ふ後にも無實の雷の説　弘化
雷りも亦空事の御濡衣　天保
雷の沙汰これも薨後の御無實　同
賢名は轟き雷の説は止み　嘉永
正史では聞かす耳から蛇の説　同
國土を産んだ説は儒で取上げす　同
三種より治るは仁義の政事　天保
雅に似て非井手の蛙を干し殺し　同
妖狐傳玉藻といふも根無草　文化
狐とは美福に尾に尾附けた説　安政
覺束ぬ説は怪鳥の面らが猿　同
星合は空事らしい婦女の説　嘉永
東鑑に辨慶の影も見ず　天保
手玉石受取りにくい言傳へ　同
受取りにくい鎌倉の牛玉石　弘化
受取れぬ談股野が投げだ石　嘉永
受取れぬ説景政が手玉石　弘化
景清が眼を無くしたも暗い説　同
謠曲にばつた合せた丹塗の矢　嘉永
鉢の木の煙も見えぬ北條記　同
波に文字浮いた談と知らぬ人　天保
南無妙な啞も誠に波の上？　嘉永
道灌も濡衣野路の雨の沙汰　天保
根を堀れば實の無い賢の花の説　同
道灌に濡衣着せる簑の説　同
道灌の山吹種の無い談　文化

（其他省略）

光琳と竹の皮

長崎柳秀

宰相となつて一國の政治を心のまゝに行つてみるのも、實業家となつて、巨萬の富を作るのも男の本懷でせう。けれども人として何かの趣味を持つてゐることは更にその人のおくゆかしさを感じさせます。

趣味にも色々ありませうが、これについての大切なことは利益とか、名譽などゝいふことを離れて唯それに浸つて心を澄すことであります。人にこの樂のあることは沙漠の中に、木蔭涼しく、清水の湧き出るオーシスの有るにも譬へられませうか、此のオーシスこそ沙漠の旅にも等しい長い人生の旅の休み場所であります。この疲れをやすませる處があつて、又新な旅を續ける元氣が養はれるのであります。

德川幕府の頃京都尾形家に二人の兄弟がありました。兄の光琳は小さい時から繪が好きで一心に勉強致しました。何分生來すぐれた考に惠まれて居りましたから、頓て自己獨特の流儀を繪の上にあらはし、わけて蒔繪に趣味を持ち絶えず新しい意匠を考へ出しましたため、光琳の作つた硯箱、茶道具の類は實に絶妙であると賞められ、今日に於きましても、其の小さい一つの器物が數萬圓の價値をもつてゐると云はれてをります。光琳の繪は山水でも、人物でも、花鳥でもみんな金銀の粉を混へてかきましたので、よし赤や青の色を用ゐずとも、そこに云ふに云はれない趣味がこもつて居りました。

すべて仕事の中に趣味を持つことは大切なことで、わけて藝術上の作品にこの力のはいつて居ることは誠に貴いことで光琳の繪が今日も人から尊ばれるのは、このカのはいつて居るのによるのであります。

趣味はいつも利益などゝいふことから離れて居ります。ある春の日の事でした名に負ふ嵐山は今が櫻の花盛り、わけて大名、富豪などといふ金のある人たちは金銀螺鈿の重組に山海の珍味をいれゝ、あそこゝと赤い毛氈を敷きならべて香に迷ふ花吹雪の中に、樂しい一日を過すのでした。光琳も誘われるまゝに、この花見に出かけました。その連れの人々もめい〳〵自慢の重組などを供の者にかつがせて、程よい所に座をとつて、花をめでながらそれ〴〵の辨當をひらきましたいづれも立派な調度品ばかりの中に、かの光琳のとり出したのは唯の竹の皮包でした。

「おや光琳さん、珍しく手輕なお辨當で

すね」

「えゝほんの握飯一つ」

見れば成程中は握飯に少しばかりの煮豆しかはいつてをりませんでしたが、竹の皮の裏を見ると、一同ははつと驚きました。一面に金箔が押してあつて、燦として春のやはらかい陽の光にかゞやいて居ります。しかもその金箔には、意を凝した山水花鳥が細かに浮きあがつて、その色彩りは咲き誇つてゐる花も恥らう美しさでございます。

「いやこれはかなはない。光琳さんも人がわるいなあ」

「いえ、ごう致しまして」

道具をみせびらかさうといふ人々にとつては、自慢の重組なども、この竹の皮一枚には到底及ばなかつたのであります。だが光琳にとつては唯好きで一枚の竹の皮にも、金箔が置いてみたく、面白くて自分を忘れて美しい繪が畫いてみたかつたのであります。

嵐山の春の陽も松の梢に暮れかゝつて樂しい一日を遊び疲れた人々はめい〳〵歸り仕度にかゝりました。何十兩何百兩出した重組をそれ〴〵了まつて、いざ歸らうとします時、光琳は以前の竹の皮を大堰の流れへひら〳〵と捨てゝしまひました。

「あつ、惜しい」

人々は我知らず手をのばしましたが、竹の皮は靜かに流の上を漂うて、しもえ〳〵と遠ざかりました。

私はこの「光琳竹の皮」の一節を讀む度びに、路郎師が繰り返し〳〵私を戒しめられる一つの敎え「句を捨てよ〳〵」を思ひ浮べて心から愧ぢて居ります。凡人のあさましさとは云へ、光琳のこの竹の皮にくらべやうもない私しの拙い句がなぜ棄て得ないのでせうか。

今日川柳雜誌一百號の記念にあたり、この思ひ出をしるし、今後修養に修養を積みいつかは師の期待にそふ日の來るのを切に願ふ次第であります。

春宵語

長谷川一徹

彼女の入院して來たのは若葉の頃である、耳鼻咽喉の專門醫連から喉頭結核と云ふ致命的な診斷を下され、種々な病院では間近く迫る死の宣告を受けて居た、三十歳にもならないで同じ病で床に臥して居た夫を亡くして己に未亡人の中に這入つて居た。

「何處の病院でも受附けて呉れません、あれには少さい子供があります、男の子

醫學常識を評す

淺田右聞

が二人御座います、如何がしてその子供達に傳染さしたくありません、本人もすつかり覺悟を決めて居ります、快くして頂きたいなどは申せません、せめて安住な最後を遂げさしてやつて頂きたいので御座います」

白髪の彼女の父はそう云つて伏目がちな顏を上げた、死の介補として私共が選ばれたのだ、病室は西舘の二階特等室であつた、小奇麗に整頓して塵一つ見えなかつた、ベッドを東枕にし枕換のテーブルの上には肩をならべた可愛い二人の男の子の寫眞が立てられ、床には小波の細軸の美人畫をかけ小さい京人形が置かれて居た。

此處を死の床と決めてすつかり覺悟した彼女は知友から送られる佛書に圍まれて細面の長身を白布の上に置いて居た、苦情らしい事は何一つ訴へなかつた。

受持のK學士には彼女の心を取り亂す如なことを云つてはならない、唯それだけの注意ですと云つて置いた。

彼女は和歌の同人雜誌の一員であつた寂しい歌が多かつた、ある日診察が終つた時同人達の御奬みで唯今まで詠みました歌の中から自選集を出す事になりましたが歌集の題名に困つて居ります、つけては頂けないでせうか、この患者特有のかすれた聲で云つた。

次の廻診の時に私は二つ許りを云つた彼女は喜んでその中から「寂光」の二字を選んだ。

ある日床の人形を取り上げて「可愛い人形ですね」と云ふと「ハアそれは九條武子樣に頂きました」と答へる「ホウー」と思はず發する私の語を受けて「よく可愛いがつて下さいました」と續ける、私は二人の麗人の身の上を思つてしばし闇然とした。

死の宣告を受けて居たその夏も過ぎ秋もゆき春を迎へた、然し彼女は何等の衰弱も見せず反つて体重も增加し行ひすました同じ日が續くのみであつた。

若葉が再び巡り來つた、私は家庭の事情で病院を辭せねばならなくなつて居た

五月雨が通り過ぎた街の上を自働車が出て行く、彼女は私の處方箋と求められるまゝに與へた短冊を持つて居た、次の句である。

鳥雲に入るを見つめて立ちつくし

それからもう二年になる、この春の年賀の中にまだ生き居ますと書いた彼女の賀狀が混つて居た。

△

夫醫之爲レ道用レ之以衛レ生、而推レ之以濟レ世、故稱ニ仁術一。賈子不レ云乎、古之聖人不レ居ニ朝廷一必居ニ醫卜之間一。

と云ふ處が實に好きである。拙ないながらにも弊衣草を嚙むところの神農の像を畫くと父の半谷翁は

醫術當今爭學レ蠻
邦人適否檢無レ間
我家猶墓ニ神農典一
南至祠祀末レ改レ頑

と云ふ賛をして與れた、壁間にかゝげてこれを仰ぎ見て居る。

神農の御像仰げばわれ若し。

法學常識醫學常識に引ずられ

近頃新聞紙を賑はしたのは故濱口首相死因にからまるアクチノミコーゼが佐郷屋の彈痕に歸すべきか否かの問題だ。所謂醫學常識即凡ての醫者には常識であるべき事柄についての知識からいふと熱せられた彈丸が放線狀菌を持つて濱口氏の体内に飛込んだとは云ひにくい。鹽田博士の手術後の報告に見ても腹の中は銃傷以外では極めてきれいであつてアクチノミコーゼの古巣があつたとは思へない。馬の如き家畜病たるアクチノミコーゼが入院中の濱口氏に侵入する機會があるとも思へない。とにかく佐郷屋の射擊とアクチノミコーゼとは直接因果關係があるとは思へない。然し間接には無論因果關係は認められる。第一衰弱甚しいから抵抗力は少い。負傷前即健全の時に僅微の菌が潜伏して居たかも知れぬが健体の抵抗力に負けて病狀を發現し得なかつたが、病衰に乘じてはびこつたともいへぬ事はあるまい。侵入の門戸はとにかく判然せぬが事實直接死因はアクチノミコーゼである。かういふ風な醫學的常識で行くと濱口氏の死因は射擊と無關係なるアクチノミコーゼと稱する家畜病の感染に由るといふ事になる。然し醫學的といふ形容詞を止めて一般常識的に考へて見れば若しあの事件が不便な田舍の驛頭で起つたとすれば鹽田博士も眞鍋博士も斷けつけられない。輸血など固より出來るわけのものでない。現場で輸血が出來なければ元氣が恢復せぬ。病院に運ぶまでに死んでしまふ。さうすれば佐郷屋に射殺されたといふ事になる。偶々今日の醫學が輸血術に於て進んで來たが故に、そして射擊された處が東京驛といふ極めて交通の便宜のよい場所であつたが爲に、そして鹽田、眞鍋博士等が出張もして居らず丁度病院に居たが爲にかく迅速に事が運んで一年以上も命を延す事が出來たのである。尤もアクチノミコーゼなかりせば尙十數年も生きて居られたかも知れぬが、それにしても一年以上生きられ、議會に迄も出られたるは全く醫學の進歩と交通の便との賜である。あれがルンペンか何かなら東京驛頭でもあのまゝ死んだであらう。

又法學者的の常識でいへば兎にかく犯意を以て謀殺せんとしたのであるから其結果が死を幸に免れたとしても、それは犯人の罪の輕重を決すべきメートルとなるのは少々變である。況んや邊鄙でやられたら必ず即時致命的であつた筈の重傷であつたのを近世醫學の賜たる輸血と鹽田博士の外科的神腕と眞鍋博士の內科的妙術とで一年有餘の歲月を生かしたに過ぎないのだ。それに尖端的な辯護士諸氏が矢鱈に鑑定々々を高唱して死因を醫學的常識の方へ押しつけて司法宮の法學常識を轉向せんとしてゐるのは誠に苦々しい次第である。

近頃重大なる犯罪事件には辯護士が鑑定や再三知名の法醫に依賴して意見の背反する事あるを奇貨として犯人に有利なる辨護をなすの風潮が見られる凡て書類による再鑑定では眞相が必ずボケて來る第一の鑑定が完全無缺でない限り、第二第三の鑑定は第一の鑑定の穴を拾つて結論をボカすのが常規である。重大鑑定には最初の鑑定人を撰ばねばならぬ。

再三の鑑定で事件ボケて來る

（七、四、八稿）

川柳塔

素•琴•山•線•合議選

○　朝田新水

都會の灯悲しきものと知る家出

住吉踊

ズロースの見えぬ程度にまで踊り
徒らな芽を吐く草よ地上權
銀行と心易さを知り給へ
顔色に拳出るかと思ひきや

亀之瀬隧道地辷り所見

大地さへ當にはならぬ明日の日の

○　西田艸樂

ダイヤ嵌めても四十の手筋が立ち
餘所の社の師匠が節を褒めて呉れ
春風に臍出して居る鬼ごつこ
鬼ごつこ道行く俺を楯にする
嫁き後れて活動寫眞が詳し

◇　中野裸人

歩き廻つたあげくコーヒで別れたり
鹽酸のツボが並んでる差押へ
看護婦のめがねが光る手術室
金持ちには思へない程めしをたべ
受け返事がよいので母を喜こばし
話聲が春の硝子を越へて來る
勉強の横で老舗を賣る話
高下駄はいておこられてゐる大きな娘

◇　龜井愚龍

をとめねてゐるむらさきのかぜ
青空痛き病室の春

三二、三、二三、

いばらぎなをみ君が死んでる

退院の某君へ送る

さみしさを云はず萬歳となんける
刀根山を氣樂と云へりかなしけれ
ふとんから足が出てゐる春の室

◇　水谷鮎美

豆炭のにほひも朝の空氣です
枕ほころびそばかすの毎夜でる
寒鮒の一匹釣れし風の中
鼻たかし處女を失ふはなたかし
物干の單衣ものこそ我姿
筍につきし土なごしたしめり

◇　姫田夕鐘

知りつゝも流行に遲れがちにゐる
成上りピカ〳〵光るものを提げ
姿見へ若き燕がのぞき込み
氣晴しに來たにサービスものたらず

ふるさとにて

ごこからか鐘の聞こゆも故郷のこと

◇　熊谷紅

子の熱は高し日給考へる
ピクニックラムネの剩錢は濡れたまゝ
儲からぬ話へ亭主尖りきり
政想は主人と意見違ふなり
春風へわさびのきいた握り壽司

◇　中澤濁水

探す燐寸旅のポケッを逃げまはり
遑乞なか〳〵させぬ燗が來る
住吉踊り雨の晴れ間と言ふかまへ
妓の帶をもうよい時分撥が出る

◇　日野華水

大聲が春の電車に乘つて來る
ほんぼりが二つに見えて花に醉ひ
ステッキの先へあたつた春の土
引出しをぬくと女房の來る世帶

◇　喜多春秋

辻將棋大きな駒をつきつける
歩みよる話へ煙草入れを拔き
瀧の道少しおくれて妻同志
子があつて疊に轉ろぶラムネ玉

◇　田中都之介

S、O、S、伽藍の壁の老衰よ
骨があるとは思へない豐滿さ
OH！春だ正直なる夢よ

◇　川村觀月

父と子の意見がちがふチウインガム
朝がたの雨を父だけ知つてゐる
原稿を書く欠伸にも春ごゝち

◇　西村明珠

八人が起き出た朝へ鳴るラヂオ

悲しい涙の前に特急車の車輪
生活をひきしめさせて子は病みぬ　吉田水車

◇

ピクニック食へる草なご摘んで去に
はね上げて上げて圓タク儲からず
河岸の木の香よ春は三月　岩崎柳路

◇

遠い火事山から見てる便衣隊
移り香を妻にさとられまじとする
張つた乳工女托兒所へ急ぎ　岩垣奇可愛

◇

ドンゴロスさへ賣飛ばす暖かさ
角度かへて見て呉れ俺のスペクトル
端歌より唱歌の好きな父なるぞ　妹尾變人

◇

日當りにゆくと人間らしくなり
指先で空に書く字の達筆よ
散髪をするにも元氣要るのなり　松下小柳子

◇

洋裝の胸のあたりへ目をなげる
呼びに來た友の瞳がぬれてゐる　尼綠之助

沈む陽へトロッコの音低くかりき
すましやの蒼太に春は邪堅です　平井蒼太

◇

粒々集（其ノ一）

東京　富士野鞍馬

塹壕から覗く班長又やられ
逢狀にトランプいそぎ片づける
屋形へも千人針をたのまれる
マスクと眼鏡に忙しい耳
新世界の朝をきたなく見て歸り
衣食足つて此頃を習畫帖
僞りの都會ときめて歸農する　金澤　安川久流美

つばくらめ補裝道路を知つてゐる
明治天皇の御姿は立派
酒を呑むことを諫める五ッの兒
吃る子の七ッの歳が氣づかはれ
麥酒二本干してあつけなく別れ
底氣味惡く乳呑兒が考へる
坊さんが銀行へ來る午前九時

滿洲國川柳行脚

長春—奉天—安東

大島濤明

奉天

昨秋滿洲事變突發以來初めて奉天に來た。先づ驛を出ると悅來棧(支那の旅館)、朝日館、何々食堂、カフエーなどの諸店がずらりと眼に映る。それ等の建築物の壁といふ壁には「滿蒙の樂土は是からだ」とか「平和鄕が出來た」とか「共存共榮の實を擧げよ」とかいふ所謂新國家の現出を悅ぶべき標語のビラが貼られてゐる。町の入口には華やかな綠門が立つて、新國家萬歲のイルミネーションが裝置されてゐる。かくて滿洲國の建設を市街を擧げて悅んでゐるかのやふ、だが町を歩いてゐる支那人等は「何處のことだか」と言つた風に寔に無關心のやうに見受ける。

悅びを強いられてゐる新國家

何だかこんな氣持ちが湧いて來た。軍部はじめ日本が多大の犧牲を拂つて日支滿蒙在留民の爲に努力してゐても、土民には何程の感謝の氣持ちを有するか疑問でならぬ。

◇

北大營の戰跡に行つて見た。案內者はこゝが一番戰の烈しかつた處です、と云ふ場所は小銃彈の跡がいくつも殘されてゐるしかし旅順の戰跡を見た眼にはほんの遊戲位いにしか思はれぬ

彈痕が少うしてあつて古戰場

雪解けの官兵營內の空地はどこもかしかも泥濘になつてゐて、そこに迫擊砲の不發彈がいくつも轉がつてゐる。これは皆な支那側の彈丸だと說明して呉れた

ぬかるみの中に死んでる不發彈

◇

自動車は奉天城內に這入る。事變以來門扉を閉じてゐた城內の商店も皆商賣をやつてゐる。町の人も右往左往と賑つてゐる町の中程は泥鼠のやうな薄汚れした服の巡警が立つてゐる。而

かも十七八才位の若い者が交通整理は巧みなものだ。

官職がついて威のある鼠服

省政府、公安局、財政廳など學良時代の役所が廢墟のやうに並んでゐる。塀は壞れ、看板は取れ、砂埃りになつてゐる。この有樣を張學良が見たら定めし感慨無量だらう。

主のない衛門公署の砂埃り

長　春

滿洲國の首都新京に來て見ると旅舘は滿員で、不意に來た旅行者は大面食ひ、家屋は一戸の空屋もなく、一時預り人さえなかつた電話が三百圓にもなつてゐるし、流石は新首都の建設景氣であると思はるゝが、さて何處が景氣がいゝのか、建築するにも都市計畫が決まらず、土地の貸下も出來ず、工業が初まつたといふでもなければ、特産物が增加したといふでもない。只新國家の首途となつたといふ先き頼みの空ら景氣である。

洪水の跡はちよろ〳〵水流れ

あまりに浮つ調子でゐると今にこんなことに成りはせぬか。

◇

何は兎もあれ滿洲國の執政府は拜まねば相すまぬと、その門前を自動車が走つてゆく。それ程宏大な建物ではないが、カーキ色の服を着た近衛兵が立つてゐたり、自動車が六七臺も列んでゐたり稍々壯嚴のやうにも思へるが、何處となしに奥行がなく、案山子か何かを見る樣な氣持がせんでもない。

兎も角も嚴然として執政府

◇

寬城子から南嶺の古戰場に廻る。我が軍が最も苦戰をしたといふ東南方に行つて見ると、倉本少佐初め、何々上等兵、何々一等兵戰死の場所と書いた新しい白木が幾つも立つてゐる。その墓標の前には長春の婦人冒か何かからセメントモルタルで作つた花筒か一對供へられ、金幾花や樒が差され、線香の燃え殘りが雨に打たれて倒れたりしてゐる。

新しい墓標へいつか頭が下り

安　東　縣

こゝには川柳家玉田苓草君がゐる。朝七時着の列車を苓草君は迎えて吳れた。川柳友人の親しさをしみじみ味ふ。二人で町を廻りながら鴨綠江岸に來た。氷も解けかゝつて一部分は流水となつてゐた。

漕いだ筏に思ひが籠りや

解けた氷に主の顏

川を覗けば笑顏がうつる

筏流れて又くづす

こんな俚謠を口ずさみながら、遙かに新日本の新義州を偲びながら鎭江山公園に向ふ。

鴨綠江日本の端を見て歸へり

◇

鎭江山は自然の山岳を背にし江松、柏楊、櫻の類が繁茂し、風光明媚である。曾て大連新聞社の主催で滿洲八景の公選をし

た處、第一位に當選したので、花崗石の碑が高々と立てられてゐる。

◇

料亭田良之助に落ち付く。こゝは安東一の旗亭で十數名の藝妓を抱え、安東、新義州その他この附近の上客を集めてゐる。年三十三といふ藝妓幸四郎、ちと川柳を解し色紙などを持ち來つて攻める。そこへ千代香といふ二十位の美しいのが「先生！あなたは北海道の人を知つていらつしやいますか」

「古い川柳だつたら大抵知つてるが」

「村井といふ人御存じ？」

「村井潮三郎君かね」

「えゝそう……龜井さん御承知？」

「知つてるとも皆古いつき合いだよ、君はどうして知つてるの」

「妾し函館にゐましたの、そして或る川柳家の家内になつてゐましたわ、酒田の荒木さんや、東京の川上さんなども知つてゐますわ」

「あゝそうか、それは懐かしいね」

此の安東でこんな拾ひものをしやうとは夢にも思はなかつた。

◇

安東から奉天に向ふ車中で東拓參事渡邊得四郎氏に遭ひ、奉天長春間の列車中で、哈爾市政公署顧問の遠矢治吉君に會つた。何れも十何年振に出會つた懐かしい人だつた。旅行の趣味はこんな所にもあるものだとつくづく思つた。

庄君と會ふ

庄萬よし君が大連に見えた。顔を知らないので赤い紙に「庄萬よし君歓迎」と書いて埠頭に立つてゐたが、遂に見當らぬ。それから庄君から着連のハガキを受取つたので大連中の旅館全部を虱潰しに調べた結果花屋ホテルに止宿といふことが判明した。夜になつてからやつと電話で話が出來、午後十時頃旗亭湖月に萬よし君を訪ね、同君を引出して自分の根城喜扇へ伴つた。初めて會つた中ながらもう十數年前からの友人のやうな氣がする。無産運動や、思想問題に就て面白い意見をきく。色紙を書く川柳の話をする。十一時頃君は再び湖月へ歸つた。さてそれから先きは無事だつたかどうか。

此度は遠路を大擧してお出で下さいましたにも拘らず、何の風情もなく、その上萬事不行屈勝にて、誠に恐縮の至りに存じます。

然しながら、句作、懇親、交歓等について得るところ多大であつた事を欣幸とする次第であります。

茲に御禮と御詫びを申上ます。

京阪神川柳團

關東川柳團各位

柳川

百度詣

藤里好古

余は年來「町人大衆の宗教觀」を、隨筆、洒落本、川柳、狂歌等に據つて檢討しつゝある。是等のものは虛飾なき町人大衆の叫びであるだけに、名僧知識のものした著作の如く曲筆舞文の跡がない、故に當時の町人大衆の無邪氣な信仰觀が表現せられてゐると同時に、それ等の特權宗教家の表裏矛盾せる生活相をテロして餘蘊なく、眞の時世粧が窺れるのである。「宗教世粧史」の檢討は以上の如く、實に「川柳」なくしては完璧を期し難く貴重なるものである。本誌の壹百號に際して何か書けと課せられたので、余は以上の見地から壹百號に因んで「百度詣」の大要を書き送ることゝした。

○

「百度詣」は藤原氏時代に創り、當時の天台宗では天台大師の遺法たる「法華懺法」を、百日間佛前で修する「百日懺法」の行法—宇治拾遺物語十一—が、當時勃興したる練行苦難を重ねるを以て、解脫の方便とした「修驗道」に影響し、「御嶽精進」—源氏物語手習卷、御堂開日記とて、庭前に於て金峯山（大和國）を百度び禮拜する在家勤行となつて表現した。「花島餘清」には一段きぶき精進なりと云つてゐる。更に祈禱に際して上賀茂社と下鴨社との間（約半里）を、忍苦練行の爲め百度往來して祈禱する— 新續古今和歌集二十—やうになつて、漸く「百度詣」の祈願風習が發現したのである。「臺記」久安三年三月十五日の條に、

仲春拜二賀茂之社檀一、企二百度之參詣一苦行隙述懷矣。

とあつて菅原孝標（十六夜日記の著者の父）の

上下往來百度功、誓心引レ步鴨堤中、苦行積何攸憶、素願偷祈古拍風。

と記載せり。

かくて源氏時代に入りて此忍苦練行の信念は漸く喪失せられむとし、百度詣の道程も神社の一の鳥居と神殿との間に短縮されるのみならず、計數的に多くの供人を率ひて行ひ、短時間にて濟さむとするに至つた。

百度參りの供も百度び —武玉川十五

半分は百度參りを供にさせ —武玉川十四

兩句の如く、廿人打連れて行へば五回で百度

となり、五十人にて行へば二回にて終了すると云ふ調子に、特權階級者は多くの供人を引率した。「吾妻鏡」卷九に賴朝が陸奥の藤原氏討伐の際、政子が鶴岡八幡宮に百度詣をしたことが、左の如く記載されてゐる。

文治五年八月十日、丁酉、今日於二鎌倉一御臺所以二御所中女房數輩一、有二鶴岡百度詣一、是奥州追討御祈請也。

亦「平戸記」には、

延應二年二月十一日、臨二夜景一蜜々參二祇園一、依二恒例之勤一、率二人數一有二百度詣事一。

とある。以上の二例證に示す如く祈禱する本人はサボッて居つて、供人のみにやらせるやうに百度詣本來の使命意義が忘失されるに至つた。更に百度詣を回數多くなせばより以上に、靈驗顯著なるやうに觀念され「實躬卿記」正應六年三月廿八日の條以下を看るに、

廿八日に三十回、廿九日に二十回、卅日に三十回。

と八十回に渉つて百度詣が行れてゐる。百度詣を三十回行ふには三千度の參詣を要す。是を一日に行ふとせば如何に多くの供人を煩して居るか、想像の限りではない。

かくては敬虔なる信念によつて行わるゝ修練の行法は徒らに多きを誇り、何の事はなく

神佛に手前勝手を申上げ　—武玉川十八—

のやうなものであつて、

一文出して諸願成就　—武玉川十八—

と寔に御都合よき御祈りで、神の冥助は期し得られないことは火を視るより明らかだ。

○

近世の「百度詣」は源氏時代以來の通り傳統して來たが、町人大衆には供人を煩して其回數をゴマカスやうな豫猶もなく、かるゝ不信な事はしなかつた。

はなし鳥百度參りに行あたり　—武玉川九

の如く一心であり、

百度參りの乾く唇　—武玉川四—

と忍苦練行の赤誠が漲つて居つた。百度詣の祈願は多く

百度參りの細長いかほ　—武玉川五—

と云つた調子で、病氣平癒、延壽が多く災難除却の願意を以て行ふものは至つて少く、他の願意に依るものは殆ど無いと云つてよい。

百度目の緡(さし)は娘がにぎりつめ—武玉川十六

は百度詣の數取の爲めに手に緡(さし)(藁を捻つた長さ約六寸程の極細の繩)を百本握り、一回毎に一本宛捨てゝ手に殘れる數を以て未行の回數が知れるに便してゐる。其一本は神前で禮拜の際に捨て、

神の前小言のやうに伏拜み　—武玉川四—

と熱禱する。故に中々の大事業で時間のかゝる事も亦夥しい。今日では百度詣をするやうな熱信家もないが、昔はザラにあつたから日によると其緡は神前をうづ高く埋まり返したことすら屢々あつた。

百度參りの跡を掃き出す　—武玉川三—

と下僕が掃除し、

掃除番百度參りをすさに切り—柳樽拾遺三

と役得として、それを處理して居つたのである。

以上の如く「百度詣」は平安朝末に創り、鎌倉期に亂れ、江戸時代に及んで平安朝の昔に復へり、明治大正に入つて凋落の彼方へ進むだのである。——七、四、八——

光耀抄

葭乃選

大阪　機見女

身ひとつで歩いてみたい子守の春
食器ふれ合ふて營養を案じ

崩壞家屋の前に立つ

買ふておくれやす觀るだけが情かは

大阪　茂代

温泉のつもり朝風呂目をつぶり
やうやくに來た電車はすゞなのだ
これからだ夕刊を讀みお茶をのみ

大阪　武子

花びらへ照るも曇るもお釋迦樣
八重椿やもめの庭に咲くも春
地すべりも今は名所の一つなり

大阪　壽枝女

揚卷も一人來てゐる晝の風呂
漢方藥暗い窓から渡される
町内の花見へ糸屋戸が閉り

魚崎　吟女

紫のたもとを重ねて春や來し
新入學へ朝寢のパパも起きて來る
お手玉が一人作れて念を入れ

撫順　松代

コロッケの仕舞大きく一ッ揚げ
留守の家計簿交際費の多し
もう女將定連の口にまけて居ず

神戸　茂もよ

父兄會千人針の話が出
散髪をいやがる子供等の熱を知り
寢あまつて風の音きく日曜日

大阪　きし子

しんみりと二人醉ふてる花の蔭
かこづけの花に醉ふたかチドリ足

大阪　公子

赤坊の年程貯金出來るなり
コンパクト又眺めてる女の子

大阪　美津女

水藥り母も一さじのんでみる
緣日の鉢植根まで抜いて見せ

○

葭乃

苺は壽婦處女の櫻ン坊
彼氏の趣味はつきず拜聽をしてゐれば
客にあはすレベルピアノのキーのこと

似鈍敏感

前田五健

私が常に「川柳雜誌」に對して嬉しく思つて居る事は大なる包容力のある事で如何なる句風にせよ川柳は川柳として尊重する此の何々調などに囚はれない包容力に自ら頭を下げるものである。之れが軈て川柳向上とも大衆的とも浸潤徹底ともなる一要素を爲すものと信ずる。

私は眞言宗徒ではないが如何なる宗教にも相當の理解は持つて居るつもりである。そして常に敬意を表して居る。先年ある眞言宗徒の團体の招きに應じ何んでも構はぬから講演しろに斷はり切れず講演をした其の時の意味を思ひ出し思ひ出し書いて見よう宗教と私の川柳觀信念とも云ふべきものであらふ。

如何なる御宗旨にせよ其の道の醍醐の法味に到達する迄には實に容易でない。醍醐味とは何か涅槃經に云はく醍醐は最上なり。若し服する者は衆病皆除こなる即ち牛より乳、乳より酪、酪より酥、酥より熟酥、此の味が醍醐味であると說いて居る。

而して佛法の正法は醍醐であり醍醐は卽心卽佛である。傳灯錄に云はく前念不生卽心、後念不滅卽佛、總ての事はこゝ迄行くべく努力せねばならない。

四國は弘法大師の宗旨が多い春から菜の花道を遍路笠が續く口々に南無大師遍照金剛を稱へ長汀曲浦或は險山大河を遍歷して行く此の苦樂修業禮拜の間に教へられ導かれる大なるものがある。

川柳も其の通りで雲烟過眼机上の薄つぺらな論では川柳が出來ない。

假りに南無は歸趣の義で悲華經によると決定せる譯が世尊の名號の音聲であると云ひ南無入師……南無八幡……南無何々……南無川柳……私の趣味宗教とも云ふべき川柳をあて篏めて行くと

○南無は川柳の正道

○大師は卽心卽佛川柳に志す川柳人のとろけ込む心

○遍照は古今に渉り研究自己鍛錬社會進出向上の普邊光明

○金剛は堅き信念

斯の如き樣のものである、川柳に革新傳統の區別はない筈である革新にもイ、川柳もあれば感心せぬものもある傳統も亦た同樣である。歸する所は「川柳は川柳である」其の綜合に自己の力を加へ川柳を光らしめる之れが本當の川柳である徒らに排他攻擊よりも自ら磨くべきである

約束もない束縛もない自由光明普邊に浸る川柳心。自力本願の川柳心。常に現役の一兵士として働く之れでイ、のであ

る之れは川柳のみに限らず宗教でも武道でも總ての業に道にさうあるべきだと私は信じて居る。

此の一兵士現役兵として働く事に就ては當地の新聞紙にも亦た數年前私の著書「一糸集」にも力説して置いたが……昨日今日の川柳に忠實にして初めて明日の川柳を語る資格が來るのである「不斷の努力」を忘れてはならない。

かつて劍道範士居合術範士中山博道先生が私に書いて與れた半折に「瞬息心氣力一致」とあつたが此の瞬息心氣力が一致して發する迄の階梯には相當の鍛錬を要する事は勿論で常に一兵士の心でやらぬと到達は出來ない例へ一兵士の氣でやつても一生通して到達出來ないかも判らないのである。況んやくだらない議論ばかりしたり野郎奪大では何が出來る。

不斷の努力平常の鍛錬が必要である然して不明の疑義を生じた時は先輩や師に聞くべきである潔よく聞くべきである古來道を研めんとするには師を要する師は道を傳へ業を授け惑ひを解いてくれる。人生れ乍らにして判るものでない惑いて師に聞き書によつて惑を解くのは決して恥でない、其の識や經歷に關係はない道に於て存する所があれば遠慮なく聞き師とすべきである此の點は初心者のお方によく心得て居て頂きたいものである。

さうして不斷の努力には恥かしがる、自惚れるをスッパリ捨てなければならない内觀自省、他觀洞察こゝから自分の川柳を生む樣に努めなければならない其れが現はれる現はれない入選するせないのは時と場合とによるもので決して落膽すべきものでない常に現役兵士の心持で居れば必ずいつかは光明が輝くものである

苦邊に不沈・樂邊に囚はれず天地中道を信ずる道によつて悠々と歩む以上が私の信ずる宗教觀であり川柳道觀である。

斯の如き意味で講演した元よりかゝる事は既に先輩諸氏が云ひつくして居るとは思ふが若し何か獲る點があらば幸甚至極である。

正誤

四月號四十一頁

新妻の意地はむつりと掃き始め　銀雪

改姓

伊藤綠之助君は尼綠之助に改姓されました

粒々集（其ノ二）

御影　長崎　柳秀

氣に召さぬ酌がぬるいの熱いのと
誘惑をされさうになる女事務
針仕事直き母になる忙しさ
入選の畵伯左傾の髪になり
榮轉の驛迎へるやうに櫻咲き
御茶うけの有る讀み方に身が入らず
色戀の心配だろと叩かれる
月給日おれは貧乏の生れつき
爪先きは痛くなかろかハイヒール
青雲の希望女給にひやかされ

松山　前田五健

春だ春だと言ふ内に借り
うまくやれなどゝ陰では喘ふ奴
聰明にして緣談の纏らず

淺井冷々子君羊羹賣出開店

松山の味こゝにありさくら堂

かんだ鼻なんの氣もなく明けて見る　鵬加
清姫を引つ提て來る富士みやげ　水治
天井を物置にする木ぐすり屋　木馬
てんぷらの指を擬寶珠へこすりつけ　帆布
消炭にくつつき二階大さわぎ　綾丸
とはしらず美女をひつぱる桑ばたけ　文水

（二四頁より續く）

此編には日本一の富士山を詠むだ作が目立つて多い。これも「川柳雜誌」に因緣をもつと解したなら、欣快な思ひがある。例へば百三十二裏に

八景は置き土産なりさくや姫　松哥
叩く戸に一合升の人見穴　早聽
によいと出た顏が三國一の美女　佃
富士を枕に大天窓れらふなり　雪下

などゝ列記されて居るが如きである。

然し柳多留は編を重ぬるにつれ、私共の詩的研究から、遠のく趣きのあるは、遺憾とする處であるが、わが「川柳雜誌」は號を加ふるにつれ、より新らしき川柳詩への向動を指示して、徒らに傳統川柳の名にかくれ、晏如としてゐない勇猛心を禮讃せねばならぬ。

「川柳雜誌」は其名の尤も正直に示す如く、今日の川柳の雜誌である。

西ノ町MEMO（續）

綠雨生

▼今回、社友の阿部閑生、中見光路、西田艸樂の三君が同人として推薦され、一層本誌の爲め盡して頂くことになりました。

柳壇の歴史的會合

——關東川柳團を迎ふるの記——

關西訪問團——それは實に日本柳壇の一半を背負つてゐる先輩及新進の塊であつた——の西下を心から歡迎すべく準備の第一回打合會が二月上旬心齋橋筋の心交社で開かれた時、關西に於て最も有力なる八吟社の代表者達二十數名が顔を合はせたので、既にそのときから今回東西の交驩は、柳壇の劃期的收穫を齎らすであらうと、ひそかに豫期されてゐた。

遂にその日が來た。昭和七年四月三日！神武天皇祭の佳節、正に麗春の光が漲りわたつた申分なき快晴であつた。

朝、本社の路郎主幹が出迎へのトップだ。まだ靜かな大阪驛頭の空氣の中をにこやかに立つてゐる人に西田當百氏があつた。次第に出迎への柳人が增える。柳人の波がプラットを流れる。待遠しき汽車のスピードだつた。

七時十八分、列車は辷り込む車窓から久良岐翁盛んに旗を振る。

眞つ先きに東京から同道した「たまむし」の一歩氏が列車から飛び出して來る。續いて一行はどや〳〵と降りてプラットに並ぶ。出迎えへの波が迫る。喜びの波だ。感激のシーン。握手々々。

驛で本社の路郎主幹が關西川柳團の代表として歡迎の辭をのべる。

關東川柳團からは周魚氏が代表としていんぎんな挨拶をかはされる。

萬歳三唱！の後みんな一團となつて驛前に出る。直ちに一行は自動車に分乘して見物のコースへ出發する

本社からは松盛琴人、朝田新水の兩君が接伴役として乘込む。春風を切つて十一臺の自動車は、洗練しきつた川柳家の肩を詰め込んでおとなしく續いた。

豫定のコースを取つて市内を見物しつゝ新世界噴泉浴場へ着く。風呂をあがつて少憩中二三の人に感想を叩く—皆風呂に長途の疲れを一掃して惡からう筈がなかつた。三太郎氏初め酒豪連は、道中徹宵呑みつゞけた咽の乾きにソーダ水に飛びつく。一行中の多くは「今度こそ充分見物しておきたいれ」と云ひ合はしてゐた。

新世界から一路住吉へ、直ちに參拜して神殿に額づき神樂をあげる。

一行中の紅一點柳葉女史は勇敢にも

あの太鼓橋を渡つて見せた。

住吉踊の説明を聞いてから踊を見物する。これは非常に好評であつた。中には手振り足拍手で歌の節を眞似て、よき家土産に持歸る向もあつた。尚此所では東西のアマチュア連中がパチ々々カメラに納めてゐた。

（一同記念撮影をする）

住吉から雲水へ——座につくと、關東團では玉兎朗氏、關西方は水府氏が各一人宛紹介をする。それから和氣靄々裡に晝食の膳部に着いたが、二人一膳式の料理には皆一寸面喰つたらしい。胡麻豆腐の一片を半分宛分けるのはよいが、吸物一椀を二人でどう分けようかとお椀を中にして睨めつこ暫く、聊かお困りの方もあつたらしいが、それそこが東西融和交驩の眞意義を徹底せしめる試金石だと皆仲よくしたらしい。此時分から前途の行程が大分危ぶまれて來た。午後二時に會場法雲寺着の豫定がとても間に合ひさうもないからだ。

そこへ萬よし君がわざ〳〵雲水寺迄來て、同君膳入りの大阪城見物の内、天守閣昇りを中止せぬと時間がないと打合せをする。雲水から四天王寺の參詣を濟まして大阪城へ到着、時正に一時四十分。尚前途には吉田屋、文樂座等のプログラムを控えてゐる、しかも句會時間は容捨なく迫つてくる。

大阪城では特に萬よし君の膳入りで紀州御殿の内部を拜觀し、茶菓及記念繪葉書のお土産頂戴、天守閣は外觀の偉容を眺めたまゝで城門を下る。

次に九軒吉田屋へ急ぐ。吉田屋では特に正月松の内の服裝を仲居にさせて、一行を招じ茶菓と夕霞遺物の刷物を出し、尚當主木村氏父子が揃つて一同へ挨拶と説明の勞をとられた。あの薄暗い廊下で、何百年か前の建築其儘の茶室や、夕霧の部屋、或は吉田屋の臺所の古風さなどを見せ、一行を成程と得心せしめる。一行中にはもうこゝで落着きたいなぞといふ囁きが洩らすものもあつた。

時に豫定の時刻に遲れること一時間、急ぎ一行は車を句會場へ飛ばせる。

會場では朝の内から橋本絲雨、福田山雨樓、福田鶴峯の諸君が番傘の方々と共に諸般の準備に懸命の汗を拭ふ。

もう午前中から熱心な柳人が詰懸けてくる。午後一時には會場の大部分を埋めてしまふ盛況！。それが大阪は勿論、神戸、京都或ひは近畿の各地から知名の柳人が續々參集されたので、忙がしい中にも受附子の喜ぶこと限りなし。

待ちに待つてゐるところへ、見物のコースを無事に終つた一行が威勢よく乘込んでくる。會場は忽ち拍手の波、歡呼の渦と化す。

時に福田山雨樓君司會者として開會を宣し、關西川柳團代表の本社主幹麻生路郎氏を紹介する。

路郎主幹は決然と立ち（主幹は前夜の準備に關する最後的打合會から、當日早朝迄徹宵されすつかり疲勞してゐられたので、心配に堪えなかつたが、一旦壇上の人となつてからは別人のやうな意氣を示された）關西川柳家を代表して、關東川柳團其他の一行に對する莊重なる歡迎挨拶を述べられると共に、聊か平素の所懷を披瀝したいと前提して、川柳は川柳家同志の提携も勿論必要であるが、社會の好意的關心と理解ある鑑賞を要求することを閑却してはならない、と堂々十數分間に亘り其の所論を進めて喝采裡に降壇す。

次に歡迎準備委員の代表として岸本水府氏一場の挨拶をする。これに應じて關東川柳團代表として村田周魚氏登壇、鄭重なる謝辭と關東を背負つての抱負を語る。

次に柳壇の大御所坂井久良岐翁急霰の如き拍手に迎へられて登壇、その少年時代會て遊びし大阪の印象を追懷、更に今日の大大阪の盛況をたゝへ、話題一轉し

て川柳の社會進出を論じ、翁か這般關東の數箇所に於て開催せられたる川柳講演會の模樣を、當時のポスターを以て示すあたり翁の面目躍如たるものあり、快辯は次第に紅潮を呈し遂に川柳の歸趨を論じて了る。意氣愈々軒昂として場内を壓する感があつた。

會場内はなごやかなる談笑の空氣に包まれ、祝電三十餘通の朗讀、寫眞撮影を終り、兼題席題の披講に移る（別項詠草會報欄掲載の通り）この間西田當百、渡邊虹衣兩氏から夫々懷舊回顧のエピソードを語られ、興は盡きなかつた。

披講では大谷五花村氏の劍花坊張りが關西柳人にとつて稍異樣に感ぜられたけれども亦東北調を傳へてなつかしく感ぜられた。

川上三太郎、前田雀郎兩氏は選後感を披講に先立つて述べられた兩氏の話ならいくらでも聞きたいと云ふ場内の期待がその傾聽すべき柳談の寧ろ短かきを惜んだ。

かくして關東川柳團歡迎川柳大會は無事そのプログラムを了したので司會者福田山雨樓君めでたく閉會を告げた。一同が座を起つや時を移さずして、鳥山一歩氏の發聲のもとに關東川柳團萬歳を三唱する。續いて紋付姿の川上三太郎氏の音頭で關西川柳團萬歳を三唱ジャスト六時！ 感激の句會は幕を閉ぢた。午後七時から懇親晩餐會に移る。會場「北むら」の廣間は忽ちにして、壽司詰めの盛況！酒と肉と、笑ひと懇談との渦卷が素晴らしい勢で旋回する。東西川柳團の交驩は正にその絶頂に達した。

九時頃、夜の心齋橋、道頓堀を案内すべく會場を引上げる。

その夜一行は宿舍、法雲寺に一泊、翌四日は京都遊覽のコースに移る。本社からは橋本綠雨君が接伴役をつとめた。

今回この東西川柳家——しかも全日本柳壇の大半をその双肩に荷なつてゐる數多の先輩川柳家を中心として——の會合！そしてその朗かな交驩と融合とは必ずや川柳の將來にかゞやかしい光明を齎らすに相違ないと信ずる。少くとも斯く信じてもいゝ最も大きな動機を作つたものと云へやう。眞に柳壇の歷史的會合の第一頁だ。

終りに關東川柳團一行の御健康を祝福する。

（寫眞說明　五三頁は歡迎川柳會場、五五頁は金澤榮六公園に於ける高橋斗幹、綠雨、かほるの兩君）

一路集（募集句）

唄

高橋かほる選

鼻唄を止めて盤臺肩を入れ　銀雪
國境の唄別々な國訛り　瑞穂
母さんの唄違てるこ子が唄ひ　琴舟
好いさげん唄で表の戸が開き　胡蝶
逢つてゐて共に唄つてゐてさみし　晴夫
戀をして戀の唄を唄ふてゐ　あやみ
好い聲で唄ひながらに自炊をし　裸人
番頭の唄は窓から藏こ知れ　錦石
春の夜をおんなだ唄かすれ違ひ　千雨
校庭の隅でホ唄で不良じみ　棹二
野邊の唄愛犬時々此方見る　蝸牛
旅先で覺へた唄に三味が合ひ　利生
戀人を待つ嬉しさよバーの唄　柳人
空席がぽつ〳〵できるデカンショ　憲坊
高らかに唄ふ氣になる春の空　しこし
放送の俺だけわかる地方唄　邦哉
青空に唄ひつゞける好ひ氣持ち　變人
晝風呂に我一人なり唄も出る　かほる
唄も出て其日の仕事樂にすみ　壽惠兒
知つて居る唄で口笛ついて行き　葉光
病床でたまたま唄ふジャズソング　省三
はな唄へ割木なか〳〵われぬなり　柳仙
花道へ唄で出て來る頬かむり　柳人
上役の唄四五人でおかしがり　鐘生
三助の小唄も聞ける終ひ風呂　菊路
温泉の日記小唄で埋められ　白帝子
丸窓の唄に夜櫻ひらりひら　坊茹子
別莊の若奥樣はよく唄ひ　有爲郎
拭き掃除だけが用事の流行唄　白柳子
歸村して失業しばし流行唄　天地人

西之町 MEMO

緑雨

▼本誌百號の編輯に當つて自分ながらよくも續けられたことだと思つてゐます。創刊當時は川柳の雜誌と云へば菊版の至つて少い時代で本誌が菊版三二頁を斯界へ送り出した事が抑界にとつて大ショクを與へたものです。或る人からは三號雜誌だと云はれ、また他社へ拙句を數回投句した事もありますが一句もとる句がないと侮蔑的な言葉も云ひ觸らされたこともあり（現在もよい句は作られませんが）他の同人諸君もいろんな方面からあつぱくをうけて動搖した人もあつたが自分は句が拙くとも他の同人に良い作家の出る事と三號雜誌で終りたくないことゝの二つで今日まで家のこともかへりみず出來得る限り本誌のために盡して來たつもりです。

▼尙今日迄續け得られた事は路郎先生の鞭韃と先輩諸氏の後援と愛讀者諸氏の御熱聲との賜物であります今後も本職を離れる迄は本誌のために努力したいと思つてゐます。

▼關東川柳團の一行が四月三日午前七時十八分に大阪へ着きました。その出迎ひに本社から路郎先生、琴人、山雨樓、かほる、素人、新水、里十九、一歩、雨迷、汀柳、鶴峰水車、高知から來た濁水の諸君と私外に三

大聲の唄へ巡査の服が見へ　四五磨
灯がつけば女給役目の樣唄ひ　英賀夫
朗かに唄ふこころも春の宵　夢裡
鼻唄になつて内職氣がまぎれ　沐天
初幟調子外れの唄ばかり　笛秀
馬子唄は小春日和の峠から　洋々
流行唄父居るとは知らざりし　慈雨來
三味に乘る唄はみんなにひやかされ　水人
もらいつぺんお師匠さんが唄ひ出し　素月
赤い帶ほどきつ何か妻唄ひ　正司
思ひ出したことだけついて唄ふなり　艸樂
かまぼこを一つつまんで唄ひ出し　明珠
末席はだん〳〵唄を横取られ　木公
ハモニカへ妻も小聲で唄ふなり　秀樹
ちり紙へ女給小唄を書いてくれ　水車

海狹の白帆は唄と流れて來　青兒
サービスの初め女給は唄ふなり　宏郎
氣まぐれに出たのは關の五本松　露斗
思ひ出のある唄に二三杯つかせ　勝二
面白く唄に合はせてヨイトマケ　方眠
ソプラノへお袋ぞつとすると云ひ　正晴
夜業の灯もうかたづける唄になり　紅
午前二時ねむたい親の子守唄　一久
唄一つ聞いたも春の雨宿り　三碧
炊事場へ唄ひながらに屑けられ　幸村
流行歌聞けば銀座がなつかしひ　鴉天
唄ふても唄ふても戸毎に斷られ　喜久造
(人)二二の春をおどりジャズソング　詩郎
(地)唄つてる隣の人は口をあけ　里十九
(犬)そつぽ猪口おでいれしひ唄になり　華水

獨身

獨身の表情もなく飯を食ひ　柳人
神聖な戀に破れた獨身よ　利生
獨身の室で鳴つてるマンドリン　白峯
氣樂さが過ぎて獨身持ち崩し　笛秀
帶をしめなほし獨身呼ばれて出　機見女
獨身へ或日國から良い便り　三碧

關本雅幽
木村晃卓　共選

上海に獨身二年居たと言ひ　幸村
宿直を輕く請合ふ獨り者　壽惠兒
獨身は噂さの通り少し貯め　他史郎
惚れて居たのも獨身の氣まぐれ　淋天
日めくりをキチン〳〵と獨り者　勝二
獨り身へ河内木綿の夜具寒し　方眠

笑、白柳子、沐天、とも坊、武子諸氏等と他社の人とも合流して出迎へ驛頭で路郎主幹が京阪神川柳團を代表して出迎への挨拶をされ、萬歳、三唱後自動車十一臺に分乘し我社から琴人、新水、萬よし等が豫定のコースに依り案内をいたしました。山雨樓、鶴峰・水車の諸君と私は直ちに歡迎川柳大會の會場法雲寺へ會場係として出張し會場では山雨樓君司會者、路郎先生の歡迎の挨拶鶴峰水車艸樂君の受附係私は宴會係兼會計の役を擔任して無事に歡迎大會の任をはたしました。

▼同人庄萬よし君は（大阪市會議員）五月五日午前八時五十分の列車で大阪市役所の滿洲視察團に加り滿洲各地へ二週間の豫定で視察、大連、奉天、撫順、京城その他の地で歡迎川柳會を催され多大の歡迎をうけたそうです。各地柳友諸氏の御厚意を私からもお禮申し上げます。

▼金澤の産業と觀光の博覽會記念川柳大會へ出席のため路郎先生と、かほる君、私との三人が四月十六日午前九時五分臨時列車で出發片山津溫泉に湯の出旅館で一泊十七日午前十一時半金澤着本社客員安川久流美君を訪れて櫻花滿開の兼六公園をめぐり西町佛教青年會館で正午より開會の川柳大會へ列席し、路郎先生「春の雜話」と題して三十分餘りの講演と席題「足」の選句をされました。かほる君は「母校」私は「見頃」の選句を致し七時散會後かほる君は市内見物私は鄉里へ當夜十一時三十六分の列車でかほる

獨身のやれ寢てこまそ寒い事　露斗
獨身の遲々とたまらぬ貯金帳　水人
獨身ですねと念をおされ　洋々
アプれてものんきな欠伸一人者　阿烏流
父の死にまだしばらくは獨り者　木公
哲學者らしく獨身くらして居　玄茲堂
獨身の瞳へ映る秋の空　憲坊
嫁ぐ下女へ遺る物がある未亡人　銀雪
獨身を淋しくさせた貯金帳　有爲郎
鳥を飼ふ孤獨の姿いぢらしく　艸樂
異國に獨り住めば水の冷き　柳仙
奮闘のあとが淋しい獨り者　明珠
獨身へ世話をしすぎて疑われ　鯉友
獨身の身元沖繩生れなり　裸人
獨身になつて若さを見直され　千雨

感　吟

萬近く貯めて獨身ぼつとかれ　靈壺
獨身の冷たく笑ふ事に馴れ　錦石
獨身を通さうとした腕があり　明珠
幸運か來そうに寢てる獨身者　かずま
たしなみを見せて獨身死んで　耕民

選　後

獨身の氣樂さと言ふ容觀句と次が其の反對に獨身の悲哀な主觀句とが大部分でしたが雙方共今一歩獨身と言ふものに近寄つてほしい感じがしました。秀句が少い變りに沒にするのも惜しいやうな句が多く盲選の程は晃卓氏に信賴して嚴選を謝す

晃卓選

◇

獨身の窓に月の朧なる　艸樂
獨身をあざける樣ないい日和　耕朗
獨身の靴下面白い程破れ　水車
獨身へ母何事か案じて居　義郎
獨身のもう見あきたる壁の色　三碧
獨身の主義が何時しか變りかけ　無鬼
散髪をして獨身の氣の輕き　白柳子
失戀の體驗もあり獨り居る　紅
奮闘のあとが淋しい獨者　明珠
石投げて投げて獨身それでよし　靈壺
獨身明日へ時計のねじを卷き　蝸牛
獨者へ隣の夫婦仲がよい　菊路
獨身と云ふ女將の承知せず　柳次
獨身のポケットはまだ飲める金　勝二
たしなみを見せて獨身死んで行き　耕民
幸運が來そうに寢てる獨者　かずま
獨者本意の知れぬ話をし　南葉
獨身の留守へ母親突如來る　白帝子

君歸阪、途中小松支部幹事上野錦水君大聖寺の高田茶撫郎君と乘合せ車中で柳談花を咲かせました。路郎先生は淺野川畔の「ごりや」で先生の歡迎宴會に出席十七日一泊十八日安川久流美君と同伴で小松支部へ立寄つて十八日夜行で歸阪されました。

▼同人松盛琴人君は四月十日東京の詩人二三十名と京都の加茂、北野、嵐山へ廻遊されて渡月橋畔の三軒家旅館から左の句を寄せられました「醉つたのもう來てるな嵐山」

▼社友中澤濁水君は四月三日關西訪問團歡迎川柳大會へわざ〳〵高知から出席されて關東の川柳家と行動をともにされ六日午後八時廿分の神戸發の船で歸高されました。親しく合つて話する時間が少なかつた事は殘念でした。

▼社友姫田夕鐘君は四月三日、郷里德島へ行かれて句を寄せられました「一刷毛をひいて故郷の山が見え」

▼社友西村明珠君は四月十日務先の方々と琴平高松屋島へ廻遊されました。「二偏目屋島はつきり見直され」明珠の句

▼荒井英賀夫君の御盡力で愛媛縣西條町支部が生れました。今後の奮闘を祈ります。

▼松山支部の幹事三好計加君は、都合により幹事を辭退されましたので坂井拓水君が新に幹事として御盡力される事になりました。

▼柳川洲馬君追悼川柳大會が五月一日山口防府町宮市定念寺内に於て催されるので舊同人吉川啞人君が本社の代表として出席下されることになつてゐます。故柳川洲馬君は本社山口縣の支部幹事をながらく務められた方で昨年十一月廿七日永眠されたのです。

▼江戸みつる君は三月廿九日東京へ出張されて左の句を寄せられました「また富士が見

獨身を母は待つてる湯はたぎり　四五磨
獨身の淋しさ鏡に物を云ひ　胡蝶
獨身の理想に生きて三十五　鴉天
獨身の齢を數へて淋しく居　青兒
獨身に慣れてアイロン買ふて來る　鐘生
獨身の部屋で鳴つてるマンドリン　白峯
獨身と知つてサービス變るなり　利生
獨身と云ふ氣樂さの唄に居る　他史郎
宿直を輕く請合ふ獨者　壽惠兒
獨身の春氣まぐれな戀もよし　正司
獨身のその後左翼に居る噂　沐天
獨身の昔を思ふ失業苦　叶句坊
うどんやの鉢をためつく獨者　琴舟
獨身のなやみを雪の朝に知る　變人
獨身にふつと淋しい膳の影　玉絃堂
獨身の腰が浮き立つ春の宵　千雨
朗らかに獨身金を借りに來る　錦石
獨者憂欝症を意識する　銀雪
獨者いまし〳〵いが春を出る　同
金がないので獨者宵寢する　方眠
獨身へ酒と女のおもしろし　同
獨者又櫻干燒くにほひ　小松園
獨者枕のさやを裏返し　同

佳吟

獨身の表情もなく飯を喰ひ　三碧
空想へ獨身の膝冷へて居る　英賀天
旅先で豫定が延びる獨者　八歩
獨者滿蒙の地圖ひろげたる　柳仙
頰杖をついて獨身尖つて來　錦石

人

獨身の近頃ヒゲをはやしてる　裸人

地

獨身ですねと念をおされ　洋々

天

獨身へお茶も冷たくなつて居る　露斗

軸

獨身の蒲團へ酒の香がうつり　晃卓

選後に

句材の適切なるにかゝわらず構造がバラツク式のため今回も多數全沒者を出した事は遺憾です

たゞの一字添削させて頂けたら充分私には受入れられるものが三句や五句ではありませんでしたおかげで推敲と云ふ事の如何に大切なるかを思はされました。敢て全沒者諸氏に感謝するゆへんです。軸吟は私の獨身當時の體驗ですお笑ひ被下いませ。

へると窓を覗く也」

▼吉村叫子君は上海事件により第九師團より派遣され上海をさるゥーソン砲臺附近にゐられる由

▼福田丁路君は盛岡へ出張され途中松島へ立寄つて左の句を寄せられました「わがものゝ樣に松島を話す車夫」

▼島田翠峰君の令閨は四月十四日二女容子さんを儲けられました、お喜び申し上げます

▼小西無鬼君の令閨は男の子を儲けられましたお喜び申上げます。

▼同人住田亂耽君の嚴父は三月三十日わづか三日間の病で永眠されました。哀悼の意を表します。

▼社友西村山月君の令兄が三月十八日永眠されました。哀悼の意を表します。

▼萬よし君歡迎句會の寄せ書を左の處から大連の大島濤明氏其他、撫順柳川、奉天、京城等から社へ届けられました。他に松江支部、松山支部、帆象川柳社の寄書が着しました。

▼本號の編輯は路郎先生、琴人、町二、山雨樓、丹路、杏三、愚陀、鶴峰、艸樂の諸君と私とで致しました。

轉居

▼村野蒼梧樓（東京府下千駄ヶ谷町四二五ヘ）田中彩秋（大阪市北區澤上江町五ノ七二ヘ）岡彌太郎（大阪市東成區中本町三六六ヘ）市場沒食子（大阪市東成區大今里町三九九ヘ）竹内機見女（大阪市天王寺區上ノ宮町五六ノ三ヘ）鳥谷伊勢子（大阪市北區澤上江町七ノ二一ヘ）明昭學院（）中沼若蛙（神戸市灘區八幡字深田四七ヘ）寺田五柳子（京城本町四丁目一四八ヘ）松本虚聲（神戸市港西區松本通五ノ二ヘ）酒井駒人（神奈川縣平塚市明石町に町名變更されました）

各地柳壇

＝いのちあるを句を創れ＝

關東川柳團 歡迎川柳大會

日時　昭和七年四月三日午後一時
會場　大阪市東區中寺町法雲寺

神武天皇祭の佳節！此の日朝からあつらへ向きの好い天氣で、今年に這入つてから始めて春だと思はすやうな暖い日だつた。コンクリートの街や煤煙の巷から遙か離れたこの寺町の閑靜な一帶は、今日本柳壇を背負つて立つ數多の先輩を圍繞して、超記錄的な柳人の集りを見せた本大會を祝福するかの如く、なごやかな綠の微風を以つて迎へた。東西のさう〳〵たる川柳家が斯く多數一堂に會して、爾が上にも句會氣分を横溢せしめ、意義深い交驩的効果を收めたことは、何よりも大きな收穫であつた。會の順序は別項記載の通り進行して、息づまるやうな緊張裡に散會された。

左に記念すべき大會出席者、宴會出席者祝電を寄せられた方々並に當日の詠草を錄す。

（大會出席者）

（東京）迷亭、○丸、千壽郎、茶六、杜若、花川洞、夢一佛、玄六、比侶志、盈光、鞍馬愚佛、壽山、雀郎、桃太郎、周魚、久良岐、榮二、三太郎、玉兎朗、しげを（横濱）懷愈（靜岡）柳葉女、柳多良（長野）柳兒（福島）五花村（丸龜）抽闌子（名古屋）文醉、鳳石、長府（高知）濁水（奈良）白帝子、長劍、翠峰（新舞鶴）綠墓（京都）幸男、良之祐、晃洲、紅壽郎二山（神戸）卯生、一夫、益幸、華水、蝶二、嶺月、睡花、柳坊、翠石、夢遊、明球、春秋九葉、紋太、東洋鬼、素生、鬼石、若蛙の諸氏（大阪）良次郎、蟬古、鶴峯、水車、艸樂、新市街、自守、三絃、紫水、三申、破柳、千春、歌津美、華坊、番茶、美芳、松太朗、掉二、吾水、鳥語、緩勾配、平凡子、生一路、寒舟、明暗子、當百、柿店、双車、萬樂、雲雀、碧郎、羊七子、朝雨、春汀、もとに、柿三、麥魚、政史、卯三、勝二、古燈、おさむ清郎、鬼丸、秀樹、紫風、六浦、瓢水、芽十綠雨、山雨樓、塊人、葉平、彩古、沐天、白柳子、溪花坊、月下、文久、黑天子、道子、虹衣、南國、機見女、蒼生、夜王、一眞、百々女、扇子仙、仙太朗、虹人、聞路、柳次、和三郎、濤石、鴨舟、鯛車、兎杵郎、えいを豆秋、蛙柳、柳甫、北人、十紫、龍一、玄坊双光、虎白、自好、柳秀、俊翠、いわを、米吉、宵吉、政次、重樹、愚陀、來月、靈壺、とも坊、丈五、小松園、泰郎、八歩、青踏、秋無草、青路、鴨二、曲豆、二千葉、進午、六齋、思案坊、路郎、言人、多聞、素人、一歩、喜彦、楳太郎、柳民、山都、裸人、蝶の助、日雨、芝有、せいけん、舟人、武子、三笑、七綠、萬よし、夢裡、吉平、倉多樓、翠年、山茶花、車魚、新水、琴人、雨迷、汀柳水府、破竹、砂人、紫朗、小太郎、南枝、子行、夢路、陽喜亭、吉丁、（計二百十名）

（宴會出席者）—綠雨、幸男、良之祐、彩古、白柳子、溪花坊、沐天、文久、山雨樓、歌津美、南國、番茶、蒼生、吾水、平凡子、鳥語寒舟、兎杵郎、長府、當百、柿店、雲雀、萬樂、蛙柳、十紫、碧郎、華水、自好、月下、柳秀、麥魚、勝二、蝶二、二山、萬よし、吉平、艸樂、扇子仙、鶴峰、六甫、素人、喜彦芽十、琴人、東魚、南枝、小太郎、雨迷、若蛙、鳳石、陽喜亭、吉丁、健路、子行、汀柳砂人、夢路、水府、紅壽郎、紋太、鬼石、素生、東洋鬼、濁水、抽闌子、文醉、紫朝、せ

いけん、芝有、蟬古、舟人、路郎、睡花、明暗子、山都、卯生、益幸、嶺月、柳坊、一歩、蝶の助、生一路、蹄二、米吉、てるを、雞牛子、久佐太郎、七絲、微塵、久郎、舫仙、清郎、迷亭、○丸、千壽郎、茶六、花川洞、杜若、夢一佛、玄六、比侶志、桃太郎、盈光、鞍馬、愚佛、壽山、雀郎、周魚、久良岐、榮二、三太郎、柳葉女、柳多良、玉兎朗、しげを、懐窓、五花村、柳兒、(百十八名)

祝電を寄せられた方々—空壺、うきよ吟社、川柳以良加、東京市吟社一同、作句研究會、きやりグルウプ、きやり吟社、川柳手草會、川柳久良岐社、川柳二猪口村、吐月峰、國民川柳會(東京)みなと吟社(横濱)珍竹林(静岡)五健(松江)雪緒(松江)壽明(大連)津輕川柳社、ヒヅメ吟社(青森)雨聲會、夕蜩、波周 大阪)啞亭(宮津)

兼題 雑 沓　　川上三太郎選

雑沓へ柳の枝が垂れてゐる　豆秋
雑沓へ二階三味など彈いてゐる　白柳子
雑沓の一人一人へ畫の笛　七絲
久振り話すに邪魔の人通り　宵吉
雑沓へライスカレーの腹で來る　蟬古
雑沓を店番一寸嬉しがり　塊人
雑沓の軒の地べたで商へる　扇子仙
雑沓へ飴屋は水を撒くばかり　柳甫
雑沓へいつそ押される面白さ　畦柳
雑沓へそれ見なはれと下駄が脱げ　仙多朗
雑沓の一人一人に當てがあり　明暗子
人人人の中から人をさがし　葉平
雑沓へまた團體が一つ來る　益幸
雑沓の端を通つて突き當り　歌津美
屋臺から見る雑沓の面白さ　良之祐
めい〳〵の旗へ雑沓まとめられ　新市街
雑沓をこゝらで區切る赤を出し　砂人
雑沓で向ふは知らぬ人に會ひ　綠墓
雑沓も奥樣同志久振り　百々女
雑沓を牛も急いでゐるのなり　蓼魚
雑沓へ畫の部の人吐出され　春秋
雑沓に自働電話に見くびられ　睡花
雑沓へ親方の子は肩車　琴人
失職の我も櫻の人となり　玄六
人混へ子供いよ〳〵上を向き　紅壽郎
雑沓に戀のほとぼり奪はれる　素生
あこがれの身を雑沓にまかせたり　鬼石
雑沓を拔けて濟まない母の汗　愚佛
雑沓のどよめき靑に變るなり　蹄二
雑沓へ内懷ろを深くする　比侶志
人混を面白づくで小僧押し　柳葉女
雑沓に巡査も共に押されて來　白帝子
雑沓の大人に子供腹が立ち　進午
雑沓を見おろす人の世の姿　夢路
(五客)取りつへ濕布の一人押れ勝ち　盈光
人混の母の片手を大事がり　茶六
雑沓に迷子の道をあけてやり　綠雨
雑沓の中に小さき靑藥屋　子行
(人)雑沓をすると人間手を擧げる　紫朝
(地)雑沓を横に眺めて久振り　三申
(天)雑沓を拔けると主人口をきゝ　秋無草

兼題 酒　　前田雀郎選

癇癪の肘の力へ茶碗酒　珪柳
催促はせぬが銚子をかたむける　三申
酒飲みの亭主の辯も親しまれ　幸男
指先が鼻につかへたコップ酒　瓢水
惚れたとはいはず銚子の重れやう　柳坊
母の背に春まだ淺い玉子酒　盈光
この上に眼鏡はづしてまだ飲む氣　鳥語
飲み過ぎのなんのと飲めば同じ事　紋太
臆病を笑うて女猪口をほし　東洋鬼
獨り飲む酒へしみ〳〵灯を思ひ　桃太郎
挨拶は先程したと酌いでくれ　紋太
酒でも飲めと親切な友と居る　丈五
慰めてくれるお酒が苦いなり　鬼丸
愚痴になる添乳を嗤ふ酒の息　玄六
片言を肴にハカの行かぬ酒　千壽郎
(佳)二次會へ酒豪の顔が揃はない　寒舟
盃に音ありもはや酒はなし　塊人
醉うてゐるのだと判れば夫でよし　和三郎
酒飲むを覺えた頃の痛い胸　松太朗
置酌ぎをされて意見を少しきゝ　比侶志
大阪へ酒が飲めない人と來る　明暗子
春の宵醉つた袴を足で脱ぎ　夢一佛
醉うたのが振れば銚子の底で鳴り　掉二
灰神樂湯呑の酒を持つて立ち　紅壽郎
禁酒せぬ父を憎めぬ年になり　道子
(五客)女房に猪口を持たせる淋い夜　睡花
醉醒へ柱鏡が近すぎる　茶六
酒を飲む約束朝の風呂へ來る　三絃
醉うてゐた事がわかつた朝となり　美芳
醉うて來て酒が嫌ひになりにけり　扇子仙
(人)酒さめて心おきなく涕をかみ　花川洞
(地)父母の恩酒のうまも知る年ぞ　蹄二
(天)女房と出た日の酒を大事がり　茶六

兼題　海苔　西島○丸選

日本に住んで始めて海苔の味　三申
海鳴に慣れ海苔の香に慣れ日焼せず　喜彦
女房は産院にゐる海苔の味　夜王
海苔の禮太平洋を越えてくる　蟬古
叔母さんの家へ來てゐる海苔の色　九葉
かき餅の海苔をめくつて子供ゐる　麥魚
夜更しの戸棚に海苔があつた筈　十紫
ダンサーの亭主寢酒に海苔があり　春秋
見覺えのある道を曲つて海苔屋　二山
置酌ぎの海苔を濡らして叱られる　紅壽郎
海苔の香に象牙の箸の艶を見る　幸男
海苔だけが好きな我子の痩てゐる　宵吉
戀人の笑へば口の海苔が見が　裸人
燒海苔は飲まぬ一人へ減つてゆき　碧郎
膝の兒を兩手に渡す海苔の罐　歌津美
無造作は味付海苔へビールの手　夢遊
海苔の罐東京にゐる孫のこと　三紘
海苔を燒く手つき玄人の坐り　壽山
喜びの朝をハッキリ海苔が燒け　茶六
壁へ向く膳に決つたやうに海苔　一貞
海苔の香に妓の横顔を思ふ朝　破竹
母のゐまさず海苔の罐のみ淋し　夢裡
海苔だけで足りる女を立たさせず　紫朝
（五客）海苔の香にせめては海を思ふ夜　古燈
海苔の香へ郷愁がある床柱　蟬古
母の病む淋しさ今朝も海苔を燒き　盈光
母夢を氣にする海苔のうらおもて　比侶志
たまさかに逢ふ夜を海苔の濕る事　紫朝
（人）滿ち足りた心に朝の清苦匂ひ　玄六
（地）海苔焙る手つきも四十過ぎの戀　幸男

（天）ともすれば濡れる心海苔が焦げ　柳葉女

凱旋　大谷五花村選

凱旋の朝日へ命あるを知り　紫風
凱旋のいきなり子供抱き上げる　桃太郎
故郷の野も凱旋の色となり　柿店
凱旋に恩賜の煙草こゝにあり　文久
凱旋に我れは生れた日に當り　同
凱旋をして愛人が白すぎる　九葉
凱旋に君ヶ代の渦旗の渦　道子
凱旋に千人針の垢もよし　千壽郎
凱旋の我子といふに初對面　當百
凱旋の便りを聞かす枕もと　東洋鬼
勇將へ旗と涙の續く街　鬼石
凱旋の靴日本の音がする　歌津美
凱旋へ一際わ富士の秀麗さ　秀樹
凱旋に嗚呼帝國の有難さ　緩勾配
凱旋の兵士について行く虱　玄坊
凱旋は日が暮れてから母に會ひ　鶴峰
凱旋に父の姿は小さすぎ　同
凱旋の町へ眞すぐ歩を進め　紫朝
鐵兜もう凱旋へきたながり　新市街
凱旋の握手に痛む傷があり　綠墓
凱旋の將士へ子供差上げる　瓦之祐
凱旋へ屋上からも何か振り　兎杵郎
凱旋をすれば變らぬ小作人　柳民
母の眼と凱旋の子の眼と出會ひ　花川洞
凱旋の父を迎へる鐵兜　秋無草
凱旋の上で雀がないてゐる　蟬古
又母を泣かす凱旋門が建ち　勝二
凱旋へ母の小さい顔があり　比侶志
三勇士軍歌になつて凱旋し　もとに

戰友を亡くして故國狹くなり　迷亭
凱旋へあんまりもろい支那と知り　新水
凱旋の渦が崩れる驛の雨　愚佛
凱旋の父へなか〳〵寄りつけず　古燈
凱旋もやつぱり泣いて迎へられ　柿三
凱旋の眼に白足袋のなつかしく　白柳子
星一つふえて凱旋寫される　新市街
凱旋に日本は狹いとこと知り　蝶二
凱旋の今朝恥しく薄化粧　進午
凱旋の母は佛間で待つてゐる　重樹
凱旋は涙の乾く風を受け　幸男
凱旋を待つ娘に海の見える窓　東洋鬼
凱旋へこんなに狂ふ日本人　懷窓
（五客）凱旋に紅提灯が一つ燒け　朝雨
死なないで歸る六百八十里　若蛙
街中はいま凱旋の新音譜　益幸
凱旋の眼に日本は美しい　二山
凱旋の父に見せたい兒が寢ゐり　紫水
（人）凱旋の夜を身近い灯に氣附き　茶六
（地）凱旋をして失樂の群に入り　柳次
（天）凱旋の門をくゞれば二重橋　葉平

梠元紋太選

兼題　訛

（人）出戻りの姉の訛に淋しまれ　緩勾配
（地）偶然の訛に旅の猪口をうけ　夢路
（天）出無性なことから話す國訛り　夢路
（軸）知り過ぎて訛うなづくばかりな　紋太

紀二山選

兼題　橋

（佳）橋の眞ン中を自轉車まだ慣わず　長劍
脊のとゞく橋から二人死にたがり　夢路
吾黨の地盤村にも過ぎた橋　柳兒
橋を渡れときかぬ背の子　六齋

橋二つ三つ越す話まだ盡きず　幸男
橋一つ越して地面の値が違ひ　虹衣
トラックと共にゆられて橋渡りせいけん
鐵橋へ朝日あまねく行き渡り　紋太
橋に倚れば女の肩へ手を觸れる　夢一佛
來いといふ地圖は小さな橋をかき　泰郎
(五客)乞食の橋に馴染んで餘程老け　愚佛
燒芋屋もう橋詰へ來る時間　武子
吊橋へ歩調が合つて恐くなり　柳甫
溜息と橋の女へ時が經ち　文久
橋の下覗き後列亂れて來　嶺月
(人)待呆け橋の長さにあきてくる　三紘
(地)橋の影河原へ歪む一トところ　紅壽郎
(天)愛人の言葉を奪ふ橋の音　素生

兼題　馴染　木村小太郎選

(五客)名刺出せば吹き出す馴染に　青踏
馴染がひの結局財布輕くなり　夢路
苗賣りへ水よんでやる顔馴染　歌津美
吊革の馴染へ席を立つて行き　芝有
惡口を聞き〳〵馴染寢てしまひ　靈壺
(人)聞合せ面忘れした人を訪ひ　當百
(地)馴染がひとは値切られるこ　同
(天)馴染なればこそ今日からの淺黄服　雲雀

川柳雜誌社　**松山春季大會**　(松山)

三月二十七日　坂井拓水報

兼題　絶景　五健選

絶景で種々様々の折を開け　かき松
御手植への松あり素晴しき眺め　大樓
絶景に首の傾く京訛り　青村
絶景へ奥様やつとたどりつき　紫石
同伴の絶景へ來て一致せず　耕朗
絶景へ燈臺守の欠伸する　青帆
絶景を此所と定めて手辨當　松葉
鯛網へ眼鏡を向けるいゝ景色　雨眠
絶景へ素足〳〵を拜まされ　水樹
絶景を通り拔けんとする汽笛　靈子
臨時船で來て絶景の氣ぜわしい　小樓
絶景へ來て水筒の水がきれ　喜峰
絶景へ心中しそうに二人立ち　耕朗
(人)絶景と島の向ふの島を賞め　大樓
(地)男子部は早や絶景に聲があり　紫石
(天)人里が遠く絶景寒がらせ　柳女
(軸)貧富いま超越と云ふ景に起ち　五健

兼題　喇叭　大樓選

大將に成るのは喇叭持つてる子　曉童
飴賣りの喇叭が町を眠くする　拓水
英靈の母を泣かせて居る喇叭　青村
休戰の喇叭に戰友思ひ出し　柘榴子
朝霧へ停戰喇叭順に鳴り　靈子
愛嬌の喇叭が象の鼻で鳴り　松葉
進軍の喇叭へ日本刀の冴へ　靜光
(人)一軍の手足喇叭の云ふ通り　五健
(地)除隊の日朝の喇叭を待ちきれず　紫石
(天)尊さの軍旗へ喇叭澄み渡り　五健
(軸)凱旋の喇叭へ遠く伸び上り　大樓

兼題　年頃　靈子選

年頃の情死へ親と親が泣き　かき松
年頃を去年の柄で強ふ生き　拓水
年頃を見上げてくゝる下足番　雨眠
年頃の母に言はせる顔を伏せ　春峰
年頃を春にそむいて無口なる　靜光
年頃を事務服でゐる家を持ち　拓水
年頃の春を大正琴で生き　雨眠
体重を聞けば年頃背を向け　麥舟
年頃を父親の知る帶の色　喜峰
年頃もあつて素人御下宿　五健
(人)年頃の瞳へ寫る紅椿　柳女
(地)淪落の眼にあどけない十八九　耕朗
(天)年頃の吐息を一人母の知る　喜峰

席題　堤　水樹選

深呼吸同じ土手で又出遇ひ　喜峰
村爭議土手を境に殺氣立ち　松葉
洗濯は向ふ土手から聲をかけ　靈子
とん狂な聲に堤を駈け上り　麥舟
口惜しさの涙を呑んで土手へ來る　大樓
(佳)思ひ出のふるさにある長い土手　喜峰
(同)貸ござが斜めに敷ける土堤の景　五健

席題　行列　松葉選

行列のお駕重みを見せて行き　靜光
行列を巧に電報通り拔け　紫石
生前を偲ぶ行列まだ續き　拓水
行列の一人は旗を重く持ち　紫石
行列が通つた跡の砂ほこり　青帆
行列の中へにつこり笑ひかけ　麥舟
ちんどん屋旗行列に足を止め　柘榴子
行列の一人はぐれて喫茶店　柳女
行列に一ときわ目立つ陣太鼓　靜光
牛が來て旗行列をうれらせる　五建
(人)行列のいゝ首筋を見つけたり　水樹
(地)行列に狼籍の出る一大事　喜峰
(天)御泊所へ行列の灯の渦となり　大樓

席題　板間　互選

板の間が戦場となり庭となり　静光
板敷にして新粧の店がまへ　靈子
板の間へ下つて嫁に圓みあり　拓水
スリッパで歩く板の間派手な音　柘榴子
バケツの輪板間を拭くと終いなり　五鍵
新築の板間にも見る主婦の趣味　喜峰
板の間へ落した音に夜がしらみ　紫石
板の間に派手なスリッパ置いてあり　天龍
足跡を叱れば足の裏を見せ　喜峰
板の間で叱られてゐる足の跡　柳女
磨かれた板間素足へいゝ氣持　大樓
冷え上る板間いつまで待たされる　青帆

川柳雑誌社 **梅田觀劇句會**（その二）

三月廿七日　於神戸松竹劇場　水谷鮎美報

假名手本忠臣藏

師直は胸算用にほゝえみぬ　觀月
切腹の想ひは由良之助ばかり　同
判官へさくら一片に二片散る　同
由良之助叱るひまさへなかりけり　同
憎らしく見せて師直ひかつてる　鳴玉
にぎり飯ほゝばつたまゝの切腹場　同
九寸五分握つたまゝの由良之助　同
仇を討つ心で茶屋の由良之助　同
師直へ返歌の墨の字がにじみ　鮎美
松の間の若狹之介も短慮なり　同
曉の城へ涙がひかるなり　同
はちきれる若さ寺岡平右衛門　同
由良之助酒に飽きたる日もあらん　同

劇の三勇士

三勇士たばこへ腹を決めてゐる　觀月
三勇士手紙を讀めば雲動く　同
朝霧の廟行鎭の三勇士　鮎美
煙草吸ふ暇もありたり勇士の死　同
喇叭の音廟行鎭に弔らひぬ　同

川柳雑誌社 **鶴町支部句會**（大阪）

三月二十日夜　於關本雅幽居宮岡白峯報

兼題　秘　密　鮎美選

其秘密妻愛想が淋しくて　のぶを
秘密守つて二階に住でゐる　雅幽
打明ける秘密に友は手を揮り　變人
秘密をも話して友は酔ふてゐる　寛柳
猫背また秘密の多い人にされ　青踏
（佳）秘密なる眼へ青空のまふしすぎ　青踏
（軸）おしさは秘密な旅を續けて居　鮎美

兼題　試　驗　紅選

大學を出ても試驗はするのなり　白峯
努力は試驗地獄を突發せり　のぶを
春風が吹き答案の紙が散り　鮎美
試驗への復習に夜は更けてゆき　永樂
志願者の數に不安の鐘を待つ　寛柳
入學試驗見事パスして腕時計　小柳子
病む父へ試驗のパスを知らせに來　瓢水
靴音が背中まで來た試驗場　青踏
（佳）出來過ぎを叱られて居るカンニング　寛柳
（佳）ノーシンを飲んで試驗の朝を出る　同
（佳）無試驗に少しやせてるあつのひげ　瓢水
（秀）試驗管漸く金になるらしい　雅幽
（軸）答辭讀む首席嬉と泣けてくる　紅

席題　評　判　雅幽選

評判の程は儲けて居るでなし　青路
賣聲が評判今日も賣切れる　鮎美
評判がよくいつ見ても笑ふてゐる　小柳子
湯の街の評判程でない湯と　紅
評判を母は氣にして死んで行き　のぶを
評判をよそに默々金を貯め　岩石
（佳）評判が立てば立つ程金が要り　永樂
（佳）評判を恐れて壁をぬりかへる　變人
（佳）評判のよい花婿が見あたらず　青路
（人）評判の影に女の細い腕　變人
（地）眼鏡ふき〳〵評判を聞く　青踏
（天）評判を聞き流しそるまわり椅子　同
（軸）評判を氣にして内輪同志なり　雅幽

席題　欠　伸　變人選

御通夜して欠伸末座に一人居る　瓢水
欠伸フト鳩の語らひを見つけ　岩石
欠伸して隣の店へ呼び込まれ　雅幽
眞先きに欠伸をしたと叱れる　青踏
我が店を欠伸しながら眺めて居　雅幽
（佳）春風へ猫は欠伸で立ち上がり　紅
（佳）欠伸する社長の椅子が廻るなり　小柳子
（佳）首を振る玩具の虎へ欠伸する　鮎美
（佳）新聞をたゝみはじめた大欠伸　雅幽

席題　鏡　青踏選

洗面の鏡へ映つる白髮染　紅
働きに行くのに鏡のぞいて見　のぶを
手鏡に嬉い顏を見つゞける　戀人
引越しへ妻は鏡を氣にして居　寛柳
共稼ぎ鏡に用はないのなり　永樂
亡き姉の鏡を出せばはげてゐる　白峯
（佳）ハチ切れる若さを寫すコンパクト　鮎美
（佳）笑せる顏が鏡に出來上り　變人
（軸）自轉車で背負ふ鏡に街がゆれ　青踏

川柳雜誌社 **大地吟社例會** （島根）

三月五日　於十四區倶樂部　澄田羅門報

復活されし笑太郎、新人、草路、海月諸氏を交へ久方振りで紫光さんも出席される。

兼題　町　　綠之助選

町に住み地震の恐怖ふと感じ　與詩雄
モボ、モガの厚釜しい晝の町　草路
繪日傘の色街らしい二人連れ　田鶴緒
ルンペンの希望果敢なく町へ着き　鴉天
碧の朝靜かに明けた町を行く　紫光
六感に觸れるもの町の眞晝　羅門
バスに少さくゆれて町へ出る　田鶴緒
（人）朧月町がしろくなつたミイラ　羅門
（地）乙女の瞳に似て春雨夜の町　傳重
（天）風が鳴る虚ろな町の夜を歩む　羅門

席題　義理　紫光選

義理なればとて惡友にも誘はれる　田鶴緒
そう云はれた義理かい君も廿七　笑太郎
義理堅い男にされてうとまれる　綠之助
一應は斷わられればならぬ義理　同
急テンポ義理の値打も薄らげり　草路
義理人情無くても社會に生けるとは　華村
義理で嫁ぐお前がやはり弱いのだ　與詩雄
一生を棒に振られればならぬ義理　田鶴緒
面當てにつまらぬ義理を立てゝゐる　綠之助
（人）明日をハラ〳〵義理にをのゝき　羅門
（地）溫情と義理に泣いてるよ膝枕　同
（天）納得をさすに繼母は義理ずくめ　與詩雄

席題　慾　　綠之助選

制限のない慾の行きどころ　海月
食慾をそゝろ新妻の献立　田鶴緒
（佳）カーテンの白き中なる愛慾よ　羅門
（同）朗らかな慾さ煙草が慾しいだけ　笑太郎
（秀）愛慾の技巧に知りし爪の色　羅門
（同）愛慾となる丸窓の朧月　同

席題　恐怖　羅門選

病身に治療よりも死の恐怖　海月
ひがめる心何時も恐怖に取卷かれ　傳重
惡夢に襲はれた朝の恐怖心　田鶴緒
空想のあまりの事に恐ろしく　笑太郎
目覺むれば恐怖の淵に立ち居たり　綠之助
（佳）皇軍の威力の先に支那軍　同
（同）恐怖から生れた自殺だつた　傳重
（同）恐怖！只生き度いばかりに　紫光
（人）明日が恐ろしい時計の針　與詩雄
（地）恐怖とはあまりその瞳の美しく　笑太郎
（天）大衆の字が恐しい生活にて　綠之助

席題　三月　笑太郎選

三月だ農夫芽生へた地を踏まん　華村
肥舟へ三月の風冷たいぞ　綠之助
三月の花より芽生へし戀でした　紫光
つくれんと三月を送る獨り者　傳重
（人）三月の山の姿にある氣力　與詩雄
（地）三月はステツキに陽が落ちてくる　羅門
（天）三月の朝のびのびと出る欠伸　與詩雄
（軸）灰皿へまづ三月といふ氣持ち　笑太郎

席題　春の宵　羅門選

春なればキネマを見にゆく氣になり　虚空
薄靄の中に二ツの影が消え　田鶴緒
寢轉べば節々だるし春の宵　鴉夫
獨酌でとろりとするも春の宵　同

川柳雜誌社 **松江みゝづく會** （松江）

四月一日　夜於龍昌寺精舍　奈良井柳人報

兼題　アナウンサー　天痴人選

アナウンサー力を入れる優勝戰　九紫
アナウンサー大阪辯と知れるなり　巻二
アナウンサー霜夜に光る咳一つ　墓秋
アナウンサー母校が負けた聲になり　馬耳郎
（佳）アナウンサー少々お待ちへ息を入れ　雪丸
（人）應援の聲も聞かぜアナウンサー　柳人
（地）ソプラノの後へ續いたアナウンサー　巻二
（天）アナウンサー肺活量のいゝ男　喋朗

兼題　旅　都之介選

失戀へ淋しい旅の灯を見つめ　巻二
旅に居る事を忘れた酒の味　馬耳郎
がま口も輕ふ戻つた旅疲れ　九紫
峠茶屋しぶ茶に旅の足を投げ　一實
華かな期待を胸に旅へ立ち　玲人
運命を諦め旅の宿で醉ひ　墓秋
旅日記破れた戀の事ばかり　喋朗
一人旅目的なく着けば灯のともり　柳人
切り詰めた旅費へ土産の豫算高　天痴人
搾取から逃れのんびり旅の空　同
（五客）旅先で懷しく讀む地方版　同
（同）旅戻り人に言へないナンセンス　柳人
（同）木曾踊り旅の儲けに見て戻り　喋朗
（同）落魄の身には冷たき旅の酒　墓秋
（同）ハプラシの使ひ心地も旅の朝　九紫
（人）旅慣れた一人は汽車でよく寢り　馬耳郎
（地）獨り旅身儘氣儘で捗らず　雪丸
（天）哀愁をこめたる旅のすて草鞋　喋朗

席題　コップ酒　互選

働ける餘裕を見せ　コップ酒　雪丸
コップ酒泥手の[illegible]　[illegible]いでくれ　玲人
コップ酒手持無[illegible]　[illegible]供待ち　九紫
コップ酒不幸續[illegible]　眼がうるみ　墓秋
コップ酒さてう[illegible]ましき世の姿　喋朗
獨身の淋しさを[illegible]　コップ酒　柳人
一息に呑んで身に[illegible]むコップ酒　汀華
コップ酒不平いよ〳〵募るなり　天痴人
(佳)監督に叱られて來たコップ酒　都之介
(同)馬車馬を柳につなぎコップ酒　一實

席題　野心　喋朗選

臨終へ微かな野心抱いてる　汀華
(佳)書き眉へ野心に燃ゑる瞳が二つ　巻二
(同)懷ろを知つて手管の使ひ分け　都之介
(同)住職の野心本堂の建築　天痴人
(人)計畫を胸に抱いて眉をあげ　雪丸
(地)土工等の同じ酌婦へ持つ野心　都之介
(天)野心ある男義憤を口にする　同

席題　晩婚　雪丸選

晩婚のスター豪奢な式となり　都之介
晩婚へ今年の春のうらゝなる　天痴人
晩婚の一人は婦權論者にて　巻二
(人)晩婚の耳へ逆ふ世間の口　柳人
(地)晩婚の障子も何時か歡喜の灯　墓秋
(天)晩婚は世帶に慣れた動き振り　柳人

席題　主役　九紫選

感傷の場面主役の影太く　喋朗
スクリン一ぱいの顔で主役泣き　馬耳郎
(佳)性格を示し特異な主役振り　都之介
(同)エキストラ主役は誰れか知らぬ　馬耳郎

席題　未練　墓秋選

袖口の赤さ未練の瞳に殘る　巻二
酒くめば酒の味から湧く未練　天痴人
失戀の未練だか知ら淋しい夜　柳人
復縁の未練を見せてはならぬ意地　都之介
(佳)ウイスキー未練な男にてゐる　馬耳郎
(同)素っぽ向く二人ごちにある未練　都之介
(同)水に石投げて未練を自嘲する　喋朗
(秀逸)切れ話未練がないと云ふもの　巻二
(同)去つて行く妻を障子の穴から見　喋朗
(同)捺印の躊躇退つ引きならぬ破目　都之介

席題　立膝　巻二選

立膝で藝者同志の好く話し　九紫
立膝の瞳へお稽古がうろたえる　都之介
立膝のポーズも妖婦としての癖　天痴人
立膝になつて女の捨てせりふ　柳人
(人)立膝の女三十凄いれえ　汀華
(地)立膝とあぐら娘を賣る話なり　都之介
(天)立膝の女に似合ふ格子縞　喋朗

川柳雜誌社　**高知支部句會**（高知）

三月十日　中澤濁水報

席題　足跡　互選

いたづらも可愛い盛りの足の跡　志水
檢證に足跡大事がられてる　浮城
竹馬は石に蹴當てた跡を見せ　啞聲
足跡に女中ないしよの腹をたて　兼子
足跡は金庫の方へのびてゐる　春水
足跡と被告の靴と寸が合ひ　紫白
足跡の無い方を擇る汐干狩り　濁水
足跡の太さに獵師考へる　青果

沒收　紫白選

沒收をされて違反がまだ濟まず　悠羊
沒收に鼠の巣まで荒される　青果
沒收の帳簿に赤い文字が出る　柳風
落選のせめて沒收だけ逃がれ　啞聲
捨賣の値で沒收は局を出る　柳風
(人)沒收はもう逃走の跡へ來る　啞聲
(地)沒收の酒で稅務署拳になり　悠羊
(天)沒收の秤は星かくもつてゐ　啞聲
(軸)沒收の賽を刑事は振つて見る　紫白

細工　柳風選

勝手場の細工を女中賞められる　浮城
折れさうに折れさうにして竹細工　啞聲
農民の藝術と云ふ細工なり　青果
飯粒の糊が突つ張る紙細工　啞聲
手工室今鋸の音になり　紫白
(人)素人の細工鉋の目が荒い　青果
(地)人形の手足が長い豆細工　同
(天)こみ入つた細工を聞けば啞の作　悠羊
(軸)どの店で買はうか伊勢の貝細工　柳風

兼題　切腹　濁水選

切腹の屏風逆さに立てられる　啞聲
切腹のまだ〳〵盡きぬ物語り　露月
落城に切腹の型敎へられ　同
切腹の數へ天主が燒け落ちる　紫白
(佳)切腹に一首を遣す筆を執り　悠羊
(同)切腹は三寶に血のしぶき立て　啞聲
(同)切腹の檢死の中に戀仇敵　紫浪
(同)切腹の上使へ武士といふ態度　芽柳
(人)切腹の力が入つた右の腹　青果
(地)切腹へ血壓異狀告げて來る　浮城

(天)切腹に臍はビクともして居らず　春水
(軸)切腹の間際の旗手へ軍旗無事　濁水

川柳雑誌社 **塗青支部會報**（大阪）

四月六日　塗料青年團事務所　熊谷紅報選

京の春　瓦

京の春金が有つたらなと思ひ　變人
京　娘理想の胸に散る櫻　瓢水
清水の舞臺に春も暮れてゆき　青踏
空は春霞は深し東山紅
商用は素通りにする京の春　水車
黒朱子の京の娘に春が來る　碧郎
京の春上る下るに氣が疲れ　青踏
繪日傘たくろ〳〵京の花曇り　紅
窓近く柳さら〳〵京の春　水車

丘　青踏・瓢水共選

嬉しさの子供は丘に手を擴げ　碧郎
あの道を歩いて來たと丘の上　碧郎
麗かさ丘から丘へヒクニック　水車
丘一つ越へて我が家の近くなり　紅
丘越えて娘心の晴れ渉り　變人
別莊は丘の景色を奪ふてゐ　水車
(軸)丘一つ越すにからじの紐をしめ　瓢水

丘　青踏選

ケーブルが出來て丘地の値が上り　水車
あの道を歩いて來たと丘の上　碧郎
青　葉の丘よ春の戀する　寛柳
丘一つ越えて我が家の近くなり　紅
(秀)別莊は丘の景色を奪ふてゐ　水車
(軸)乳母車れむたい唄で丘を越え　青踏

甘茶　碧郎選

甘茶をば可愛い施主にすゝめられ　水車
今朝からのセルで甘茶を貰ひに來　同
山寺の甘茶は少し沸へつまり　紅
兄弟が自慢で歸る甘茶瓶　瓢水
(秀)一升壜甘茶の柄杓少いさすぎ　青踏

勤勉　水車選

勤勉家靴の光りがよく目立ち　瓢水
内職の妻を手傳ふ公休日　寛柳
勤勉へ酬ひらるゝは汗のみか　紅
蔭口を耳に勤勉つゞけられ　碧郎
勤勉は伍長勤務で歸つて來　青踏
勤勉のふと麗らかな欠伸なり　紅
〆切を思ひ濕布の朝を出る　寛柳

紙片　變人選

新妻の紙片に留守を告げて風呂　まこと
本箱の整理紙片たんと出る　天柳
研ぎ上げた鋏紙片切つて見る　紅
二次會が事で紙片廻すなり　水車
板塀にきたなく殘る紙のはし　碧郎
廻された片紙小さくサインする　寛柳
(秀)今捨てた紙片がゆれる波があり　同

兼題　瞳　紅選

姑の瞳は嫁のゑりへゆき　碧郎
針の目に母の瞳が弱くなり　瓢水
懷かしい母の瞳の夢を見る　寛柳
つむつてる瞳に母の顔が見え　變人
けんかする相手の瞳にらみつけ　元山
高島田瞳、瞳の中をぬけ　水車
佛壇へ曇つた瞳皆集め　まこと
理智がさゝへる熱き瞳よ　青踏

雑談の最中士人の瞳に出合ひ　瓢水
(五客)美人なる爲に瞳に力あり　まこと
曇つてる瞳で朝の門を掃く　碧郎
泣きぬれた瞳に尊いものが見え　變人
高熱が續く瞳のうつろなる　水車
(人)動かない瞳で時計見直され　碧郎
(地)大膳は鏡の中にある瞳　水車
(天)大欠伸すこしひとみにたまる露　瓢水
(軸)決心の瞳に蝶が飛んでゐる　紅

川柳雑誌社 **梅田支部句報**（大阪）

川村觀月報　かほる選

匣帛紗

客が來て帛紗包みが氣にかゝり　瓦坊
角帶の白足袋帛紗包み持ち　坊茄子
花嫁の帛紗包みへつゝましく　觀月
下女ひとり帛紗あづかることになり　鮎美
ぼた餅のあんが帛紗について春　同
その帛紗手にポチ袋さがしてゐ　方眠
(人)帛紗を借りて一寸出てゆく　觀月
(地)また同じ帛紗で貰ふ内祝　方眠
(天)よろこびへ帛紗をほかへす母　坊茄子
(軸)夕霧の文へ帛紗で足を拭き　かほる

題　遠乘り　かほる選

遠乘りに親子揃つた馬の足　瓦坊
遠乘りの青いすぼんへ春霞む　卜居
遠乘りへ赤いネクタイひら〳〵と　坊茄子
遠乘りへだん〳〵山の風になり　觀月
遠乘りの休むと蝶がもつれあひ　鮎美
次々の景色へ遠乘りゆられてゐ　方眠
(人)遠乘りにお神さん達そしやべり　坊茄子

(地)遠乘りへ汽車美しく走るなり　觀月
(天)遠乘りの休む掛茶屋牛乳があり　夕鐘
(軸)遠乘りの運轉手に持ついゝ感じ　かほる
(同)遠乘りのここにも二軒茶屋があり　同

匿　對　抗　新　水選

對抗の相手にとつて不足なし　良坊
對抗の意氣なき今日の老衰よ　坊茄子
對抗の朝うらゝかな靴の音　觀月
對抗のどよめき血と血砂と砂　鮎美
サービスでこちら對抗簾をとり　方眠
(五客)對抗の呼吸もつがせぬ砂ぼこり　觀月
(五客)對抗の試合へ肩をたゝかれる　同
(五客)對抗の母校にあり日の若さ　鮎美
(五客)損德は別に對抗すると決め　方眠
(五客)對抗となつて割引券を出し　方眠
(人)對抗は夢に逆襲されてゐる　鮎美
(地)對抗へひとりになつた爪の垢　同
(天)對抗へ眼が血ばしつてゐるばかり　卜居
(軸)對抗と言ふが空まで照してゐ　新水

阪大川柳會（大阪）

三月例會　吉本竹涯報

兼題　心　路郎選

木石の樣に見えても人の子よ　筑川
其の中の一人に心弱くなり　竹涯
心からお墓ひ申してと書いてあり　與一郎
改心をしたのに世間冷た過ぎ　柳秀
心境の動き彷徨と遺書に見ゆ　筑川
春の宵ふくれ上りし心かも　路生
心にもなき事を言ひ金がいり　芳一
心まで賣わとは云はぬ勤めなり　利生
眞心の過ぎて年寄いやがられ　柳秀
(人)心だけはあなたのものと書かせて　橙舍
(地)心臟よ躍れ五月の太陽だ　路生
(天)心ある親切振りがいやになり　芳一

雛　吟　路郎選

千圓の帶が正座の披露宴　柳秀
咽元を過ぎりや藥價の不服なり　橙舍
詩の島へ働きに行く朗らかさ　利生
口笛を吹き度い日が來るだらか　路生
二人して抱く子供迄おかつぱだ　鶴生
兒を伴れたことも忘れて特價品　柳秀

席　題　水　溜　路郎選

水溜に愛國號が飛んでゐる　方正
流れてはダムにせかれてまた流れ　湧三
こらおぢやと水溜をばよけて行き　路生
水溜りオアシスの如く喜ばれ　筑川
水たまり避けて行く樣な靴でなし　橙舍
宵傳のビラの浮いてる水溜　柳秀
春の野の水たまりにも似た微笑　橙舍
心なき風は帽子を水溜り　筑川
水溜り男はさきに飛びこえる　路生
逃げまどふ鶴に困つた溜り水　柳秀
(人)肩越に愛をうつした水溜　方正
(地)水たまりかけ聲かけて輕く抱き　鶴生
(天)水たまり舞子は派出に人を呼び　路生
(軸)水たまり四月五月の空を見せ　路郎
(軸)水たまり博士の散歩映るなり　路郎

川柳草々會句會（大阪）

三月十二日　於平松睡蓮居　西田艸樂報

兼題　春　雨　奇可愛選

青雨なよい事にして飲み續け　一二三
春雨に濡れて木の芽の情動き　睡蓮
春雨は味なものよと女給飲み　秋殼
春雨にガーバシューズの仰々し　紹樓
春雨に聞く大佛の鐘近し　艸樂
春雨の音西鶴讀み疲れ　同
(軸)假名文字の傘へ春雨靜かなり　奇可愛

兼題　障　子　艸樂選

病室の障子に春の陽があたり　秋樓
炬燵から線に障子をたしなめる　陀羅助
四季の花みんな咲いてるつぎ障子　當葉
御隱居は障子を太鼓に子をあやし　黃蓮
障子渡る寒さ身に泌む木賃宿　一二三
足音に障子元氣にあけられる　同
破れ障子笛吹いて居る寒い部屋　睡蓮
障子には浮世の塵も積んでゐる　奇可愛
うれしさう障子越してる良い話　同
(軸)うらゝかさ障子に雀影をひき　艸樂

席　題　手　紙

手紙にもやつぱり不景氣書いてある　一二三
御存じの手紙厠でソツと讀み　睡蓮
寄宿舍の事件女の手の手紙　奇可愛
片假名の手紙老眼鏡をふき　同
(軸)手紙にはどうあらうと行つて見ぶ母　艸樂

席　題　硯　奇可愛選

墨のない硯へ葉書賴まれる　睡蓮
代筆を賴む硯を摺つて出し　艸樂
硯から遠ざかつてビラ書き終り　同
思い出せぬ一字硯へ書いて見る　艸樂
(軸)先生は硯へ逆の姿勢なり　奇可愛

川柳雑誌社 蛍ヶ池支部

奈緒美追悼句會（大阪）

三月二十九日　赤城晴夫報

春の彼岸の二十三日、療養の効なく遂に逝きし、若き詩人芡木奈緒美を惜しみて、生前親しかりし柳友相集りて、その追悼句會を開催す。水車氏よりは追悼句が贈られ本社からは絲雨、豆秋兩氏の御出席がありました。

追悼吟

また一つお山の空をながれ星　合歡人
眞白な道をとぼ〳〵一人逝き　静太
悲しやな又つぶされた蟻の塔　青鬼
梅一輪散りし彼岸をさぶしめり　愚寵
何んの苦も知らず柳の芽はのびる　六華
二十二の櫻は未だ咲かぬなり　公平
夢ばかり見て亡き友を懐かしむ　卷巴
白骨になって退院は悲しいよ　舟路
ありし日を短冊に見る健やかさ　由一
梅の花つぼみの儘で霜枯れて　豆秋
友の計につめたき朝の膳につく　一流
星一つ落ちて聲なく更ける夜　晴夫
面影がはっきりうかぶ彼岸なり　絲雨

兼題　姉　豆秋選

だあまって姉は寂しく嫁にゆき　静太
義理でよしせめて姉さんでもあらば　合歡人
姉さんの戀を弟だけが知り　晴夫
姉さんは自分のために嫁がない　舟路
施療院姉ある人をうらやめり　由一
姉からの手紙爲替が添えてあり　卷巴
春の花留守番役の姉となり　絲雨
同君の姉へ
(佳)のこれし日記へ泣けたと云ふ　愚寵
(同)姉の部屋こつそり行けばかたり　公平
(同)姉と云ふ氣持人形抱いて寢る　青鬼
(同)姉と言ふ名前のまんま老けてゆき　晴夫

兼題　うどん　青鬼選

勝手元とゞくうどんの生ぬるい　卷巴
工事場のうどんの鉢に陽が當り　豆秋
Y君がたづねてくればうどんにし　静太
氣やすはうどんが好きな友なりし　合歡人
親子してうどんの鍋をつゝくなり　晴夫
うどん屋を出れば夜店の通りなり　康夫

兼題　二十二　晴夫選

二十二と大きな聲で云へぬ俺　公平
二十二が今年どうかと暦くる　由一
第三の戀二十二の眞夏　静太
丸刈が寂しすぎるよ二十二　康夫
二十二まだ童貞をひやかされ　卷巴
二十二の春を戰にとられたり　愚寵
(軸)死なないよ死れるもんか二十二　晴夫

席題　美　絲雨選

眞白い紙にもひそむ美つくしさ　晴夫
天然の美に瓦港は暮れて行き　由一
美しきまゝに人がすいてくれ　静太
(佳)美しい瞳と合つてちと慌て　卷巴
(同)健康美その肉体を羨やまれ　同

席題　煙　互選

軍事劇舞臺一面煙なり　由一
一すぢのけむりはるかに村ひくゝ　晴夫
煙幕の前も後も砲の音　六華
煙幕のときれときれにときのこえ　舟路

川柳雑誌社

大地吟社句會（島根）

三月十九日夜　傳重居にて　澄田羅門報

兼題　タオル　綠之助選

のんびりと溫泉宿の干タオル　與詩雄
タオルから思ふ溫泉場の娘　田鶴緒
(人)タオルから彼女の匂ひ盜む　鴉天
(地)タオルが白い眼を病んでゐる　羅門
(天)汗を吸ふタオル勞働者の首に　與詩雄

席題　死線　壽朗選

さゝやかに愛の巢死線突破して　與詩雄
夕陽がまつかな死線になのゝく日　羅門
諦めた死線へ浮ぶ母の顔　綠之助
(佳)死線を突破すれば明らかな朝だ　與詩雄

席題　朧月　羅門選

二人の幸福を包む朧月　與詩雄
石を蹴り蹴り不服な朧月　綠之助
(秀逸)朧月女の影を長く見る　同

席題　風　與詩雄選

(佳)春がかすんで惱みの風が吹く　傳重
(佳)だし抜きに裏切り續け風雲兒　綠之助
(佳)木の芽が膨んだ〳〵春の風　羅門
(秀)春の夜がそゞろに淋し隙間風　綠之助
(秀)風に絡んで賣春婦の白い脛　羅門

席題　序曲　綠之助選

其の序曲やがて嵐が來るだらう　傳重
哀戀の序曲に重い秋なる　羅門
(人)悲戀の序曲に眉毛が疎なる　同
(地)序曲から波瀾を生んでゐる興味　與詩雄
(天)愛の序曲眞夏のアスファルト　傳重

席題　音　傳重選

下駄の音が淋しい現實よ　羅門
かたづける音にも母は老ひ給ひ　綠之助
女性の弱み臺所の音となり　與詩雄
(人)白壁の匂ひ時計の音ばかり　羅門
(地)宵闇へ淋しいまゝの下駄の音　同
(天)雨だれの音へ破れてゐる戀だ　同

川柳雜誌社
簸川支部 **大地吟社彌生句會**(島根)
三月卅日　於十四區倶樂部　澄田羅門報

兼題　春の雨　綠之助選

蛙の聲春の雨が降る〳〵　作一
花の山かすんで春の雨に浮き　二三麿
ともすれば治兵衛の胸へ春の雨　笑太郎
春雨の若葉に浮く町のネオン燈　田鶴緒
(秀)春雨よ櫻の花を惜しまぬか　作一
(秀)春雨よ自殺の俺に降る氣かい　笑太郎
(秀)鋪道いま蛇の目が通る春の雨　與詩雄
(秀)春雨や女は呼吸をひそめたり　羅門
(人)もう歸るショボショボさふる春の雨　海月
(地)自嘲の枕をもてあそぶ春の雨　羅門
(天)雨毎に巨人の夢に覺めて春の山　田鶴緒

席題　茶　二三麿選

(佳)お茶の會時計の針が廻る事　海月
(佳)空想のかけらへお茶の香が高し　羅門
(佳)雲仰ぐ心長閉よ茶の芽つむ　田鶴緒
(佳)茶話へ遂まとまつた結婚よ　海月
(佳)いゝ客と見たか女將はお茶を入れ　與詩雄
(人)父のもう煎茶と知つて直す膝　笑太郎
(地)茶柱に希望の滿ちた朝を出る　與詩雄
(天)待たされて濃い番茶を呑んでゐる　綠之助

席題　民衆　羅門選

大衆の帽子を寫す寫眞班　與詩雄
歡迎の波へ署長も制されず　田鶴緒
(佳)民衆の味方とされて衆議院　綠之助
(佳)生活苦なだれをうつて民衆　海月
(佳)民衆のなんのと君も醉ひ給ひ　笑太郎
(人)民衆の叫びの中に母の聲　同
(地)民衆の一人ぞまぎれもないプロを　綠之助
(天)目覺めた大衆だ笛には踊らぬよ　與詩雄
(軸)民衆は叫ぶ月明の勞働歌　羅門

席題　不服　笑太郎選

(秀)四月の日曜の朝空にある不服　田鶴緒
(秀)不服よどこまで石を蹴るんだ　羅門
(秀)不服だと感ずる程でもないよ　海月
(秀)愛人の不服アスファルトの月よ　羅門
(人)ツト立つて不服を庭へ捨てに出る　二三麿
(地)不服など云へない弱い女です　同
(天)魂の片一方の不服かな　羅門

川柳雜誌社 **松江木兎會**(松江)
三月廿六日夜　田中都之介報

天痴人の第三子の誕生を祝して小集を催す。

席題　男の子　廣江天痴人選

男の子今日も女の子を泣かし　硯滴
腕白を叱られてよし男の子　慕秋
男の子父の氣性をそのまゝに　しげる
轉んでも泣かず起きてく男の子　巷二
初聲に元氣を見せて男の子　柳人
(人)食はせれば何ぼでも食ふ男の子　慕秋
(地)男の子近所女の友ばかり　都之介
(天)男の子袖を破つて今日も去に　同

席題　色魔　田中都之介選

享樂の果ては色魔とも云はれ　巷二
色魔とも見えぬ男で刑事室　柳人
醉ふ程は醉つて色魔の胸の中　天痴人
(秀)色魔だと云ふ若僧の金使ひ　しげる
(同)酒にふと頼る色魔の氣の弱さ　慕秋
(同)モデル臺色魔を知らず立つてゐる　巷二
(人)コンパクト色魔に見せる顔が出來　同
(同)色魔なら色魔でもいゝ戀の仇　しげる
(地)拗れられて色魔苦笑の顔になり　硯滴
(天)處女の技巧不足な顔で色魔ゐる　天痴人

席題　博士　梶谷巷二選

二階借未來の博士寢轉がり　慕秋
(佳)立志傳博士の一人數へられ　硯滴
(同)うなづいただけの博士の注射針　都之介

席題　金物屋　奈良井柳人選

金物屋馬尻の底をはたいて見　硯滴
金物屋手の繃帶は別な傷　天痴人
金物屋鍬を賣るのに振つて見せ　都之介
(秀)金物屋世帶道具の中に住み　巷二
(同)いたんだを吾家へ使ふ金物屋　慕秋
(同)金物屋錆を氣にして雨續き　都之介

席題　角砂糖　岡谷しげる選

角砂糖二本の指にある媚態　都之介

席題　黎明　久方慕秋選

黎明へこれからと云ふ腕を延し　しげる
逆境にさへ黎明の素晴しさ　都之介
午前五時大地を踏んで深呼吸　硯滴
(人)黎明へさても奇麗に吹雪する　都之介
(地)幻の樣に浮んだ朝の街　硯滴
(天)蟹一つ陽の出の濱にじつとゐる　都之介

席題　幌馬車　清水硯滴選

幌馬車の鈴が鳴る〳〵峠茶屋　柳人

(季)幌馬車へ故郷は近し子の元氣　墓秋
(同)幌馬車へ賣れ行くのを知ぬ娘よ　都之介

川柳雜誌社 **神戸支部句會**（神戸）
三月十日　於八宮神社　西村明珠報

席題　風　素人選

隙間洩る風に看護婦智惠を持ち　南耕
小商ひ今日一日を吹通し　九葉
梅白く風の中なる冬の山　鮎美
戸の隙を鳴らす風あり露地の家　竹風
風吹けば雨戸の音がするばかり　觀月
風薫る宇治に居ますと便り來る　華水
受驗室出てから春の風にふれ　主税
草枕春の匂ひが風に乘り　夕鐘
煙突の風臺鬱をのせてゆく　卯生
醉醒めの風へ浮世を感じたり　水車
スカートに風孕んでは孕んでは　同
首すじへ襖を洩れる風と知る　古木
今日佳節國旗は風にひるがへり　同
留守居する子へ冬の戸が怖くゆれ　一夫
神馬今日はつきり春の風を知り　同
(軸)旅立ちの夜明け方から風になり　素人

席題　共鳴　鮎美選

共鳴をたやすくされてチト淋びし　竹風
共鳴をしたとウエトレスの醉ひ　卯生
共鳴の帽子つかんだまんまゐる　觀月
共鳴をすれば明るい部屋になり　かほる
共鳴の相手はやはりプロだつた　坊茄子
(佳)姉妹になりたい二人隅にゐる　九葉
(佳)共鳴をして盃の數もよし　明珠
(佳)共鳴のうらさびしくも金のこと　卜居
(佳)共鳴へ生暖かし春の風　華水
(軸)共鳴の机上にひらく日本地圖　鮎美

席題　勿論　華水選

モチだわと女すましてコンパクト　一夫
勿論の口の下には金がなし　明珠
相場欄勿論損をした話　繁堂
勿論の事と彼氏は窓に立ち　かほる
勿論の喜びごとへ氣をそらし　夕鐘
勿論さいづれ儲けは二つ割り　素人
勿論と腹を決めたる顏なりし　卜居
(佳)勿論な話絣が匂ふなり　觀月
(佳)勿論へ國の訛りがついて出る　竹風
(佳)勿論と義兄の顏が空々し　卯生
(佳)勿論といつて今年も春になり　幸村
(佳)勿論にしてスリッパの裏を見せ　かほる
(軸)新世帶勿論といふ日が續き　華水

席題　袖口　觀月選

袖口の汚れに氣づく春の雨　卯生
袖口に春の陽氣を感じたり　竹風
袖口の涙をすひて灯にひかる　鮎美
袖口に醉ふてきたのが知れるなり　かほる
袖口を摑んで女搖られてる　素人
袖口の同じ模樣が親しまれ　幸村
自制する袖口寒く獨り寢む　卜居
袖口の赤さそのまゝ信じたし　九葉
みだらさを袖口に見せ酒をつぎ　坊茄子

席題　算盤　かほる選

小間物屋算盤ふところから出し　坊茄子
算盤は養子の耳へ響き過ぎ　卯生
算盤が甘いと給仕殘される　主税
儲かつた金と算盤見くらべる　武子
小拂ひへ妻算盤の玉に觸れ　華水
算盤の女將は酒の數を聞き　素人
算盤の珠が動ず手をぬくめ　幸村
算盤は合はず故郷へ荷をまとめ　竹風
算盤へ女給とコツクだけになり　鮎美
算盤を母へ渡して讀んでゐる　九葉
算盤を持つて角帶愛嬌よし　卜居
(人)算盤の早さを見てる異人の子　明珠
(地)算盤へ春の女が通りゆく　觀月
(天)算盤へ後姿の母となり　九葉

席題　膝　互選

押賣へ斷る膝を少し立て　竹風
獨學のさびしき夜の膝を抱く　鮎美
膝の子へ其の日其の日を忘れてゐ　坊茄子
折箱が棧敷の膝に觸れてゐる　華水
色街で働き膝をさすつてゐ　かほる
隣から膝突つかれて立ち上り　素人
末の子を膝に先輩茶をすゝめ　一夫
人力で行く外人に目立つ膝　主税
膝頭あんまりひどい事をきゝ　九葉

關西土地句會（第十二回）（大阪）
小西無鬼報

腕　琴人選

三人を養ふ腕の細すぎる　無鬼
ダンサーの腕に種痘のあとが見え　一久
ハイヒール腕組で行くアスファルト　鐘生
腕自慢が無調法な口を利き　同
(佳)洋裝は腕が生えてるように出し　素月
(佳)門番は腕におぼえのある男　同
(佳)吊皮へ魚屋腕を派手に見せ　同
(人)臨終へ腕組をしたまゝの父　無鬼

(地)腕力をあざけって五圓札を出し　鐘生
(天)微笑みのいつそ淋しい腕の痩せ　同
(軸)腕に自信の反抗に生き　琴
絶對安靜へ明日の決勝　人選
(佳)絶對の秘密が何日の間に知れ　鐘生
(佳)ことわりへ額の皺が先づ動き　無鬼
(佳)絶對に信じて年は更けて行き　素月
(軸)死ねどの覺悟へ親と親の慈悲　一久
家　琴
天井の低さ氣になる客を泊め　人選
旅で知る家の寢床のやはらか味　素月
K君長子出生　一久
家に歸ればもう父であり母であり　鐘生
(人)家主といふ母と娘の暮らし向き　同
(地)家中を笑はせて子のよく育ち　同
(天)ガッチリと錠前かけて春を留守　素月
(軸)五六軒離れて家出手を合せ　琴
愛人　人選
愛人と愛人雨にぬれて去に　素月
愛人のやつぱり氣になる泣墨子　一久
愛人を連れてこつそり隅へかけ　鐘生
愛人に逢へばとんちんかんなこと　同
(佳)愛人の傾り書き直し書き直し　無鬼
(佳)愛人と並んだ椅子のかけ心地　一久
(佳)愛人と二階借して日が早い　無鬼
(佳)愛人の辯をいつしか眞似てゐる　素月
雜吟　琴
噂から噂を生んだ娘の死　同
ペン先へ彼女のくせがまだ殘り　人選
今日と云ふ今日はと親爺顏をそり　一久
爆音茶碗を持つて子は走り　同

川柳雜誌社 **西條支部句會**（第三回）（愛媛）

三月十日　於裁判所宿直室　越智虹一報

席題　お妾　互選
お妾の淋しさ今日も來て吳れず　耕朗
お妾の内で減俸案生れ　英賀夫
夕飯は妾の内へ喰べに行き　虹一
席題　筍　孤鶴選
新妻のたんすを覗く日も多く　英賀夫
(秀)二遍目もやはりたんすを持つて來る　虹一
(秀)新妻の簞笥に亭主さわつて見　青雨
(秀)着後れの柄がたんすで年を取り　英賀夫
席題　カーテン　晴比古選
カーテンを明ければ富士が見はてる　英賀夫
カーテンを日の影追ふて開けて行き　孤鶴
(秀)カーテンを開いた眉の動き樣　耕朗
(秀)カーテンへ眩しく眼鏡たずねる　虹一
(秀)カーテンが動きくれんぼ見付れ　英賀夫
席題　眞劍　虹一選
眞劍の戀を女給はこわくなり　耕朗
眞劍の話に煙草の灰が落ち　晴比古
眞劍と云ひつゝ子供げんまする　青雨
眞劍がないと社長に叱られる　島山
(人)眞劍になつて瞼に光る露　孤鶴
(地)眞劍で惚れた女に愛がなし　英賀夫
(天)戯談にふと眞劍の顏を見る　晴比古
兼題　卒業　耕朗選
カフエーで卒業らしデッカンショー　一鶴
卒業を待つて緣談まとめられ　晴比古
卒業の陰に彼女の力あり　孤鶴
樂しんだ卒業待たず父は逝き　同
兼題　秋　英賀夫選
請求書秋にあつたと突つける　一鶴
ピンポンの秋は邪魔なものにされ　虹一
濯ぎ物先づ秋をば探して見　孤鶴
人知れず秋をひいた女給にて　耕朗
(秀)振袖の舞妓器用に通りぬけ　耕朗
(人)待ち切れぬ坊や秋を無茶にひき　孤鶴
(地)つまみだす銅貨秋のくずも出る　晴比古
(天)その戀も言はず振袖だきしめる　同

川柳雜誌社 松江支部 **部友偶會**　都之介報

二月九日

手と足と頭と搖れる曲線美　柳人
金に日のない支那人の勇敢さ　同
持越のまゝで分れた座談會　同
すそばかり動いて踊幕となり　巷二
ルンペンの支那人らしい顏もある　同
座談會お茶が冷へてる佳境なり　同
舞扇裾がかすかにお茶にふれ　都之介
座談會むつりと女史すみにゐる　同

明珠居偶會（神戸）　西村明珠報

三月十八日

母　一夫選
母親の意見へ爪をつんでゐる　明珠
(人)母は未だ鋏の音と起きてゐる　秋彦
(地)不孝者母の猫背を見まいとし　明珠
(天)子の爲めに母は心をゆるめない　同
(軸)父兄會母々々の瞳がならび　明珠選
紛失　明珠

紛失の品を巡査に笑はれる　秋彦
大騒ぎ子供が持つて遊んでゐ　春秋
(人)世は春だ子供を紛失して親　一夫
(地)鋏ならこゝにあるよと母娘縫ひ　春秋
(天)紛失の丘へ雲雀が啼くばかり　秋彦

繃帶　秋彦選

繃帶が汚れがちなる主婦の指　一夫
繃帶のいやひどい目に會ひました　春秋
繃帶へ國母陛下の立ち給ひ　同
繃帶を圍んで慰問隊の顔　明珠
(軸)繃帶の子に電球を變へてやり　秋彦

ラヂオ　春秋選

ラヂオ今ラツキーセブンに聲高し　秋彦
出納簿管絃樂をとめておき　明珠
公園のラヂオへ希望のない瞳　一夫
今晩のラヂオに知つた唄があり　明珠
(軸)内職へではお休みとラヂオいひ　春秋

綠雨居偶會

四月六日　橋本綠雨報

陽當りの葡萄棚へと手をのばし　鮎美
陽當りについてくやうに孫の守　水車
陽當りが少なし借家住まゐなり　今雨
陽當りの淋しさ落葉の音ばかり　葉光

八歩君來聖（大聖寺）

三月廿八日　白花子報

夜汽車　白花子選

(佳)鞍替の女の涙夜の汽車　醉羊
夜汽車ふと不安が迫る窓ガラス　八歩

無理　吉祥選

盆栽の値打へ無理に曲げられる　白花子
病む俺の無理な願を母はうけ　水玉

櫻餅　八歩選

あつけなく拾錢の櫻餅はすみ　醉羊
櫻餅山で喰ひ野で喰ひ里で喰ひ　白花子
櫻餅處女をつゝんだやわらかみ　同
櫻餅珍らしそうに里の母　溪鶯
(佳)宵の雨戀でもしたい櫻餅　山々

白酒　山々選

白酒へ妻も醉はしてみたくなり　八歩
白酒へ雛のお客は眠くなり　同

珍客　水玉選

珍客へ丁稚小聲で頼まれる　八歩
あゝ忙しや珍客へ臺所　白花子

耳　醉羊選

判らないながら打診へ耳が寄り　吉祥
耳寄な話だが聞くだけにする　溪鶯

突然　溪鶯選

突然に會つた知人へ言ひ詰り　八歩

華水居偶會（神戸）

二月廿九日夕　日野華水報

題　OK

OKでソフトを輕く持つて立ち　竹風
OKへヴイツク音なく辻を折れ　春秋
OKのダンサアとして夫あり　同

蛙柳會（第二回）例會（大連）

二月二十八日　潮居（薫）報

題　姿見　柳路選

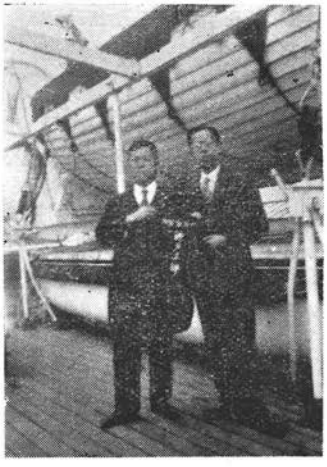
姿見の店でネクタイに手がさわり　潮
獨り者姿見買つて當てがあり　薫
姿見にこうも痩せて病と上り　淑朗
姿見へもう一度見なほす目が映り　村雀
引越に姿見丈けは別に行き　虚舟
(秀)姿見につくづく顔の皺をなで　薫

題　憤　柳路選

(佳)ランデブウ待たされたのか憤つて居　淑朗
(同)憤つた後で愛する策もあり　長江
(同)揶揄へば女給憤然立つて行き　薫
(人)憤然として酒の味もなし　虚舟
(地)憤る心抑へて年が寄り　村雀
(天)憤る心へ叱る母がなし　同
(軸)荒つぽく座つて膳をねらみつけ

題　世帶、色、國難、戀、按摩、金　柳路選

(秀)蒸し釜の一つも欲しい新世帶　村雀
(同)繕つた足袋に世帶の締り見せ　淑朗
春の色まづ雛壇に崩えはじめ　潮
色紙の鶴へ一人つ子疳を立て　薫
(秀)三味の音へもう色街の灯が點り　村雀
(同)顔色もほんのり退院近くなり　淑朗
(同)色紙に一日遊ぶ幼稚園　虚舟
(軸)背なの子に色刷のビラ渡される　薫
國難をよそに支那人儲けて居　長江
(秀)國難へかゝわりもなく娘子軍　薫
戀文を燒いて新生活に入り　同
女房に按摩をさせて恙かなし　長江
つれづれに按摩を頼む獨り者　潮
按摩相手に時局を語る夜の永さ　柳路
(軸)冬籠り按摩を頼む宵の口　村雀
(人)まだ金も出來ず一人身三十四　薫
(地)嘲笑を正面に受けて蓄めて居る　村雀
(天)夜が更けてつくつく思ふ金の事　柳路
(軸)殘金が合わず出納まだ殘り



編輯の窓

路生郎

▼川柳の社會化を提唱し、その機關誌として刊行した本誌が本號で百號に相當するので、我が社では百號記念特輯號を刊行すると共に朝日會館で宣傳と祝賀を兼ねた別項の如き催物をすることになつた。又記念句會をも開催することになつてゐるので盆と正月が一度に來たよりも、もつと忙しくために、特輯號の如きは平常の月よりも遲刊することになつた。全く申譯のない次第である。五月號はまだかまだかと押しかけられたので恐縮してゐる。

▼そのかはりと云つてはお可笑しいが特輯號の內容は徒來とよほど趣きを異にしてゐるので、面白く讀んで頂けることゝ信ずる。長崎柳秀氏の「光琳と竹の皮」長谷川一徹氏の「春宵語」淺田右聞氏の「醫學常識を評す」は三氏とも醫學博士である。三勇士の流行する時節に三醫學博士も面白いだらう。右聞氏では柳友間には通じないかも知れないが、小笛殺しの鑑定で有名な淺田一博士のことである。百號に因んだ原稿では森東魚氏の「百號に因む」蛭子省二氏の「百編から」藤里好古氏の「川柳百度詣」の三篇、古句研究の三人揃ひである。又窪田銀波樓氏の「北陸川柳史」大島濤明氏の「滿洲川柳行脚」安川久流美氏の「路耶氏の近作から」前田五健氏の「似鈍敏感」岡田三面子氏の「イヤな詠史狂句の例」等いづれも特に本號に寄せられたものである。なほ長野吉高氏の「柳の絮」の續稿はます〳〵佳境に入り、岩本素人氏の「磯野を行く」の句評又必讀の文字である。

▼表紙は本誌創刊號以來最も因緣の深い紫谷紫舟氏の揮毫になるものである。

▼百號記念の祝賀と宣傳の催物を別項の如く朝日會館で開くことにしたが、自分が朝日會館を借りて川柳の社會進出をやらうと云ひ出したのは六年も七年も前の話である。誰でもホントにしなかつたが東上した時劍花坊氏と雜談中にもその事も談したそしてその實現はまだ〳〵遠いかも知れぬが、いよ〳〵やるとなつたら講演をお願ひするかも知れないと云つたら、劍氏は、よろしい其の時は何んとでもして行かうと快諾してくれた。それから數年ノ後、劍花坊氏は川柳の王道論をとなへ次いで無產川柳をへうぼうして私達の主張よりも、俠義の川柳觀を抱懷されて「川柳人」は「川柳人」のみの柳界をかたちづくるやの觀があつたが前約もあつたので講演を依頼したところが、いまのところ行けるといふ返電に接したので前號で劍氏の來阪を豫告して置いたが、その後、劍氏から御都合がつきかねる旨の通信に接したので萬止むを得ずプログラムを變更して、水府君にやつて貰ふことにした。

▼四月三日の早朝、關東川柳團の人々が大擧して來阪した。二日の夜、京阪神川柳團最後の打合せから戻つて、何とかしてゐるうちに、三時になつた。病後の靜養中ではあり、驚いて床に入つたが碌に寢なかつたらしい。眼をさましたら五時だつた。起してくれるやうに頼んで置いた娘はまだすや〳〵と眠つてゐたが私が起きたので驚いて床を出てくれる。いつも、しんがりで駈けつける私がこの日ばかりはよほどうけしかつたと見えて大阪驛では私が第一着だつた。少し遲れて小太郎君が來たやうに覺えてゐる。案內の方は萬事、水府君に頼んであるので心配する必要はなし、それに我社からは琴人君、新水君等が擔當してくれてゐるので、私は受持の句會の方へ出かけることにした。句會は數に於ては二百十名の出席で、あまり多數とは云へないが、東西の巨頭連が一堂に會したといふ點から云へば、柳界空前のことであらう。句會ではあまり親しく話も出來ないので、せめて宴會場でと思つてゐたが宴會が又豫想以上の出席率を示した。宴會場はまるで芋を洗ふやうな混雜である遠來の客に對して誠に恐縮の外なかつたが、各委員の努力、料亭使用人の汗だく〳〵の奮闘ぶりを見ては、挨拶の仕樣もない。そこで「こんなに混雜するほど歡迎された

と思へばお客側でも満更悪い氣もしないだらうと、自ら慰めてゐた。さう慰めてはゐたが、氣の毒さは少しも減じなかつた。

▼久良岐翁と驛頭で第一に握手した自分は句會でも宴會場でも親しく語ることをしなかつた。それは私が例へ暫くでも翁を獨占するよりも若い人々、始めての人々に讓るべきだと思つたからであつた。私としては數年前神樂坂下で共に呑んだ、あの時よりも遙に元氣な翁を見たよろこびで充分だつた。私位度々翁に來阪をすゝめた者はゐないだらう、がいつも神經衰弱で汽車に乘れないといふ理由で下阪されなかつたのであるから、私のよろこびは來阪されたといふことでつきてゐる。

▼三太郎、雀郎、五花村、周魚○九、迷亭、玉兎朗、茶六、しげをの諸君とは、いつでも會へるやうな氣がするし、事實會つてもゐるので、なるべく若い人、はじめての人と話しながら呑みたいと思つてゐたが、あの混雜では身体を持つて行くことも出來ないので遺憾ながら止した。近くの人とだけ話して失敬してしまつた。身体でもよくて、カンと酒でも呑めると當分捕虜にして置きたかつたが、それも諦めた。そうまでしなくつても今後度々會へる機會があるだらうと思つたから。

▼金澤市で開かれる產業と觀光の博覽會記念川柳大會へ出席する爲、橋本綠雨、高橋かほるの諸君と共に四月十六日午前九時の臨時列車で出かけた。十六日は片山津の湯の出旅館で一泊、翌十七日の午前十時前に金澤着、兼六公園の櫻の下で記念撮影後川柳大會に出席、夜は淺の川常盤橋畔の鮒屋で歡迎宴、その夜は窪田銀波樓氏の邸で御厄介をかけた、翌日の午後三時五十九分で銀波樓氏と久流美氏に見送られ金澤をあとにした。久流美氏は私の列車にそのまゝ乘り込みいつの間にか小松についた昨夜一部の人たちには會つたがいつか訪れて親しく談笑したいと思つてゐたので久流美氏にすゝめられるまゝ、こゝで下車した。その夜福源樓で歡迎宴を催され圖らず愉快な一夜を過ごした。その夜の人々は支部の錦水君に芦城吟社の松水、革刄、柳村、井々樓、大左穗等の諸君であつた。柳一路君には生憎會へなかつた。久流美君のアゴのひげを剃つてやらうと思つて驛前の萩下旅館へレザーを賴んで置いたが遂々手に入らなかつた十一時二十分に雨の中を二三の柳友にプラットまで見送られ十九日の午前八時に歸阪した。旅中御厄介をかけた北陸の人々の御好意を深謝する。

▼簸川支部の五周年の記念川柳大會へは是非出かけたいと思うが今のところこちらの會で息がつけぬ有樣なので全く見當がつかぬ。僕は綠之助君に會ひたいのだが、行く行かぬは別として盛會を祈つてゐる。

▼生田翠夢君は鄉國大和の官幣大社石上神宮へ先考の遺志に基いて常夜燈を献じた。その除幕式が四月二十九日に行はれたので川柳の献句もあり、その選句朗讀と祝辭を述べに丹波市町へ出かけた。

▼忙しいひろし君から久しぶりに封書が届く。開いて見れば海豚料理屋「新明石」の紹介。その次に來たのが欣女の三周忌をすました知らせ。帝大で柳秀に會つたら、ひろつさんのやうに死んだ女房のことばかり書いてはアトへきてがないぜとのこと。ひろし君はあれで強いところもあり、弱いところもある男だ。もつと外の手紙を寄越すこと。

▼萬よし君が滿鮮視察に行つたのを好機に大連でも奉天でも撫順でも京城でも盛んに歡迎して下さつたそうで感謝の外ありません。

▼萬よし君が大阪市議一行二十名の滿蒙視察團に加つて四月五日、神戸港を出帆した。神戸支部の幹事日野華水君がばいかる丸へ見送りに出かけ、その行を盛んにした。寫眞は華水君が撮影した萬よし君と華水君。

▼萬よし君の旅行中滿洲は勿論朝鮮に於ける柳友諸君が盛んに歡迎して下さつたことを私からも厚く御禮を申上げたい。

（寫眞説明）右は滿洲へ旅立つ萬よし君、傍は華水君、左は故洲馬君

▼五月一日に山口縣防府町で防府川柳會と山口川柳社の主催で第十一回川柳大會が開催され、故柳川洲馬氏の追悼句會を併せ執行することになつたと聞く。私もこの追悼會には出かけたいと思つたが、本誌の百號記念事業のために出かけることが出來ず、久賀町にゐる舊同人の吉川啞人君が出席してくれることになつたのをせめてもの慰めとしてゐる。故人は舊冬十一月二十六日に突如として永眠されたのである。

× ×

投稿規定（改正）

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第九卷第七號課題

五月五日締切（各題十句以內）

▼皺　福田山雨樓選

▼階段　朝田新水　中島鐵洲　共選

第九卷第八號課題

六月五日締切（各題十句以內）

▼腕　前田五健選

▼波　松丘町二選

每號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼光耀抄（雜吟廿句）　麻生葭乃選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年四月廿五日印刷
昭和七年五月一日發行
第九卷第五號（每月一回一日發行）
編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸二郎
發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番
事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

川柳雑誌社關係の人々

（順はろい）

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清一　淺田一　末弘嚴太郎

客員

伊藤彦造　鳥山一歩　森東　藤里好古　蛭子省二　篠原春雨　柴谷柴舟　前田五健　前田雀郎　安川久流　窪田銀波　田村孝介　吉田清平　岡鳥　川村花菱　米村あん馬　西村明珠　石曾根民郎　松下小柳子　山本雨迷　日野華水　庄萬よし

社友

大島濤明　大谷五花村　岡田三面子　龜井花童子　川上三太郎　生田翠夢　伊藤緑之助　桑原京郎　姫田夕鐘　平井蒼太　錦水　岩垣奇可愛　上野梅里　阿部閑生　關本雅幽　中澤濁水　松夢裡　白井梅里　谷鮎美　朝田新水　閑生　井圓角　樋口新水　十九主幹　永田里　中島鐵洲　住田亂耽　見光路　竹内多聞　安西杏三　高橋かほる　福田山雨樓　中野柳陽　三輪夏曉　中川めかく子　水田光穂　木村晃卓　左馬　辻　立井登美坊　喜多春秋　北山悟郎　田中都之介　吉田水車　櫻井圓角　阿形一杉　越田久水　岩崎柳路　松丘町二　松盛琴人　西田帥樂　太田朝陽　福田雀郎　亀井愚寵　片桐靈霊　川村觀月　楊井二南　岩本素人　山本丹路　安井ひろし　橋本緑雨　伊藤愚陀　須崎豆秋　妹尾變人　日野華水　山本雨迷　桑原京郎　姫田夕鐘　平井蒼太　錦水　岩垣奇可愛　上野梅里　阿部閑生　關本雅幽　中澤濁水　松夢裡　白井梅里　谷鮎美　朝田新水

同人

編輯局（同人）

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天満支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事川村　觀月
螢ヶ池支部（大阪府）幹事龜井　愚寵
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
箕川支部（島根縣）幹事伊藤　緑之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村　晃卓
堺支部（堺市）幹事友淵　貴山
松山支部（松山市）幹事坂井　拓水
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事櫻井　圓角
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事田中　都之助
塗青支部（大阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井　英賀夫

祝創刊一〇〇號

大阪帝國大學醫學部 長崎柳秀	南海電車 池澤樂居 大阪府下高師ノ濱	阿部閑生 大阪市外豐中千歲通二丁目
富士野鞍馬 東京王子堀ノ内一三四	大嶋濤明 大連市西公園一四五	魔十窟 朝鮮光州湖南町蛭子
上野錦水 石川縣小松町本折町 電話五十八番	岩崎柳路 岩崎松代 撫順東二條五八	山本丹路 大阪市南區鹽町一ノ五一 船塲三四七七番

祝創刊一〇〇號

增田耕民
鳥取市川端町一丁目

杉谷湖山
鳥取市職人町

川柳雜誌社
塗青支部

川柳雜誌社
御池橋支部
西區四ッ橋南
日本樂器會社大阪支店內

川柳雜誌社螢ケ池支部
赤城晴夫
龜井愚寵
濱渦紅蔦
三谷梨風

松丘町二
大阪市東成區別所町五〇二

安西杏三
大阪市東成區北清水町八九一

庄万よし
大阪市南區新戎橋南詰

大阪市東區今橋二丁目
關西土地株式會社
八田鐘生
大橋素月
竹原一久
小西無鬼

今村吉朗
尼崎市中大物町六〇

阪崎串二
尼崎市中大物町五一

清水虚白
尼崎市西大物町五一

祝創刊一〇〇號

北國川柳會
越中今雨

蟷螂川柳社
河野夜王
大阪市東成區鳴野町三〇〇ノ五〇三

嶋田翠峯
大和龍田町五百井

川柳雜誌社
神戸支部

川柳雜誌社
松江支部同人一同

西村山月
大阪市東成區深江町九八九

高見柳骨
神戸市外山田村鈴蘭臺

岡田陽喜亭
大阪市東區鎗屋町二ノ二六
電東三二一二番

酒井駒人
平塚市明石町

松盛琴人
大阪市此花區上福島南三丁目六六

伊藤愚陀
大阪市東區仁右衛門町
五〇八

住田亂耽
兵庫縣武庫郡魚崎町
五九二八ノ二

福田山雨樓
大阪市浪速區湊町保線事務所
電話戎一〇〇三

高橋かほる
大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九六番

中見光路
大阪市西成區粉濱西之町
三丁目三番地

川柳雜誌社
天王寺支部

祝創刊一〇〇號

前田五健
松山市眞砂町二一

川柳雜誌社籔川支部
尼綠之助
島根縣今市町

川柳雜誌社鳥取支部
中島鐵洲
鳥取市川端町一丁目
電話二一八八番

西田艸樂
大阪市東區岡山町三七四
電話東二二八二番

川柳雜誌社別府支部
木村晃卓
別府市下野口

大久保大夢子
大阪市住吉區
阿倍野橋筋二丁目三五

吉川啞人
山口縣久賀町
電話一四番

竹田芦穗
大阪市港區八條通二丁目

月刊誌「あけぼの」金十錢
久田狂水
福島縣石城郡磐崎村

雪峰改
池田享史
三重縣飯南郡櫛田村豊原
電話四番

高峰柳兒
長野縣須坂町絲の街川柳會

大西八歩
大阪市東區博勞町一ノ一八
(竹中方)

金泉萬樂
尼崎市西本町北通二丁目
五八

名越不然
神戸市灘區大石一五ノ九

竹内機見女
大阪市天王寺區
上ノ宮町五六ノ三

川柳雜誌社田邊支部
辻左馬
和歌山縣田邊町中屋敷町

硲一流
大阪市西淀川區
大和田町四四八

石曾根民郎
松本市大名町

祝創刊一〇〇號

紙齡百號を御祝ひ
申上げます

岸本水府

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋一丁目
電話南四一八八番

醫學博士　長谷川成一
私宅　大阪市東區大手通二丁目

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は違うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二番

祝創刊一〇〇號

川柳雜誌社 梅田支部

水谷鮎美　大阪市西淀川區大和町六三六
天野卜居　大阪市住吉區喜連町二一九六
本橋坊茄子　大阪市北區金屋町二丁目一七
川村觀月　大阪市西淀川區野里町五六 米山方
姫田夕鐘　大阪市港區東田中町八ノ四四
小寺鳴玉　兵庫縣武庫郡大庄村字西榮地四九五
上久保まさる　大阪市西淀川區浦江上二丁目五八
都藤古木　大阪市此花區上福島北三丁目一二
横田方眠　大阪市西淀川區姫島町五二一
永田里十九　大阪市南區疊屋町六

川柳雜誌社 鶴町支部

石村正路
井上稔枝
岩橋岩石
林しげる
加藤一笑
田中たかを
松下小柳子
照屋寛柳
青山一龍
宮岡白峯
三石狐山
妹尾變人
關本雅幽
角田のぶを

橋本綠雨

大阪市往吉區平野西ノ町八三
電話天王寺一一六七番

綠雨居偶會

五月十日午後七時より
兼題「未開地」
會費不要
本社の事務所にある他の柳誌を見ながら語りませう。

懸賞川柳募集

題「香水」　路郎選
四月十日締切　その他雜吟を募る
▼用紙　官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品　秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟　大阪市玉出本通三の三六　麻生路郎氏宛

化粧新聞社

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願ひます
大阪市天王寺區北河堀町六三
會報係　福田鶴蜂宛

弊社の工場

祝創刊一〇〇號

設備

輪轉機と數臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

營業種目

新聞雜誌、印刷圖書版引受、紙型鉛版活字製造販賣
各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が緣とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社釀

にきびとり 美顔水

面白い様に効く！

年來の信用！的確の効果！

▲**ニキビ吹出物に**――頑固なニキビ吹出物にも本當に確かに、而も何等の副作用をも伴はず、目に見ゑてよく効くので非常な評判です！年來の信用！効果は彌々向上してゐます！

▲**眞正の美の成長**――尚ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へん喜ばれてゐます！

▼**素顔の美を貴ぶ御家庭人の親友**▲

發賣元 株式會社 桃谷順天館

大正十三年三月五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和七年四月廿五日印刷納本 昭和七年五月一日發行

川柳雜誌（第一〇〇號）

定價 金三拾錢